



見ろ
朝日田、
これが
1位の景色
だ!!!

マンガ大賞
2025

売野 榛子
KIKO URINO

マンガ大賞2025決定!
選考員コメント掲載!

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2025 マンガ読みが選ぶ2024年の一推!!

マンガ大賞2025 大賞受賞作品

週刊ビッグコミックスピリッツ / 小学館

「ありす、宇宙までも」 売野機子

選考員コメント・1次選考

■ 「度胸星」、「宇宙兄弟」、主人公が宇宙飛行士を目指す漫画で特に大好きな作品です。そこに彗星の如き勢いで入ってきた漫画。それが「ありす、宇宙までも」です。これに関してはあらずじを説明するのも野暮なんじゃないかと思うくらいに「読んだら分かるから」という感動的な面白さの作品です。必ず終わりまで見届けたいと思う大好きな漫画です。是非読んでみて下さい。読んだら分かるから (笑)

芸人 / ムーディ勝山

■ 「宇宙兄弟」や「プラネテス」など、宇宙飛行士を目指す名作は多々あれど、こんなにも微細で優しい視点から紡がれた作品があったらどうかという感動と、誰にでもある冒険心を掻き立てる単純明快な面白さ。やっぱりこの作家さん天才なんだと思います。わくわくが1話からずっと続いていて、そのテンションが下がらず、ハッとする瞬間やじんわり涙目になるようなエピソードの間も、何処かでわくわくしっぱなし！今1番続きが気になる漫画です。

中央書店 / 井出麻悠美

■ 何もかも持っているように見えるのに過去の出来事から自分の自信を失った女の子と、宇宙飛行士になりたいという夢を取り戻してくれる王子様…というには少しクセの強い男の子ですが、突拍子もない様な夢も受け止めてくれて、そして叶えるために差し伸べてくれるなんてこれは間違いなく王子様ですよ！！？この組み合わせが嫌いな女子はいないでしょう！導入からぐいぐい引き込まれてしまいました。最初からニコニコワクワクしてしまいます。言葉にしていくことで主人公の世界の解像度があがっていく、勉強することでもともと持っていた純粋な才能が引き出されていく。テンポよく展開していくので2巻なのに読み応えがあります。売野先生の過去の作品に通じる繊細さもありながら、今までで一番キラキラしていて、勢いがありますね。先が気になります。

公務員 / 宇田川結衣子

■ 2024年圧倒的ナンバー1！著者の初めての単行本サイン会に行ったほどにファンをしているが、まさかこのような作品を描く漫画家になるとは想像もしていなかった。どの作品も着眼点が独特で、それでいて時代を捉えているテーマがさすが。主人公のありすとそれをサポートする犬星くんが中心となりつつ、周りの子供達にもスポットをあてる群像劇。週刊誌連載だが、内容はほぼ月刊誌のような読み応えのある内容。ありすの長所をうまく使って問題を解決していく様はよくこんなことを考えつくな…とただただ感心した。

bar 図書室 / 岡部愛

■ 売野機子さんの昔の短編集が好きで、そのころの絵柄がとっても好きでした。この作品ではその頃とはガラッと絵柄が変わっていて、前好きだった分どうか…と思いながら読み始めたのですが…悔しいくらい面白かったです。というかとっても好き。なぜ、そう思うのか？をしっかりと向き合って噛み砕いて、気持ちよく腑に落としてくれる、ハッとする気持ちをたくさんもらえます。この先の2人の成長を見守れることを、心から楽しみにしています。

WEB制作・ディレクター / デザイナー / 河本智芳

■ 夢をかたちにしようとする様は美しい。「苦手」なものがあるもの同士の男女中学生が二人三脚で宇宙を目指す。1巻目でもうぐっとくる、期待作。

NIC リテールズ(株) 書籍仕入部 / 池本 美和

■ 小学6年生の朝日田ありすは容姿に恵まれ運動神経も良いクラスの人気者だけど、ちょっと周りの話していることが理解出来ず、天然ちゃん、不思議ちゃんと思われていた。同じく小学6年生の犬星類は神童あるいは怪物とも呼ばれ、勉強に秀でるがその理屈っぽさで周囲に煙たがられる存在。真逆のふたりが出会い、少年が少女自身も気付いていないその悩みの本質に気付いた時、少女は諦めかけていた夢を改めて語り動き始め、少年もまた、おそらく自分自身も気付かぬうちに変わり始める。少しずつ歩みを進める彼女の姿に爽快感を覚え、夢を語る彼女の瞳の輝きに惹きつけられる、そんな作品です。

会社員 / 津田圭

- ほんわかした可愛らしいタッチながら、リアルでシビアな描写に心を揺さぶられました。夢を追う素晴らしさ、困難に立ち向かう勇氣、そして自分自身の生き方を見つめ直すきっかけをも与えてくれます。誰にも理解してもらえないハンデを抱え、人生に絶望していた少女・ありす。彼女は天才少年・犬星くんと出会いによって希望を見出し、二人は宇宙飛行士という壮大な夢に向かって歩み始めました。犬星くんもまた、ありすとの絆を通じて孤独から解放され、二人はお互いにとってかけがえのない存在になってゆきます。試練を乗り越えながら成長していく二人の姿には胸が熱くなり、「自分も頑張ろう」と背中を押される気持ちです。この作品が持つ美しく力強い希望を、一人でも多くの人に感じてもらいたいです。

接遇スペシャリスト／ライター / 田邊加奈

- セミリングル(バイリングルの逆でどちらの言語も中途半端になること)の少女、ありすが宇宙飛行士を目指す物語。犬星くんと出会い、自分のこと、世界のことを少しずつわかるようになって、前へ前へ進もうとするありすちゃんに胸を打たれます。宇宙飛行士という職業について詳しく知れるのも面白いですが、そこでの子供達の悩みや葛藤が丁寧に優しく描かれていて応援したくなります。

声優 / 富岡美沙子

- とても可愛い絵柄に反して、内容は予想よりずっとハードでした。まだ中学生のありすの、「生まれ直さなくても、いいってこと……？」という台詞に胸が苦しくなります。それでも楽しく読むことができるのは、まっすぐでひたむきなありすと犬星くんのおかげです。今はまだ無知、でもそれが故にピュアで感受性豊かなありすの目を通して、世界の素敵どころ、素晴らしいところを再確認できます。そんなありすを導く、これまたとっても魅力的な犬星くんについてはまだまだ深掘りされていないので、これからが楽しみです。

主婦 / 堀江千秋

- どこか平成初期を感じさせる絵柄で紡がれる、令和の宇宙漫画です。幼少期を様々な国で過ごした経験により、日本語も英語もわかるけれどどちらも拙く、言語コミュニケーションに苦勞をしている主人公のありす。それが「セミリングル」と呼ばれる状態であることを、同級生の犬星くんから教えてもらいます。神童と呼ばれ、物知りな犬星くんがありすに勉強を教え、ありすが口にした夢「宇宙飛行士になること」が二人の目標になる。自分の置かれた状況を理解することで、生まれ変わらなくていい、私のままでいい、私のまま頑張ることができる、そう気付けたありすの行動力は目覚ましい。素直で真っ直ぐなありすが、自分を知り他人を知り、周りを巻き込んで前に進んでいく姿は、読んでいるこちらにも前を向き進む力を与えてくれます。「あたしね、今年の春に生まれたの。」というありすの台詞が印象的です。犬星くんと出会い、初めて自分を理解した瞬間、ありすの人生が始まった。迷いなくなり、やるべきこと、目指すべき未来が決まった人間は強い。犬星くん自身も、ありすを宇宙飛行士にすることが自分の目標になる。自分の力でこれまで学んできたことが、自分の人生が正しかったと証明したい理由が彼にもあるのだと思う。彼の心情もこれからもっと描かれていくと思うので、楽しみです。

会社員 / 堀尾素子

- あきらめずに学び続けること、前向きであることの大切さを教えてくれるマンガです。人は自分次第でどこまでもかわっていきける。

会社員 / 廣瀬公将

- 終着点が冒頭で提示されながら、そこに至る2人のストーリーにワクワクする

会社員 / 齋藤隼

選考員コメント・2次選考

- 繊細な喜怒哀楽の表現が魅力的。小さなことに喜び、悲しむ。出来ないことが出来るようになる過程とその喜びを親の気持ちで見失ってしまう。きっとこの先、知識をつけることで宇宙飛行士になるための壁に何度もぶつかるだろう。その時、ありすと犬星君がどう乗り越えるのか、とても楽しみだ。主人公だけでなくサポートする側にもしっかり焦点が当たる素敵な作品。

スターダストプロモーション・アイドル / 秋本帆華

- 物語の展開の巧みさとキャラクターの奥深さに、終始圧倒されました。一話ごとの引きが絶妙で、次の展開が気になり、気づけば夢中でページをめくっていました。特に、ありすの夢をサポートする犬星くんの揺るぎない信念に、強く心を打たれました。困難に直面しても決して折れることなく、自分の意思を貫くその姿は、強さと誇りに満ちていて、心から尊敬します。この作品を通じて、「本気の想い」が持つ力を改めて実感しました。その先に広がるのは、まぎれもなく希望なのだというメッセージが、心に深く響きます。また、人の立場に立って考えられることの大切さを、改めて教えてくれる作品でもありました。作中で描かれる「夢や目標のために学ぶことの楽しさ」は、私自身の人生にも通じるものがあり、大いに共感しました。希望に満ち、学びの喜びを感じさせてくれるこの素敵な物語が、一人でも多くの方に届くことを願っています。

接遇スペシャリスト/ライター / 田邊加奈

- 近年生きづらさを抱えて生まれた人を描く作品は数多くあるが、この作品のような後天的な生きづらさを描いた作品はあまり見ない。テーマがとても斬新。ボーイミーツガールの少年少女の成長ものと一括りにしたくない、話の巧みさも輝いている。毎話待ち遠しいです。

bar 図書室 / 岡部愛

- 普通とはちょっと違ったボーイミーツガール。朝日田と犬星の関係性、距離感が新鮮で心地よいです。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 犬星くんのヒーロー感とありすのヒロイン感が爽快。私もありすと一緒に犬星くんに教わりながら読みました。自分がどんな人間か分からず、他者からの評価によって作られた小さな箱に閉じ込められたありますが、自分を知り、自分がどうしたいかを知って成長していく姿は、星のごとく光り輝いていて胸を打たれました。この先はまっすぐどこまでも、宇宙までも、見渡せる未来しかない。学生さんにもおすすめしたい作品です。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 現実を受け止めても前を見て進もうとする少女たちに胸を打たれます。子供達の苦悩や成長を寄り添うように丁寧に描かれていて、私も漫画の外側からそっと見守っている気持ちです。小さい頃から英語も聞いてたら英語も喋れていいなあとふわっと思っていました、そりゃ両方喋れない可能性もありますよね。ありすちゃんの世界が広がっていくのをこれからも楽しみにしています。

声優 / 富岡美沙子

- 繊細な部分への触れ方を倫理的に把握できていると感じる作品。人は、何かをどれだけ知ったところですべてを知るわけではなく、知ると同時に知らなくなっていくことがあったりするもので、バランスって大事だよなど。ただ、そのバランスは自分で取るものか、他者と取るものかなど、それも場合によって違うもので？……などなど、いろいろ考えさせられる。おもしろい。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 読みながらありすが言葉を手にしていく過程で泣けてきました。ただの夢追い物語じゃなくて、まっすぐに生きることを肯定してくれる良い作品です。ありすの言葉が拙いのも、犬星くんが理屈っぽいのも、全部この物語に必要で、それぞれの視点で世界を知っていく過程がすごく丁寧に描かれてる。「親ガチャなんてクソくらえ」とか「生まれ直さなくてもいい」とか、転生ものが流行っている今の時代には余計に響きますね。

会社員 / 三浦佑樹

- まっすぐな作品。「知る」「学ぶ」ことによって自分の思考や表現の幅が広がる楽しさ・喜びに溢れていて、「なんで勉強なんかしなくちゃいけないの?」「こんな勉強して意味ある?」とか言ってる全学生に課題図書として読めとお薦めしたい。犬星の知識量がさすがに全方向に何でも知っているすぎて便利キャラすぎるだろうと思わないでもないが、そこで話の展開が詰まっても軸がずれるし長くなるだけなので、今の時代、スピード展開重視するなら仕方なし。知識の幅は、選択肢の幅になり、それは認識する世界の幅になる。これこれ本当の「自分探し」の物語だ。

丸善ジュンク堂書店・書店員 / 小磯洋

- セミリングルで勉強がうまく出来ず、周囲から浮いてしまっているのにそれが容姿の良さで隠れてしまう。そんなありすと同じく変わり者として周囲から浮いてしまう犬星が、自分達の可能性を自分自身で信じて、努力し伸ばそうとする姿が心に響きました。どのように宇宙飛行士になっていくのか、これからがとても楽しみです。

会社員 / 竹本 慧

- 生きづらさを抱えた少女が日本人初の女性宇宙飛行士船長になるまでの物語を描いた作品。ストーリーの面白さやキャラクターの魅力があることはもちろんだが、一見して大きい目標から逆算するアプローチ、やるべきことの細分化を行った上で素直に実行する姿、「子供は、自分の力で未来を変えることができる。」「なんにでもなれる。」といった随所に散りばめられた力強い言葉なども魅力的で、読むと「自分もどんどん前に進まない」という前向きな気持ちにさせられる。テンポもよく、1巻冒頭で示されたありすの未来に向けて、今後どのような物語が紡がれていくのか、3巻以降の展開が気になる良作。

弁護士 / 田邊幸太郎

- 宇宙に向かう物語。傑作は数々ありますがこの作品も2巻にして傑作です。自身がどう考えてそこに辿り着いてるのかとどどんと紐解かれて、気づくと泣いています。哲学対話面白いです。

オフィスオーガスタ マネージャー / 樋口健

- 宇宙に行くまでの過程が、単なる試練や作中イベントではなく、確かな成長過程として丁寧に描かれており、一話一話読み進める度に目が覚めるような、一つ一つ扉が開かれていくような独特な読後感がすごく好きです。

中央書店 / 井出麻悠美

- 宇宙の果てを目指すという行為は、究極的には自己探求のメタファーでもある、と思う。無限に広がる世界を前にして、人は有限である自分をどう捉えるのか。「無限（の可能性）」と「(完全なる)有限」。そのギャップが生み出しているものとは果たして…。主人公ありますが、読者の僕にそう問いかけてくれているように感じました。何しろ引き込まれますし、僕は43歳のおじさんなのに、何故だか少女に感情移入しちゃいます。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- 人気者で一見非の打ち所がなく見える少女ありますが、天才だが変わり者の犬星と出会い、これまでずっと抱えていた言葉の壁による生きづらさを晴らしてゆく。そして、宇宙飛行士になるという大きな夢を描き、前に前に進む物語。言葉の理解に難があった主人公を賢くするために、物事の意味や理由を丁寧に説明するシーンが随所で見られるのだが、こんな風に知識を増やしていけたら人生はもっと豊かになると気付かされる。二人の真っ直ぐな姿勢と成長する様を見て、何度も心が熱くなった。夢を持っていても、持っていないなくても、一度は読んでほしい。がんばるあなたの背中を押す漫画であるから。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

- 「この先も、きっとあたしは変わる。」すごく力をもらえるメッセージ、この作品に今出会えたことに感謝！ありすの特殊性と天才少年犬星くんのリードと読み進めるごとに互いの成長譚に繋がる流れがとても素晴らしい作品！まだ、2巻しか出てないなんて、これからの展開が楽しみでしかない！

俳優 / ジェネラリスト / 大倉照結

- 女性初の宇宙飛行士を目指すという過程がとても良く描かれている。どうやって宇宙飛行士になるんだろうというワクワク感が展開が気になる。登場人物の心情の描き方も上手で、とても爽やかな気持ちさせてくれます。まだ既刊2冊ながら次はどんな事をするのか、期待が止まらなくなる綺羅星のような漫画。続きが読みたいです！

主婦 / 岸本しのぶ

- ありすと犬星のパディ感が本当にいい。二人の距離感が絶妙で、最初はぎこちなくても、少しずつ噛み合っていく感じがたまらない。そして、何よりもありすの夢に向かう前向きさ、努力を惜しまない姿勢、そして強い想いの純粋さに胸が熱くなる。これから二人がどう成長して夢をつかんでいくのが楽しみになりました。

株式会社エイミング マーケティングプロデューサー / 伊藤千恵

- 二人の今後が気になるしこの先を見届けたい作品です。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- イラストが好きなタイプでまず入り、次第に内容もはまっていきました。ありすと犬星の支える姿がよいですね。犬星がここまでありすを応援する理由というのもこの先描かれると楽しみにしています。

デザイナー / 平沼寛史

- 「セミリングル」という言葉は知らなかったですが、それが悩みの真因だと判り、どんどん知識を吸収していくところにわくわく感がとまりません。1つの事を深く深く考えていくところとか、忙しさに忙殺されて、上辺だけで捉えている自分としてはまたこういう事をやってみたいと気持ちが躍りました。『宇宙兄弟』で知った部分はちょいちょい出てきて、こちら楽しいです。犬星くんの知識、解説が面白くてありすちゃんとともに「なるほど〜」を得ていきたいです！

株式会社アニメイト / 鈴木寛子

- 「不自由を感じたことがある人ほど、宇宙では自由になれる」という言葉にすべてが詰まっていて、ここにある救いと解放に泣きそうになる。「宇宙」は象徴であって、生まれついて牢獄に囚われているあらゆるひとが目指す「外」なのだ。ニューロダイバーシティに向き合うマンガとしては、「君と宇宙を歩くために」とともに生きづらさの対極を「宇宙」と表現してるのに共時性を感じる。

会社員 / 末永龍介

- 女性宇宙飛行士を目指す少女の物語。夢を持って目指したいと思っている人、夢の為に努力し追いかけている人、かつて持っていた夢をあきらめてしまった人、なりたい夢を忘れてしまった人、夢を追いかけてる人を応援し支えている人、自分の夢は何だろうと悩む人、人のなりたい“夢”に関わる、いや全ての人に読んで欲しい作品。要素所で誰かの心に刺さる言葉がある。自由にする。ありすの成長とともに、心に灯がともる。じっくりと読んで欲しい。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 売野先生新作嬉しい！と思って読んだらビックリ！爽やか&POPな絵柄で、あっという間に世界観に惹きこまれました。宇宙(どこ)までもってタイトルがオシャレ。昼間の星のように、意識しようとしても見えていなかった景色の解像度が高くて眩しい漫画です。特に1巻はテンポも良くて、老若男女読んで欲しいなと思わせてくれる1冊！

営業 / 佐々木つむぎ

- 女宇宙飛行士とセミリングル、できる人とできない人、色んな状況の中でもそれを良いと取るか悪いと取るかは本人次第。未来に希望を見出せる人はやっぱり強い！暗い今の時代にこそ必要な漫画だと思いました。面白かった！

OKAMOTO'S / オカモトショウ

- セミリングルとして育ってしまったために気持ちの言語化、思考するための言語化が出来ずに成長してしまった少女は少年と出会い、自分の気持ちを、やりたいこと、目標を見つけていくお話。彼女の歩みはとても力強く、爽快感を覚えました。この出会いは少年にも変化を与えるのか？続きが楽しみな作品です。

会社員 / 津田圭

- 聴覚が過敏でセミリングルによって母国語も外国語も達者ではなく、自分の感情も言語化が出来ないことによって苦しんでいる少女がガリ勉でひねくれ者という博士君キャラと出会うことによって宇宙飛行士を目指すという最高のボーイミーツ&ガールでありつつ、モノの考え方や言語化の方法など、現代人の多くが抱えているであろう「自他の感覚や捉え方の違いを自覚させる」教育漫画でもあるというお得すぎる構成、かつ目標に向かって邁進する王道という隙のなさ過ぎる二段構えに感服いたしました。

住職兼ライター / 蟬丸P

- 売野機子先生の作品がデビュー作から好きです！「ありす、宇宙までも」の連載が始まったときは、他作品とのギャップに驚きましたが、やはり先生のお描きになる世界観や哲学は良いです…！！ありすも先生も応援したいと強く感じました。今後どうやってありすが宇宙飛行士になるのか楽しみにしています！

声優 / 綾瀬有

- ありすというこんなにも魅力的な主人公に出会えた事にまず感謝です。これを読んだからにはありすを最後まで見続けたいといけないう使命感まで湧いてきました。主人公が宇宙飛行士を目指す漫画で大好きなのは「度胸星」「宇宙兄弟」でしたが、もちろん「ありす、宇宙までも」も大好きな作品になりました。あまりあらすじも説明したくないので、なるべく情報を入れずに読んでほしいです。

芸人 / ムーディ勝山

- 他の人と違う2人が自分の持ち味をいかして活躍するのも素敵ですが、ガッチリと齟齬なく噛み合った時のえもいわれぬ感じがたまりません。胸が熱くなります。

教師 / 持丸宏司

- 人に理解されづらい困難を「二人三脚」で越えようとする、そのシンプルさが胸を打つ。今後の展開に期待の成長物語。大好きです。

NIC リテールズ(株) 書籍仕入部 / 池本 美和

- 終着点が冒頭で提示されながら、そこに至る2人のストーリーにワクワクする

会社員 / 齋藤隼

- 学ぶことの大切さや、前向きでひたむきであることの大切さを教えてくれるマンガです。人は自分次第でいくらでも変わっていきける。このマンガのタイトル通りどこまでも。人の可能性を解放する物語だと思います。気を抜くとインプットされる情報に流されてしまい、自分と向き合ったり、学ぶことを怠りがちな自分にとっても刺さりました。

会社員 / 廣瀬公将

- まるで正反対な2人のバディ関係が、少しずつ道を切り開いていく様はいつだって痛快でわくわくしてしまうもの。手書きの枠線と独特のタッチで描かれる世界は、棘のあるような展開も、淡く綺麗な色合いを感じさせながら読み手に響いてくる。辿り着くであろう結末の画に向けて、朝日田ありすと犬星類という2人がどう成長していくのか、まだ駆け出し始めたばかりの今から注目していきたい。

会社員 / 伊東敬祐

- 全力で何かに取り組むことは学生の頃とても照れ臭かったけど、大人になっても恥ずかしいままなんですよね。このマンガを読むとその頃の気持ちを思い出しながら、主人公の全力で取り組む姿がとてもカッコよく見えてきたので、僕も少しはオトナになってきたのかも。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス 営業企画マネージャー / 阿部 大介

- 宇宙飛行士を目指す話はいくつか読んでいるけど、最初からコマンダーを目指すのは初めてかも。「一緒に乗りたくない」理由には「蹴落としたい」もあるから、気にせず頑張れ。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 周囲の人との違いにコンプレックスを抱きながらも目標に向かって直向きに頑張るありすの姿に感動！天才だけど歪な犬星も、ありすと共に歩んでいく中で日々成長しているという所にもグッときます。改めてコミュニケーションの大切さに気付かされる素敵な作品です。

会社員 / 小野塚博之

- ほんと、ありす、宇宙まで！行ってね！という清々しい思いというか清々しい空気がずっと胸を満たす。

ライター / 門倉紫麻

- 生きづらさにもがいたり壁にぶち当たること、その向こう側にちゃんと自分の力で歩いて行けること。突出した才能を持っていてもそれが「普通」に足並みを揃えることには向かないことがよくあって、でも少しのきっかけで全く別の視点からとらえてみたら誰にも真似のできない武器になる。めちゃくちゃヒーローものだなと思います。主人公にそのきっかけを与えてくれる相棒が大人や力を持った人ではなく、同じようにもがいている同年代の子供ということにも胸熱！ガールミーツボーイ！ボーイミーツガール！

元書店員 / 内野智未

- 宇宙飛行士を目指すありすの心情を繊細に描いている…だがただの夢追い話ではない。言葉が苦手なありすと、自分の知識レベルについてこれる人が周りにいない犬星。二人がタッグを組んで、宇宙飛行士は天才か秀才しかかなれない…そんな常識を覆す、誰もが工夫次第で「なんにでもなれる」を見せつけられる。ありすの辛くて狭い世界が一気に開けた瞬間は胸が熱くなります。生きづらさを誰もが感じる世の中で、ありすはひたむきに自由を求めて…天国の両親に近づくために宇宙へ…。

元 SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- 主人公が「宇宙飛行士になりたい小学生女子」という大胆な筋立てから、参謀役となる秀才男子が仲間として現れ、具体的にその可能性に向けて動き出す。中学生になった彼らには目標に向けてまだ無限に近い時間がある。その中

で一つ一つ課題を克服し、夢に向けて一直線に歩む姿がなんとも眩い。宇宙工学の専門知識も上手にストーリーに織り込み、主人公達がいつか夢を叶えるシーンを見れるのが楽しみだ。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

- 「生まれ直さなくてもいい。」という表現の、その言葉の重さがずっしりと響いた。自らの置かれた環境によって、全てが決まってしまうわけではない。言葉では理解していても、実際にそれを跳ね飛ばして進むことは難しい。しかし、二人は違う。ありすと犬星。共に成長し、自らの夢や信条を曲げずに突き進んでいくその姿。自分の凹凸を低く見る必要などないのだ、という前向きな気持ちや、忘れかけていた情熱、未来への期待感を感じさせてくれる。二人がこれから先、どこまでも進んでいく姿を楽しみに追いかけてたい。

会社員 / 杉佳尚

- キラキラと可愛い絵と、リアルな世界観。ありすがどんどん宇宙に近づく様にどきどきがとまりません。

女優 / 齋藤明里

- 自分のまま変わっていくということ。変化というどうしても、別物になるような、なりたい、ならなければならないような印象があります。全く別の「何か」になることが望ましいように思えてくる。ただ大前提、当たり前ですが自分は自分でしかなく、自分以外になることはできない。出発地点も変えられない。では変わっていくのは「何」なのだろうか？そんなことを考えながら読み進めていました。主人公のありすは、最初は自分が嫌で、自分という存在が不安定で、生まれ変わってやり直せたらいいのと思っています。ですが同級生の犬星くんと出会い、自分に可能性があること、自分のままで生きていけるということを知る。2人はタッグを組み、ありすが宇宙飛行士になるための計画を進めていく。「本当のあたしになる」というありすの台詞からは、彼女が自分のままで生きていくと決めた覚悟が、そしてその先にある可能性が見えてくるような気がします。そして「子供は、自分の力で未来を変えることができる」という犬星くんの信条は、彼が過ごしてきた日々から成る力強い言葉であり、この先の二人の未来を照らす道標になるのかな思いました。

会社員 / 堀尾素子

- ありすは犬星くんと出会って女性宇宙飛行士船長を目指していく。中学生からどんなふうにならぬかが成長していくのか楽しみです。

主婦 / 紺野泉

- 近年、JAXAの方々と直接仕事をする機会に恵まれている。宇宙に立ち向かっている現場という、デジタル、効率、計算、物理、エンジニアリング、と、妥協のない冷徹さを想像するかもしれないが、実際に現場に行くと、まったく逆。宇宙への最前線、JAXAの人々は、実に善良で、温厚である。宇宙船のフライトディレクターは万が一の際に絶対にむせないように、自分の仕事のおにぎりにはパリパリ海苔は選ばずかならずしっとり海苔を食べる。専門的な自分の仕事一般の方に理解されたときにもっとも喜び、失敗を温かいコメントで受けとめられたときに心から励まされている。仕事の内容は妥協をゆるさない苛烈なものだけれど、そのクオリティを支えているのは、人の気持ちとつながり。宇宙への最前線は、アナログ中のアナログ中な現場なのだ。この作品は、そのアナログ感、感情のやりとりが、ありありと描かれている。もちろん、人間らしいこじらせを見せているありすと犬星くんの二人のストーリーにそれは色濃く表れているが、個人的に、この作品を最も特徴付けているのは、「粹線」。手描きの粹線だと思う。作品の手触りを変えるこの粹線が機械的な直線ではないことの意味は、大きい。宇宙に立ち向かうときに人類が持っている一番大きな武器は、感情である。感情の力で、宇宙への歩を進めるストーリーのこの先を、リアルタイムで見たい。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- 読んでだけで、自分も成長していけるような知識と感情のつながりを感じることができる作品。新しい道を見つけるひとつひとつのシーンにワクワクさせられる。自分と向き合いながら人と接することの楽しさを再確認できて、読んでいて気持ちいい！この先が楽しみです。

WEB制作・ディレクター / デザイナー / 河本 智芳

マンガ大賞2025 ノミネート作品

週刊ビッグコミックスピリッツ / 小学館

「路傍のフジイ」鍋倉夫

選考員コメント・1次選考

- フジイが可愛すぎる。とにかく可愛すぎる。

PENICILLIN / HAKUEI

- この漫画が各所で賞賛されるのを見ます。それほど面白いし、モブのようなキャラが主人公という見た事ないような作品。しかし私は前作の「リボンの棋士」から先生の作品は好きだったし、「路傍のフジイ」が面白くて自分の目に間違いは無かったという喜びも込みで挙げさせてもらいました（笑）

芸人 / ムーディ勝山

- 他人の目や世間の評価に惑わされず生きる主人公フジイ。周りにどう思われるかなんて一向に気にせずに、自分の気持ちのとおり思うがまま、やりたいと思ったことをやりたいようにやる（でも真面目に、でもある意味で自由奔放に）フジイが羨ましい。映えなんて関係ない、人の中にも何が好きだとか何ができるとか、アピールなんてしない。でも近くに寄ると教えてくれる。世の中の軸に合わせなくていい、自分が自分であるだけでいいんだって思えて、なんて居心地のいい人なんだ。承認欲求に飲まれて人の目を意識して発信することがスタンダードである今、こっそりありふれた生活を楽しみ、そうはいつてもちゃんと起伏のあるこのフジイのような生き方がなんだかほっとしてしまいます。タイトルも表情もいいですね。2巻のラスト、お父さんお母さんの顔が出てきてどっちにも似てるのがツボでした。今季イチオシの作品です。

公務員 / 宇田川結衣子

- 主人公はパツとしない普通のサラリーマン。会社でも目立つこともなく、いつも何をして、何を楽しんでいるのか分からないそんな存在。でも関わってみたらそのフジイさんに大きく人生感を変えられる。普通のサラリーマンがある意味心の“ヒーロー”になる。フジイのぶれない、芯があり、偏見や忖度のない“まっすぐなフジイさんの生き方”に惚れる。今の時代に必要なのかもかもしれない。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西 良昌

- 私たちの日常に起こる、普通なら気にも留めないような出来事が静かに淡白と描かれている。大冒険も修行もワクワクするような題材では無いはずなのに、どうしてもページを捲るを手が止まらない。フジイの行動、表情、少ない言葉に、自分を受け入れてもらえるかのようなあたたかさを感じ、自分らしい選択をする勇気をもらえる。幸せの概念をぶち壊してくれた。

スターダストプロモーション・アイドル / 秋本帆華

- 誰もができそうでできないフジイの生き方に共感しながら読んでいます。そしてわたしも少しはフジイのように自分を楽しんで生きていきたいなと思える1冊。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- 魔法や異世界が流行る今の漫画の世界で、一見ごく普通（より地味か？）の生活を送る主人公とその周囲。なぜか…気になる！

本と文具ツモリ西部店 / 津守晋祐

- 今さら私が推さずとも、この作品が多くの人に評価されているのは周知の事実ですが、こうした作品が正当に評価される世の中であってほしいと願い、一票を投じます。一見「こんな男にはなりたくない」と思わせる地味でつまらなそうな40代男・藤井。周囲から「何が楽しくて生きてるんだろう」と見られつつも、他人の価値観に左右されず、自分のペースで人生を楽しむ姿が印象的です。彼と関わる人々が変わっていく姿には、清々しさを感じずにはいられません。藤井の良さに気づけた自分を少し誇らしく思ったり、軽んじていた人々が彼の魅力に気づいたときは、「やっと気づいたか！」とニヤリとしてしまったり。いつの間にか私も藤井ガチ勢になっていました！藤井の生き様は、今を生きる私たちに何か大切なことを教えてくれる気がします。

接遇スペシャリスト/ライター / 田邊加奈

- 藤井のような人は世の中に結構いると思う。そのほとんどは「つまらない」「面白くない」などと敬遠されがちなのでは？ただ、友達になりたいと思うのは藤井のような人だと自分は思う。歳をとってくると尚更そう思う。

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- うっかり刺さってしまった。もしかしたら義務教育が9年かけて刷り込んでしまっていた「こうあるべき」という固定観念に、知らず知らずのうちに私たちは囚われてしまっていたのかもしれない。「幸せに生きること」とは、という生き様を見せつけるマンガだ。人と繋がってないと社会不適合だとか、40歳で独身だから負け組とか、継続的な付き合いがないと友とは呼ばないとか、結局周りが勝手に評価しているだけで。幸せというステータスは他人に与えられるものではなくて自力でそうなるものなのかもしれない。フジイだけが正解なわけでもないが、外野がなにを言おうと自分を偽らず生きるフジイはカッコいい。だから目が離せない。

会社員 / 布施直人

- この人っていったい何を考えて生きているのだろう。そんなことを思うようになったのはこのマンガに出てくるフジイに惹かれる登場人物たち同様に自分を見つめる時間が増えたからなのか。フジイは何か特殊な能力を持っているわけでもなく、世間的には特に気になる人ではないのだろうけど、クローズアップするほど興味がわいて仕方がない。過去話も含めてもっともっとフジイを知りたい。人それぞれにその数だけ人生はあるのだということをこのマンガは教えてくれている。

October Beast 代表・デザイナー / 北山友之

- 各所から絶賛の声、身内からも絶対好きだろうから早く読めと言われつつ、やたらおすすめされると逆に敬遠してしまうところがあるのですが……うわー、面白い！もっと早く読めばよかった！展開は本当に淡々としていて、スリルや迫力とは真逆のところにあるのに、ページをめくる手が止まらない。読むほどに、フジイがどんな人間なのか知りたくなる。特に、中年以降の年代には沁みる漫画だと思います。フジイと共に、己の人生を振り返ってしまいます。

主婦 / 堀江千秋

- 人生のあり方を考えさせられる作品。読むと優しく心地よい気持ちになれる

会社員 / 齋藤隼

- バズっては欲しくないが、静かに推しておきたい……という気持ちにさせる不思議な作品。作中でフジイに関わる人々がフジイに対して感じる気持ちと読者が作品に対して感じる気持ちがシンクロする。

ときどきライター / 縣丈弘

- これは、ウェルビーイングの物語。幸せ、という言葉では足りない、ということで、最近言われているのが、「well-being」。今までは、能力を高い人が何かを為す、「well-doing」が評価される時代が、長く続いていました。しかし、ある人にとっての意味ある何かを為すことが、他の人にとっては必ずしも意味があるとは限らない。「well-doing」を目指して、自分の軸を見失ってしまう、より高い収入や実績、フォロワー数などを目指して、鬱々とした気持ちになっている人が、とてつもなく多いのではないのでしょうか。そこで、このフジイ。他人の軸を気にしない、しかし、他人を害することははいけない、ということは自分の責任において内面化されている。こんなキャラクターは小説では描けない、マンガならではの醍醐味を味わえる作品だと思います。

ニッポン放送 / 吉田尚記

選考員コメント・2次選考

- 人生の見方を変えるといろんなことを知ることができる。何度か読み直すとフジイのほどよい感じが暖かった最初とは逆に冷たくもあることに気づきだした。人との距離で迷い苦しむ漫画が多い中、フジイは他者との距離で最後は実際無理をしていない。それが強烈に輝いて見えるかと思えば、縮まらないことはどうしても寂しくもあるのだ。この感覚を味わえることは唯一無二なのかもしれない。

October Beast 代表・デザイナー / 北山友之

- 現代は、SNS 全盛・コスパ・タイパ重視の流れで、「隣の花が赤く見える」時代。だからこそ、ぜひ一人でも多くの人に読んでほしい作品です。人は人、自分は自分。平凡でも、すねに傷があっても、いいじゃないですか。言わせたい人に言わせておけば良い。そう思えば、人はもっと楽に生きられるかも……。そう思わせてくれる作品です。

サブカルライター / 河村鳴紘

- 平凡かつマイペース。誰でもヒーローやヒロインに憧れるものではあるが・・・その実、今の自分も捨てたもんじゃない、そんな見方、考え方ができるかも！の一冊です。

本と文具ツモリ西部店 / 津守晋祐

- 偏見かもしれませんが、男性向けの日常マンガでここまで日常描写に徹して、なんでもない（失礼！）リアリティを追究したことに、脱帽でした。そして、藤井さんの前では、誰しもが自分に素直になれて、自分を好きになれる、そんな気がします。いつの間にか藤井さんのとりこになっています♪

弁護士 / 三葛敦志

- タイトルは『路傍のフジイ』ですが、フジイの内面は一切語られません。彼が何を考え、誰にどういう思いを抱いているのかも全くわかりませんが、その生き様を見ているだけで、いつの間にか好きになっちゃうんですね。そして自分もこんなふうに純粋で、善良でありたいと思います。マイペースで生きることを楽しむフジイを見て、周りの人たちが人生を前向きに捉えられるようになっていく展開も面白く、最初はフジイを見下していた田中くんが一話にしてフジイのことを見直すのも、他人に対してドライな石川さんがなぜかフジイのことだけは気になってしまうのも、すごくよくわかる。なんだか生きるのがしんどいなと思ったら、この漫画を読み返したいと思います。

主婦 / 堀江千秋

- 思うように生きたいのにいつの間にかまわりにあわせてしまっていることが多々誰にもあると思うので、そうじゃないフジイをみていると心がじわっとなっています。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- インターネットやSNSから入ってくる本当か嘘かもわからないような情報に振り回され、自分自身を見失い、他人にどう思われるかばかりを過剰に気にしてしまうこの時代に、目の前の生身の人間をしっかり見つめることの大切さを伝えてくれる作品だと思います。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 生きづらい世の中でフジイの実直さは何故か心にしみる

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- 確かに、私もフジイとすれ違っている、と思いました。共感しまくりました。

書店員 / 桶谷佳代

- ひょうひょうとしていて、淡々としていて、それでいて自分をしっかり持っている。主人公・フジイはいつかどこかで会ったことがある気がするけど、誰だか思い出せずにいる誰か。噛めば噛むほど味わい深い大好きなキャラクターで目が離せない。「藤井さんという自分がいい人間になった気がするというか、いい人間でいようと思えるんです」と言った同僚の彼女の気持ちも、「優しく冷たい」となじった大学時代の彼女の気持ちもわかるな～～～～！ でも、そんなフジイが大好きで、ぜひとも幸せになってほしい。落ち込んだ日も、ねえ、私の人生って案外捨てたもんじゃないねと思わせてくれる一冊。

ライター・編集 / 島影真奈美

- 鍋倉夫先生の作品と出会ったのは前作「リボンの棋士」。棋士を目指していた青年が年齢制限で奨励会を退会となり、世間で生きる道を探したが、諦めきれずもう一度アマからプロ棋士を目指すという漫画。この漫画が凄く好きでテレビ等でも紹介させていただきました。設定や主人公も素晴らしかったのですが、特に好きだったのが脇の

キャラクターの存在でした。土屋というキャラがいたんですが、モブ丸出しの見た目、こいつが主要キャラにいいのか！？と思うほどでした。ですがストーリーが進んでいくとうちなる熱いものを見せる土屋に心動かされ泣いてしまったのです。その時に「モブのようなキャラを輝かせる凄い先生だ」というのが印象でした。しばらくすると、そんな先生が新しくスタートさせたのが「路傍のフジイ」でした。この気持ちが分かります？もう最高なんです！！だって「路傍のフジイ」はモブみたいな奴が主人公なんだから！nobodyknows+ くらいココロオドりました。物語では省略されるモブのストーリーをピックアップすれば、つまらない物かもしれないし、とても素晴らしい物かもしれない。僕たちはそれを見てないのに、つまらないと決めつけていたりする。だが、その見えない部分に心を動かされる人がいたり、涙する人がいるのかもしれない。そんな瞬間を描いたのがこのフジイであって、フジイもまたそんな見えない部分の一つ。この世には知らない所で素晴らしい何かが生まれているんだろうな。そう思わせてくれる、とても素敵な漫画です。

芸人 / ムーディ勝山

- 会社の中でも目立つことなくひっそりと仕事をしている中年男性。ふと、何が楽しくて生きてるんだろう？なんて邪推して覗いてみると、想像していたよりもはるかに人生を楽しんでいる。何か特別なことができるわけでもない、ありふれた趣味を、誰かに自慢したりせず一人で満喫している。SNSのやレビューサイトのコメントなど、大多数の目線に振り回されがちな今、その流れに歯向かうでもなく、幸せの評価軸を他人に委ねずにただ自分の価値観を最優先にして暮らすフジイが羨ましく眩しく見えます。さらに彼がイイのはちょっと偏屈で変わってるかもしれないけど、決して他人に対して否定的でないところ。人間が、生活が好きなんだろうな。この寛容さにホッとする人は多いはず。自分の幸せは自分で決めていいんだ！とフジイは声高になんか言わない。ただそこにいるフジイに、今だからこそ癒されます。今季一番たくさんの人に届いてほしいマンガです。

公務員 / 宇田川結衣子

- 至極まとも“なのに”奇人、至極まとも“ゆえに”奇人という主人公フジイの造形が巧み。社会のあり方や生き方を問うているわけだが、問いも答えも重すぎない、絶妙のさじ加減。「路傍にたたずむ」感じの寄り添い方が心地いい。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 幸せに対してもっと素直になっていいんだ、と思わせてくれる作品。フジイの生き方は、側から見ると不器用で勿体なく感じる部分ばかり。ただ自分の可能性を狭めず、やりたいことをやり、周りを気にせず自分の幸せにまっすぐなフジイの生き方に、窮屈な現代社会を生きる我々は魅力を感じて仕方ない。静かで力強い作品。

スターダストプロモーション・アイドル / 秋本帆華

- フジイは、幼い頃から「他人には他人の生き方があり、自分には自分の生き方がある」ということを理解し、それを自然に受け入れて生きてきたのだらうと感じます。だからこそ、誰かと比べることなく、自分自身の人生を存分に楽しんでいるのかもしれない。この物語に登場する人物たちも、それぞれの人生を歩んでいます。波乱万丈な人生を送る人もいれば、平凡で冴えない人生を送る人もいます。他人の影響を受けたり、助けられたり、時には傷つけられたりしながら。それでも、それが彼らの人生であり、それで良いのだと、感じさせてくれます。作中の人物に共感できる部分もあれば、そうではない部分もありますが、それこそが人生のリアルなのかもしれません。フジイの生き方に触れて、改めて思います。いつの日か自分が息を引き取る時には、胸を張って「良い人生だった」と言えるよう、愛する人を大切に、かけがえのない時間を生きていきたいと。

接遇スペシャリスト／ライター / 田邊加奈

- 『路傍のフジイ』は、職場で空気のような存在感の独身男性・フジイが主人公の物語です。一見普通のサラリーマンの日常を淡々と描いていますが、その中になんとも言えない、ふしぎなメッセージが込められています。フジイの生き方は、現代社会の「マウント」「承認欲求」「コスパ・タイプ」といった価値観をふわりと覆します。フジイは、自分の感情や価値観に正直に生き、他者の評価や世間の目に囚われることなく、自分の好きなことを楽しんでいます。例えば、陶芸教室に通ったり、タコパしたり、若者向けのライブに行ってみたりと、全くドラマチックではない日常を楽しそうに過ごしています。彼の生き方には、他者の評価や外部の基準がありません。それが彼の魅力であり、読者や周囲の人々に衝撃を与えます。フジイの姿を見ていると、まるで生活の真髄を見せられているかのよ

うな感覚に陥ります。また、フジイの生き方を通じて、自分の生き方を見つめ直し、心が軽くなったり、救われたりするキャラクターが登場します。読み手もこの平熱の優しさに触れることで、同様の感覚を得れます。この作品は、現代社会の価値観を爽快にひっくり返し、「幸せ」の概念を見つめ直させてくれます。

会社員 / 佐藤優

- 職場で軽んじられている謎の人物フジイ。軽んぜられるのは、自分を見失わないマイペースぶりがあまりにも世間様と異なるから。世間は世間の常識の枠から外れている人を「おかしい人」認定する。そのような一方的な価値づけのくだらなさを、本作はさりげないエピソードの数々を通じて白日の下にさらけ出していく。自己顕示や承認欲求にとられることはなく、偏見やマウントとも無縁。そんなフジイの魅力を知った人はみな「素の自分」をさらし、自然に毒気が抜けていく。いかに世間体にとらわれ、つまらない処世術に絡め取られていたかを思い知らされていく。彼らにとってフジイは生きる価値を反転させる触媒のようだ。そんなフジイは最新3巻の後半はほとんど出てこない。空前絶後の主人公だ。時折挟み込まれる回顧回も良く、涙腺が緩んで困る。電車や一人のカウンターでは読まない方がいいかもしれない。なお主人公のキャラは正反対だけれど、「この世は戦う価値がある」と似た読後感がある。世間とうまくやらなければ、と過剰適応する脅迫観念から逃れたい、というニーズがいまはあるのかもしれない。その意味では「どくだみの花咲くころ」もそう。いずれも読者が「手に入れたくても簡単にはつかめない憧れ」をひととき満たしてくれるマンガたちだと思う。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 一見地味だが自分を偽らず着飾らず常に素直な気持ちを貫ける強さを持ったフジイのキャラクターがなんとも魅力的。作品内容を形容するうまい言葉が全然見つからないけど、1話読み終わるごとに「なんか良いな…」と感じられるような不思議な作品です。

会社員 / 小野塚博之

- 大きな不安の波に押しつぶされてしまいそうな夜。その描写に強く強く共感を覚えました。自分にとって居心地が良ければ本当はそれで幸せなはずなのに。何不自由もなく生きているはずなのに。それでもなぜか焦りを感じて、これではいけない、と自分に言い聞かせてしまう。しかし、藤井はそうではありません。自分という軸があり、日々をどっしりと生きている。読後、自らの心が社会の中に漂流してしまわないように、この作品が錨を下ろしてくれたような感覚がありました。作中の言葉を借りると、「いい人間になった気がするというか、いい人間でいようと思える」読後感を表すのに、この言葉が最もしっくりきました。

会社員 / 杉佳尚

- その人のありのままをすべて受け入れた上で、余計なものをそぎ落としてくれて、本来の自分と向き合うことができるようにしてくれる。フジイとはそういう人。本人は何もしてないんだけど。私がフジイと対峙したら、自分とどう向き合うだろうか、と想像を巡らせました。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- フジイに何を見出すか、というのが試される作品でもあると思う。あまりにも剥き出しな彼の姿に人間性を見出せるか、どうか。

マンガ読み / サイトウマサトク

- 言葉だけでは語りつくせぬ何かを語っていて、しみじみいい漫画だなあと思う。おじさんなのでこういう地に足の着いた漫画が沁みます。

ときどきライター / 縣丈弘

- うっかりハマってしまったなー。すごく面白くて一気に読んでしまうんだけど「どう面白いのか」の言語化がひょーに難しい。「偽らないこと」「分け隔てがないこと」「自分を持つこと」を学ばせていただいているような感覚。周囲の評価とか、世間の目とか、実は大したことないものを気にしすぎて生きてしまっているなあと身が締まる思いになったり、でもフジイも周囲の目を気にしていないわけでもないんだよなって。かなり絶妙な力加減で「自分」と「自分以外」の境界を分けている感じ。こういう人って近くにいる分には干渉もなく心地いいんだろうけど、懐っているのは真の意味で無いんだろうなあ。たぶんニーチェの言う、ルサンチマンを克服した超人ってこんな感じなんだと思う。あっ自分、畜群やらせてもらってるモンです！！

会社員 / 布施直人

- 静かで淡々としてるのに、読んでると妙に心に沁みる作品ですね。フジイを中心とした他登場人物の群像劇（表現合ってるのかな）が展開されていくのが素晴らしい。フジイの生き方は特別何かがあるわけじゃないんだけど、でも揺るがない。自分を偽らず、かといって他人を否定するわけでもなく、ただそこにいる。なのに、彼の言葉や立ち振る舞いが、周りの人間の価値観をじんわり変えていくのがすごく心地いいです。

会社員 / 三浦佑樹

- フジイと友達になりたい。

PENICILLIN / HAKUEI

- およそ承認欲求とは無縁なフジイさん。いくつか趣味があって、仕事は卒なくこなし、決して他人を避けるでもなく、でも他人からは変わり者に見られてしまう。ところが話してみると自然と藤井さんと心地よい距離感にいられるようになる。ある程度に年齢になると、フジイさんは憧れる人物像なのかもしれません。自分がそうになりたい、もしくは周りに一人いてほしい。SNSに疲れたらこれを読みな、と手渡ししてあげたい作品です。

書店員 / 野口忠義

- 少しずつフジイさんの良さがつたわってくる。

カメラマン / 平沼久奈

- 『まだ誰の眼中にもない真ヒーロー、フジイ!』の煽り文句通り、彼は近くにいる人の背中をそっと押してくれる『ヒーロー』なのだと思う。人の意見に左右されず評価も気にしない。地味な会社員生活の中でも楽しみを見出し満喫する男、藤井。そんな彼の言動から、周囲は気付きを得る。彼のように生きてみたいけど、現実世界ではなかなか難しい。スカッとなけるでもなく、ただ藤井の日常を追うだけだけど、疲れた社会人に刺さる作品。

主婦 / 赤坂真実

- 教条的でもなく、パワフルさやエキセントリックさでもなく、あるいは自虐的な語りでもない。それでも、人生との向き合い方を表現できるってことに驚いた。連載当初より、なんだか地味なマンガが始まったなと思って読んでいたのだが、いつしか新しい話を心待ちにしている自分に気がついて、わたしもフジイから目が離せなくなったひとりなんだな、と思うとおかしかった。毎週読めるのを楽しみにしています。

会社員 / 末永龍介

- フジイの行動がいちいちがかっこよすぎて、冷静に考えたらリアリティに乏しい。なのに読んでいる最中は全くそれに気づかない。創作作品のすばらしさに気づかせてくれる作品。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 「隣にいて楽な人」ってこんな感じの人なのかなと思ひながら読んでます。たまに微笑むフジイさんがクセになります。何だか忙しい時にふと読みたくなります。

デザイナー / 玉澤綾子

- バブル期以降、時代の節目で価値観が揺らぐ時代に必ず登場する「周囲の悩みや人の目を気にしない超然としたキャラクターが存在することによって救われていく」というタイプの作品であり、悩みを持つ人々の群像劇が描かれ、そこに居合わせる主人公を見ることで自己を省みるという、数は少ないが時代ごとの世相や風俗を写し取り残していく、そういったサラリーマン漫画の系譜に連なる作品ではないかと。

住職兼ライター / 蟬丸P

- 年を重ねてきたことで感じ取るものが多くある作品だと思う。決して派手ではないけれど、読んでいて「あー」とか「なるほどな？」みたいな思うことが何度もあり、その感覚に少し独特な、俗にいう個性のようなものを感じた。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- かつて学生時代、こんな同級生がいました。教室の隅であまり誰かと積極的に話もせず、かといって寂しそうにも見えず、何かを書いたり外を見ていたり…。今思えば、彼はフジイだったのではないだろうか。もっと彼のことを知ろうとしたらよかったのに、僕の視野は狭く、見えやすいものしか見ようとしていなかった。「自分の機嫌は自分で取る」を、まさに地で行くフジイ。人間、そもそもわかりやすいもんじゃ無いのに、わかりやすいものに当てはめて見ようとしすぎている。僕はまた、フジイに出会いたいです。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- 人生のあり方を考えさせられる作品。読むと優しく心地よい気持ちになれる

会社員 / 齋藤隼

- 自分一人でも幸せになる生き方を教えてくれるマンガです。かといって、他人とのかかわりを否定してるわけではなく、一人一人が自分で立ててるからこそ、他人と健全な関係が築くことができる。そう教えてくれていると思います。人間関係に疲れている人に。

会社員 / 廣瀬公将

- あまりに素晴らしかったので、レギュラーポッドキャストの『マンガのラジオ』で、作者・鍋倉夫さんにインタビューをさせていただいたところ、なんと「ウェルビーイング」というお言葉をご存じありませんでした。概念として標榜して作られたわけではない、という点が、より、価値があると感じざるを得ません。鍋倉夫さんによると、フジイは、「ヒーローである」と。かつて、吉田秋生さんにマンガ大賞でインタビューさせていただいたところ、「人がこうであったら素晴らしいのに」と思って作品を作っていたらとのこと。まさに、いまの時代に本当の意味で即したヒーローがいるとしたら、こんなに説得力のあるキャラクターがいるだろうか。この先も、このヒーローがどうふるまうのか、先を見ていたくて仕方がない。

ニッポン放送 / 吉田尚記

「ふつうの軽音部」出内テツオ、クワハリ

選考員コメント・1次選考

■ 普通の高校に進学した普通的女子が普通にギターを弾き始め、普通にバンドを組んで唄い始める物語。そこには、友達が一人もできないままひとりひとりぼっちでギターの練習に励んでいたとか、コミュニケーションが苦手代わりに学習帳いっぱい詩を書き殴っていたとか、虐めが原因で高校を辞めて都会に出て来て唄い始めたとかいったドラマティックなイントロダクションはない。入った軽音部でも、すぐにバンドを組んで大活躍してライブに出て評判になってといったサクセスストーリーはなく、ひたすら練習に励む中でなんとなくメンバーが出来て、けれども壊れてそしてまたつながってといった“あるある”な日常が繰り広げられる。それが面白い。誰かと誰かが付き合っていて分かれたといった恋愛沙汰がバンドの崩壊を呼んだり、再結成につながったりする。唄えば下手だからと笑われて悔しいと思って炎天下の公園に行って、アンプも繋がらないエレキギターを弾きながら大声でがなりたてたりもする。クワハリ原作・出内テツオ作画の『ふつうの軽音部』は、鳩野ちひろという女子高生が毎日学校とギターとアルバイトに費やす日々がただ綴られていくだけなのに、それが猛烈に面白いのは、誰もが送っている日常と隣り合わせの世界がそこにあるからだ。自分でも飛び込んでいけそうで、けれどもちょっと引いている人にこういう世界も面白いかもと思わせる親近感。下手だからギターを弾くのも歌うのもためらっている人に気に得ずやっつけてしまえと思わせる牽引力。諸々の魅力がページから漂ってきては読む人を絡め取って話さなくさせる。『ふつうの軽音部』にはそうした魅力が最初からあって、そして巻を重ねても衰えるどころかますます魅力を強めている。ナンバーガールや andymori や銀杏 BOYZ といった、イマドキ感から少し離れた邦ロックの渋い楽曲を込んで歌うところも、目立とうとか売れようといった気持ちより先にこれが好きだ、これを演りたいといった気持ちの表れとして同意を誘う。こんな気持ちを持って挑む鳩野の歌ならいったいどれだけのものなのかといった興味をかき立てられる。ページからはそんな声なき声が耳に響いてくる。アニメ化なり実写化なりがいずれ企画されたとしても、そこで誰かが唄う歌が心に響くかは分からない。マンガだからそ想像の余地があってそこに鳩野への思いを載せることができるのだ。とはいえ、やはりアニメなりドラマなり映画になって登場した時、そうした気持ちをまさに代弁してくれるようなシンガーがそこにいたら、気持ちもグッとなびくことだろう。企画する人たちの手腕が問われる。脳天気だけでなく、父親との関係など少しの痛みも持った鳩野がこれからどうなっていくのかまだ見えない。普通の軽音部らしくバンド間の競争もあれば先輩後輩の面倒や関係もあってそれが混乱を来しそう。軽音部の中での勢力争いのような芽も見えてぐちゃぐちゃになっていく可能性もあるが、そこでも鳩野は鈍感に歌い続けてくれるだろう。周囲もそんな鳩野に導かれ、普通に対バンに勝って有名になっていってくれることを願いたい。

書評家/ライター/タニグチリウイチ

■ 音楽は背中を押してくれる。過去も現在もひっくり返す。特にロックはそう。気が狂うほどに愛おしいそれらをBGMにすると、自分のこれまでも悪くはなかった気すらしてくる。「ふつうの軽音部」は、一見普通に見えるかもしれない。かわいく親しみやすい絵柄に騙されて「日常系バンドマンガ？」と錯覚するが、それぞれの抱えるコンプレックスを実名の名曲たちにのせて昇華させていこうとする、誰しもにあったはずの輝かしくも短い一瞬を描いた物語だ。「ふつうの軽音部」は、普通だ。普通じゃないことが軽音部としては普通だ。誰しもが音楽をBGMにした瞬間から普通に主人公だ。ただ、隙あらば作品のテイストを闇落ちさせようとする厘ちゃん、キミだけは断じて「ふつう」じゃない！

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

■ 「音楽性の違い」という旧時代のフレーズも、もはやネタにもならないほどにバンドは実際にさまざまな理由でケンカ別れや活動休止に至るわけだけど、それだけメンバーはみな自分自身の目的やモチベーションを持って活動している。この作品が面白いのは、その事実から目をそらしていないことだと感じる。そのため少年マンガにありがちな、心をひとつに合わせて強敵に挑む、無言でも無心で自然に連携が決まって大技が出るみたいな文脈表現を取らない。序盤最大の盛り上がり、軽音的にも象徴といえる一曲をバンドで演奏している、その刹那の各メンバーの描写がとても面白い。

会社員 / やのこうじ

- 音楽におぼれた 10 代の感覚がよみがえる感覚。自分が知っている曲がたくさん登場するのも嬉しいポイント！キラキラだけじゃない、リアルなバンド活動の日々が描かれつつ、胸が熱くなる「ジャンプ的」な瞬間もしっかり詰まっています！

株式会社エイミング マーケティングプロデューサー / 伊藤千恵

- りんちゃんが最高。りんちゃんが本領発揮してきてからずっと面白い。2024 年、1 番話題に上がった漫画でした！

bar 図書室 / 岡部愛

- あえて「ふつう」を称する難しさ。私はふつうに好きです。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- ふつうの部活で起こる他愛のない、でも、当人達にとっては一大事な事柄を眺めてるのがこんなに面白いとは。「ふつうの」と言いながら、若干名ふつうではない人が混ざっているのがまた面白い。なにより熱くて泣ける！

医師 / 岸本 倫太郎

- 『ふつう』がふつうなんだけど、ふつうじゃない？！主人公なのに話の蚊帳の外だったり、ほんの少しの事で関係が崩れたり。「あるなーあるある。」そんなリアルでの日常に近い感覚。青春ゆえのドロドロ。本当に様々な「人間」がいて、それが「ふつう」。今後も楽しみです

図案家 / 橋本 寛子

- ジャンプ+掲載作品なので、わたしのなかでは「もうキテル漫画大賞」受賞まちがいない作品なのですが、まだ未読の人がいるかもしれないので、高校生の恋愛物・部活物にはもう飽きたという中年以上の人にも、あえて推したい、おすすめしたい。今後どこまで普通に踏みとどまりながら話を進めていけるのか、期待しています！

教員 / 戸田穂

- 何気ない高校生活の部活ライフをゆったりと面白おかしく描いた作品。どろどろはしていませんが、それぞれが思うことの交錯が面白く軽く思える内容なのにしっかりと描かれていてとても引き込まれます。作中には実際の楽曲がでてくるため、作中の曲をあらためて聞き、ああ、こういうシチュエーションならたしかにこの曲いいなあという感じで楽しめます。

デザイナー / 高永貞光

- これほどタイトル詐欺なバンド漫画がかつてあったでしょうか？本当にふつうじゃなくて面白いです。自分もバンドをやっているのと、学生の時は軽音楽部にも所属していたので、「あるある」という笑いもあれば、ちひろが感じている Live への高揚感だったり、失敗や挫折だったりとても共感できた点もプラスでした。是非アニメ化して欲しいですね。

会社員 / 三浦佑樹

- 歌ったらディーヴァとか、ギター弾いたら神テクとか、そんなことまったくなく、ごく普通の部活の話。人間関係はややこしくて普通じゃないと言いたくなるけど、実は案外普通のことなのかも。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 高校の軽音部が舞台。部活動として楽しく音楽をする、だけでは無い影の部分の描き方がリアルで読ませる作品です。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- 既に注目を浴びている作品だけれど、文句なく面白いので。4 巻のライブシーンでガチッとメイン 4 人のキャラがハマったのは快感。更にはじけていくことを予感させる黄金の 4 人組。

朝日新聞記者 / 小原篤

- シンプルで可愛い絵柄で描かれる登場キャラクターがみんな魅力的で、全員応援したくなっちゃうほど。ほんわかした日常を描いていたかと思えば急にグッと引き込まれるような展開があったりと、話の緩急のつき方がとても良く読み応えがあります。ロック好きならつつい反応してしまうバンド名や曲名が出てくるのも楽しいです。

会社員 / 小野塚博之

- あまりに評判がよいので逆に敬遠していたが、読んだら確かに面白い。素直に降参します。オーソドックスな部活ものに見えて、学校という空間がぬるま湯ユートピアでなく、もうシビアナ「世間」であり「社会」なのだという

感覚が新鮮だった。SNS世代にはもう内も外もないのだなーと。あと「推し」という価値観の大きさ（絶対性？）も感じました。

読売新聞文化部 / 石田汗太

- マンガの感想なんかもXで拾って納得したふりして消費してしまうのは良くない癖だが「軽音部のくせに軽音に熱中する異常者のマンガ」的な評をみてクスリとしてしまったよ。タイトル通り、ロック好きのふつうの高校生がふつうの軽音部に入ってふつうに熱中するマンガでそれ以上でもそれ以下でもないけどその本質っぷりというか単純だけど真摯でマヌケな熱意に読んでニヤニヤしてしまう。これもう来年はマンガ大賞では選べないだろうから今こそ推しましょう。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- ちょうどよいふつうの熱量がたまらん。こっ恥ずかしさや達成感みたいな、あれやこれやの感情がこちら側にも押し寄せてくる。いいですね、青春。

NIC リテールズ(株)書籍仕入部 / 池本 美和

- 心理描写がすごい好きです。一見ありきたりなんだけど、よんでいくとありきたりじゃない。でも、ふつう。そこが面白い。

広告会社 プランナー / 平沼良章

- 軽音部に入ってどんどん音楽にのめりこんでいく主人公たちがいとおいしい。バンドって音楽って本来こうだったんじゃないかって気すらする。巻を追うごとに脱退、解散、そして新バンド結成を経て急激に成長するハトノの姿。彼女が歌う楽曲は自分にもなじみのあるものばかり。ページから音が聴こえてくる。傑作の予感というだけでもノミネートに値する。

October Beast 代表・デザイナー / 北山友之

- 世界を変える才能の話なんてせず、ただ恋愛や人間関係や家族のことでつまずいたり他人との違いに悩んだりする「ふつう」の日々を正面から描き続けるパワー、タイトルの「ふつう」に込められた激アツな意志にやられます。大きな才能や派手なドラマのない日常で私らは悲しんだり傷ついたりしているが、そんな「ふつう」のすべてを卑下もせず誇りもせずただ突然湧いた衝動にまかせて歌うのって最高じゃないか？

会社員 / 末永龍介

- 「えっ、そこで仲直りするの!」「そういう行動に出るんだ!」というような小さなでも驚くべき出来事が短いスパンで何回も起こり続けて、ずっとドキドキが止まらない。

ライター / 門倉紫麻

- 作中に出てくる曲を聞きたくなるのなんでかな？ってふと思ったんですが、歌ってるキャラが本当にその曲を好きな感じがするからなんだろうなー、ということなんだと思います。そういうところも含めて、とてもリアルなふつうっぽさを感じる作品です。

会社員 / 林礼春

- 言葉だけでは伝わりづらいことも、音楽に乗ると強く伝わってくるのが音楽の良さの一つだと思うのですが、マンガで音楽を書いても、同じことがおこるんだとびっくりしました。主人公が歌に乗せた思い、それを聞いた人の気持ちそれが迫力のある演奏シーンから強く伝わってきます。このマンガを読んで、また音楽を聴いてみたいと思いました。音楽が好きだったすべての人におすすめです。

会社員 / 廣瀬公将

- やはり昨年の漫画といえばこれだろうか。SNSにアップされていた原作版から引き込まれたが、商業版の作画も素晴らしい。一昔前の邦楽ロックを聴きたくなる。

ときどきライター / 縣丈弘

選考員コメント・2次選考

- 「ふつうじゃ嫌だ（特別になりたい）」と「ふつうになりたい（けどなれない）」という真逆の呪いが「ふつう」という言葉にはある。その両方にポジティブな意味をもたせるのが『ふつうの軽音部』のとんでもないところだ。人生で出くわす、ありふれた、ごく「ふつう」の悲しみや怒りを特別なものにする鳩野の歌声。そしてイヤな奴もヘンな奴も、家族や嗜好のマイノリティも、みんなひっくるめて「ふつう」のことだと肯定できる学校生活。音楽マンガの場合、「才能もの」として前者を語るか、「日常もの」として後者を語るかしかできなかったように思うが、『ふつうの軽音部』はこのふたつを両方ともに肯定するパワーをもっていて、このスタンスにはとても今らしさを感じる。思春期にこのマンガを読める世代が心底うらやましい。

会社員 / 末永龍介

- 個性をバラけさせたキャラとゆるい部活の掛け合わせというだけで十分面白いが、やはり幸山屋の飛び抜け方が他にはない面白さを生み出している。激辛スパイスというか劇薬というか。腹黒い策謀家なのに、鳩野ちひろを神とあがめ、トリップしたかのような、いやトリップしているのか、陶酔っぷりが怖い！

朝日新聞記者 / 小原篤

- 自分が気付いてないだけで、実は裏で事件が起こっているのが世の中。主人公なのに蚊帳の外状態が多いけれど、はとっちはこのままでいて欲しいなあ。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- あの“高校の軽音部”独自の、空回りっぷり・ダサさ・青春感…を上手く一体化させつつ、それでも音楽っていいよな！というパンチで殴ってくる。そんな熱い作品だなと思いました。私自身はもう随分昔に高校生を卒業した身なので「あ〜〜こういうのあるあるだよね〜懐かし〜」という気持ちで読んでいますが、いまティーンの子たちがこの作品を読んだらどんな感想を抱くのが知りたいです。

ゲーム会社勤務 / 畑中瀬路奈

- 何気ない高校生活の部活ライフをゆったりと面白おかしく描いた作品。どろどろはしていませんが、それぞれが思うことの交錯が面白く軽く思える内容なのにしっかりと描かれていてとても引き込まれます。作中には実際の楽曲がでてくるため、作中の曲をあらためて聞き、ああ、こういうシチュエーションならたしかにこの曲いいなあという感じで楽しめます。

デザイナー / 高永貞光

- のほほんのした日常はとても可愛らしく描かれている一方、若者特有の葛藤や感情を爆発させるような展開もしっかり描かれていて、読みやすさと読み応えのバランスが絶妙です。特にライブ描写は必見で、ボーカルの心情にリンクした歌詞がドンッと目に飛び込んでくる演出に心が熱くなります！作中で演奏されている曲目も刺さる人にはめっちゃくちゃブツ刺さるのではないのでしょうか！最高です！

会社員 / 小野塚博之

- バンドが登場するマンガやアニメが話題になりまくっている状況の中にぶっ込まれたこの『ふつうの軽音部』は、キャラクターがいかにロックといったビジュアルからはほど遠く、また“萌え”といったものからも縁遠い。展開自体もありきたりの高校のありきたりな軽音部に入ったありきたりな女子高生が、とりあえず始める音楽といった敷居の低さでもすれば気付かれずに通り過ぎられてしまいそう。けれども、読んでいくうちに鳩野ちひろという主人公の女子高生が音楽にずぶずぶとのめり込んでいく様に引っ張られるように、のめり込んで読むようになって気がついたらこの先いったいどうなるのって気にさせられて、毎週更新されるアプリを日付が変わると同時に起動して連載を追っている。とてつもない演奏技術がありながら極度の引っ込み思案だといったキャラクター性もないし、親に逆らい学校に逆らって好きな音楽がある場所へと飛び出してきたといったドラマ性もない鳩野ちひろのどこにどうして惹かれるのか。それはたぶん好きなこととかやってみたいことなら迷わず挑んでみようという気にさせてくれるから。その気はあっても失敗して笑われるのが怖くて、いやいや自分はと言って逃げ腰になっているような人に、それでもとりあえずやってみたら良いじゃんと言ってくれるようなところがあるから。そうやって始めて笑われても気にせず愚直に音楽に向き合う鳩野ちひろに惹かれるように周りが集まってきてそしてひとつの結末したバンドが出来上がっていく様に、そうなるの良いなといった思いを重ねられるマンガなのだ。いつかアニメ化されると思うし願っていてもいいけれど、スペシャルな演奏だったら練習すればできるようになってもスーパーなボーカルはちょっとなかなか演じられなさそう。湯浅政明監督の『犬王』で犬王を演じた女王蜂のアヴちゃんによ

うに、現実にいるバンドの特別なボーカルが演じるなんてこともあって良いかもしれないけれど、そういうボーカルって今誰がいるのかな。気になります。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

- 人間の気持ちの動きにこれみよがしでなくあたり前みたいにフォーカスして描き続けながら、ずっと何が起こるかわからずドキドキさせるエンタメなのが本当にすごい。このマンガを読んだ人たちが集まって、みんなはどこが好きなのかを話したいです。

ライター／門倉紫麻

- はとっちの主人公としての前向きさ、ブレなさ。陰キャなりの慎み。素晴らしいです。どのキャラにも見るべきところがあって、その交感から笑いが生まれて。ずっと続きを読んでいた。

医師／岸本 倫太郎

- ストレートに「面白い！」のが最高。主人公は平凡な女子高生のキャラ設定ながら、「独特の声質を持つ」という一点にフォーカスして、周囲を巻き込みつつ成長してゆく。多士済々に描き分けられた脇役キャラ達はその役割をきちんと果たして、物語のうねりを増幅し、怒涛の展開にますます目を離せなくなる。正統派の少年マンガの神髄を徐々に堪能した。

コミティア実行委員会会長／中村公彦

- ふつうの子たちのふつうの青春。だからこそキラキラ眩しくて、たまに痛くて、読んでて悶えちゃう。最高の作品です。

女優／齋藤明里

- 昨年の漫画としてはやはりこれを推したい。直球の青春ドラマだが、「操りもの」的なライトミステリ要素もあって奥行がある。作画も大変良い。

ときどきライター／縣丈弘

- マンガが好きだし、音楽も好きだ。マンガに心震わされたいし、音楽に心揺さぶられたい。作中で歌われる楽曲を知っているかどうかで受ける印象が変わってくるのは確かだけれども、本作はここまでしっかりと音楽を伝えてくれて、心を震わせてくれている。

会社員／やのこうじ

- あえて「ふつう」を称する難しさ。私はふつうに好きです。自然体でまっすぐ努力する主人公が眩しいです。

マンガ研究／ライター／会田洋

- “陰の者” にしか出せない「熱」があることを再確認できる、非常に気持ちの良い青春マンガ。大好きです。

NIC リテールズ(株) 書籍仕入部／池本 美和

- 高校生の主人公たちの不器用な生き方を泥臭く音楽に乗せて歌い上げる姿が素晴らしい。このマンガはほかにもいろいろ魅力があるのですが、想いを伝えるという点が飛び抜けて素晴らしく感動しました。マンガなのに音楽になっているというか、不思議な感覚になります。登場する曲は実在の曲なので、実際に聞きながらその場面を見返すとよりその場面の情景が強く伝わってくるのも好きです。

会社員／廣瀬公将

- いやー、これは楽しい。学生時代に軽音学部を作ろうとして、断念したあの時の想いが蘇ってきました。出てくる音楽も純粋に音楽を楽しんでいた時期のものであるため、勝手にキュンキュンしてしまいます。ちなみに先にハマったのは子どもの方ですが、軽音学部に入りたいそうです。まだ小学生ですが…。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス 営業企画マネージャー／阿部 大介

- 方々で褒めちぎられている作品なので、今更もういいかとも思ったが、読み返すと落とせないんだこれが……。幸山厘を始め、アクの強すぎる脇役陣の中で、鳩野っちが最も無個性で顔面も薄いのに、堂々たる「主演女優」なのは、語り口がとてつもなく上手いからだと思います。本作に出てくる歌を何一つ知らないロック音痴ですが、YTで聞きながら読み返すのは至福でした。学内でバンドが離合集散を繰り返す、三国志みたいな趣向もありそうではなかった。今回は本作が一押しではないが、入れざるを得ません。

読売新聞文化部／石田 汗太

- ロック好きのふつうの高校生がふつうの軽音部に入ってふつうに熱中するマンガだけこの年頃の人間にしかできないこっぴどかしい言動に共感性羞恥で悶え転がるマンガでもあった。言い方は悪いけど「高校で軽音部に入るような連中」のコミュニティ／人間関係の作り方に作りものとは思えない妙な質感があってオゾゾゾともした。高校生でももうバンドメンバーと男女関係で揉めるんだ…やめなよ…そんなこと…もっとバカなことしなよ…

ソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

- 学生時代にバンドを組んだ身としては、これは御伽噺だな？と思う要素も多々あるけれど、自分以外は実はこんな風に思っただけで賑やかな感情のもとで音を鳴らしていたのかも？と想像すると、なんとなく明るい気持ちになってくる。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 主人公の性根がまっすぐで画風通りのスコーンとした気持ちの良い物語、と見せかけて主人公以外の人間がまさにあの時期特有のあるあるのドロっと粘っこい青春を過ごしている、その描写の対比した構造が面白い。なんとなく自分の高校時代の軽音部の友人を思い出して、私は眺めるだけだった味わったことのないあの頃の空気を追体験している気分になりました。

フリーランス / 金輪英恵

- イヤフォンから好きな曲を爆音で注入！負けモードの自分をぶっ飛ばし自転車かっ飛ばし、「おれ、今（今だけ）、無敵やん！！！」なんて思った記憶は、きっと誰もが持っているはず。香りが記憶と結びつくように、音楽もまた記憶と切ってもきれない関係で、それは楽しいときも悲しいときも、僕らの日々を音楽が鳴らしてくれていたから。作中に登場する名曲の数々は、キャラクターたちの記憶と結びついてその感情を呼び起こし、曲と物語の双方をエモく輝かせてくれる。そんな音楽が持つちからと、それを好きなまま生きてきてよかった、なんて気持ちを再認識させてくれるマンガです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 「ふつうの軽音部」なんてタイトルだけど、いやいや、こんなにカオスなことがあっていいのか？と思うほど、話が進むにつれてどんどん濃くなっていくのが最高です。気づけばカセになり、劇中に出てくる曲も懐かしいものから最近のものまで…ききながら読みたくなります。

株式会社エイミング マーケティングプロデューサー / 伊藤千恵

- ふつうの〇〇っていうタイトルのマンガが普通だったことは一度もない。ふつうとはもはや失われた概念への鎮魂曲でありロックなのだ。つまり全員が異常な軽音部マンガである。

作家 / 海猫沢めろん

- 出てくる楽曲が自分がその当時に思い出せる楽曲が選ばれていてマンガの他にも楽しめる要素の一つです。バンドをやる高校生の姿は、40を超えたおっさんにはグサリとくるものがあります。

デザイナー / 平沼寛史

- マイペース、謀略、恋愛レス、タカビー……全然「ふつう」ではない！脇役キャラも含めて曲者ぞろい、それでいて、とても輝いているように見えます。巻数を重ねて読み進めるほど彼女たちがキュートに感じてしまう。若いっていいなあ。

サブカルライター / 河村鳴紘

- 『ふつうの軽音部』は、軽音部の日常や「あるある」をリアルに描ききった学園ドラマです。主人公・ちひろは一軍のキラキラした人物ではなく、親近感のあるキャラクターで、その成長過程が丁寧に描かれています。この作品の凄みは、高校生の軽音部の「ふつう」をリアルに描き、といつつ、陰キャで目立たない主人公が、隠れた才能を見出されて成長していく過程は、ジャンプとしてまさに「ふつう」です笑。この矛盾する部分を両立させるバランスが読みごたえになっていると思います。いずれにせよ、細やかなリアリティの積み重ねが、結果としてすごく「ふつうの軽音部」らしさを生み出し、その点が作品の面白さに繋がっています。総じて、『ふつうの軽音部』は、そのリアルな日常描写と成長物語が魅力の一作です。

会社員 / 佐藤優

- 読んでると、無性にロックが聞きたくなります。

会社員 / 林礼春

- ゆるーく読めるけど、しっかりはまる。普通の日常、会話などががすごく丁寧に描写されていて共感と懐かしさ、親近感がわきます。痛々しいリアルさや生々しい感情も「あるある」と思う、そんなふつう。胸にきます。

図案家 / 橋本寛子

- ふつうの、ふつうによる、ふつうのためのロック。どこまでもふつうを貫け！

教員 / 戸田穠

- 毎週更新を楽しみにし、人と感想を話し合った一番の作品は「ふつうの軽音部」だと思い投票させていただきました！更新の曜日に毎週待機したのは久々で「曜日感覚はふつうの軽音部に頼っている」と友人によく言っていました。りんちゃんがお気に入りキャラで、ヨンスも憎めず好きです！

声優 / 綾瀬有

- ストレートな学園エンタメで好感が持てます。こういう作品をストレスなく読みたい。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- 兎にも角にも厘ちゃんが良い！！厘ちゃんが圧倒的に良い！！こんな濃ゆいキャラクターが描けたら、勝ち確定だよ。テンポが良く読みやすく面白いので、万人におすすめ出来ます。

主婦 / 岸本しのぶ

- どいつもこいつもクセ強いメンバーが、弱い面や裏の顔をぶちまけ合いながらもその魅力に気付いていく姿に、ページを捲りながら自然と笑みがこぼれてしまう。テンポの良い会話と、なんだかどうしようもない感じの脇役たちもまた、何とも言えない魅力があってそこも良い。何より彼女たちが力強く歌うシーンと、その選曲のセンスがツボで、その熱い音が響いてくる。コメディもヒューマンドラマも音楽も、存分に堪能できる良作。

会社員 / 伊東敬祐

マンガ大賞2025 ノミネート作品

good! アフタヌーン / 講談社

「図書館の大魔術師」 泉光

選考員コメント・1次選考

- とにかく圧倒的に漫画が上手い…苦しさすら感じる描き込み…著者の熱を非常に感じます。光属性の主人公から受け取るメッセージが本好きとしては嬉しいものが多いです！

声優 / 綾瀬有

- あまりにも濃密に作り込まれた「これぞ！」ハイファンタジーの世界を舞台に、真っすぐな主人公と個性的な仲間との成長、見守る年長者たちの温かさ、激しくも心躍る戦いが美しく描かれた大作。1冊のつくりがとても上手で、3、4、5巻と非常に引き込まれる終わり方が続き、離れられなくなってしまう。気になる謎はどんどん広がりながらも、8巻まで来て油が乗ってきた今こそ、追いつき追いかけるにはちょうどいいタイミングです。本当に早く、続きが読みたくなる作品。

会社員 / 伊東敬祐

- ものすごい作品に出会ってしまいました。マンガの形をしているのに、マンガじゃないみたいな作品世界の質量。隙のない作り込み、描き込みの上に緻密に紡ぎ出されるストーリーは、まるで一冊読み終わるごとに一本の映画を観たような濃さ。スケールの大きさをゆえに読み始めは嘔み応えがあるのでじっくりと読まなくてはなりません、そのあとは作品の中にどっぷり浸かっていけます。漫画読みでまだ読んでない方はもちろん手にとって読んでほしいですし、映画・小説・アニメ等メディアの形式に限らずファンタジーものが好きな方は間違いなく刺さる作品だと思います。8巻まで刊行されていて、ここまで知らずにいたのが悔しく、知られていないのがもったいない。わがままですが、できれば紙で買って表紙の手触りから堪能してもらいたいです。マンガの内容はさることながら、マンガという物体としても愛でてもらいたい…！とんでもないマンガだ…

公務員 / 宇田川結衣子

- もっと読まれてほしいと何年も言い続けてきましたが、今年で8巻、最後のチャンス…！書物、図書館を巡る重厚な物語設定に魅力的なキャラクター、精緻な描き込み、特に前半から中盤にかけてのスピード感はずいぶん体験してほしい。巻を終わるごとの盛り上がりが素晴らしいです。近年の発行ではちょっと話が急展開で細かくなってきているのですが、この先の展開も楽しみにしています。

WEB制作・ディレクター / デザイナー / 河本智芳

- 絵画のように美しい画力で、背景や衣装に至る細部まで緻密。そして重厚な世界観のボリュームにも毎巻圧倒されます。宗教、差別、性別など現代社会にも通じる問題を主人公が真っ直ぐ謙虚に向き合っていく姿が印象的。8巻で大きく展開が動いてビックリ！

営業 / 佐々木つむぎ

- いろんな意味で圧倒的！出会えて良かった！と、思ったのと同時に物語が完結するまで死なずに見届けたい。まだ8巻にして濃密な時間を過ごしているので、この先の展開も楽しみにしています！大賞を取って、世界中のマンガ好きに出会ってほしいです！

カンフェティ / 小森和博

- 本好き、魔法好きな人なら、ぜひ読んで欲しい作品。本を読めるって素晴らしい！

俳優 / ジェネラリスト / 大倉照結

- 作画のクオリティがとにかく高いと思います。物語のスピード感や、テンポも良くそのためファンタジーなのに、リアルにあるかのような引き込まれる作だと思います

tetote 代表 / 力丸 真

- 様々なものが緻密に作られていて圧倒的な世界観を持ったマンガだと思います。物語も、絵も、世界の設定も緻密に作り込まれていて、この世界観を構成するためにどれほどの時間をかけているのだろうと眩暈がする程です。魔法が存在するファンタジーの世界にあこがれた経験が一度でもある人には特におすすめです。昔あこがれたあの世界にどっぷりつかれるマンガだと思います。

会社員 / 廣瀬公将

選考員コメント・2次選考

- 確か第1巻が出た時に読んだはずだが、あまり響くものがなくて脱落していた。今回、8巻を一気読みして土下座したくなった。私の目は節穴でした。圧倒的面白さ。世界観がいわゆるゲームRPG的でなく、ハイファンタジーとして作り込まれているのもすごい。図書館を描いたマンガや小説はいくつか思い浮かぶが、この作品は、図書館を単なる正義として描かず、知＝情報の集中化／特権化の負の側面もきちんと見据えているのが素晴らしいと思う。混迷するネット社会への鋭い風刺にもなっている。まさに今読まれるべき作品だと思います。

読売新聞文化部 / 石田 汗太

- 正直なところ表紙から受けた第一印象で「原作付きの王道ファンタジーって、普段あんまり読まないんだよな…」と、そこまで期待せず読み始めたら、めちゃくちゃ裏切られ夢中になりました。特にセドナ見習い編あたりから、さまざまな背景をもつキャラクターたちが複雑に絡み合い、読む手が止まりませんでした。差別、表現の自由、情報統制など現実社会のヘビーな問題を思わせるテーマに、主人公のシオが悩みながらも誠実に向き合っていく様に胸を打たれます。完結するまで死ねない漫画が一つ増えました。この作品を今年のマンガ大賞候補に押し上げてくれた選者の皆さんありがとうございます…！

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- ゴリっとしたファンタジーでありながら、今の世相にも通ずる比喩ととれる表現がたくさん出てくる良作！書を信じる強さとピュアネスにやられました。この審査をしていなかったら食わず嫌いしていたかもしれない素晴らしい漫画に出会えて嬉しい！！

OKAMOTO' S / オカモトショウ

- まるですぐそばにあるかのように細部まで作りこまれた世界観に夢中にさせられました。ここまでで登場人物たちの内面がしっかりと丁寧に掘り下げられ、世界が広がってゆき、8巻にしてこの物語のより深いところに足を踏み入れていこうとするわくわく感がありました。この先も目が離せない作品です。

会社員 / 津田圭

- 緻密で繊細な膨大な書き込みで魅せる画の力とストーリーの重厚さ。爽快さ。一コマ一コマのこだわりもすごい。最高の意味の「全部濃ゆい」。とにかく見ないと損ですよ！読めばそのまま・・・！！絶対面白い。

図案家 / 橋本寛子

- 今年の二次選考作品のなかでは最もタフなマンガではなかろうか、と思ったので1位に推します。久々に一気に読み返して「いまここではない世界」を描こうというその気迫文明・文化の一葉を、自然の草木の一本を、徹底的に描いてやろう、という気迫とそれを実現する画力に感銘を受けた。やっぱりすごいなあこれ。最新刊8巻、読み応え十二分。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 自分が本に初めて触れた時、その魅力を教えてくれた物語に再び出会ったような、そんな感覚を思い起こさせてくれる作品でした。ふと、気になることがありました。原作での描写はどんなものなんだろう。原作者はどこの国の人なのだろう、と。きっともう完全に作者さんの掌の上。鳥肌が止まりませんでした。脱帽です。今すぐにでも誰かにお勧めしたくなるほど、作品の虜になってしまいました。

会社員 / 杉佳尚

- 全ての物語好き、マンガ好きな方に読んでいただきたい！本当に素敵な作品なので、読んでいただければ面白さはわかるので、ここでは多くは語りません。今から一気に8巻まで読める幸せを噛み締めながらぜひ！

カンフェティ / 小森和博

- 緻密に、丁寧に、世界を紡いできた本作も、もう8巻。あらためて最初から読み返すと、その物語だけでなく、風景にタイトルが出現する映像のような演出や、多様な民族背景を背負って登場する衣装や道具のデザインの巧みさ、情報量の凄まじさに気づく。もはや僕にとっても何度目かの旅だが、その魅力は少しも失われていくことがない。と、今まで何度か推薦文を書いたのですが、別の角度から入ってしまいましたが、憧れをまっすぐに追いつけることの素晴らしさを、本を開くたびに取り戻させてくれるこのマンガが、この先もっと世界中のさまざまな人に読まれてほしいと願っています。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 図書館という宇宙。そして、そこにある本と関わる人々。細部まで描写された絵も美しいけど、同様に世界観も物語もしっかりと作り込まれていて、一冊読み終わるとどっぷりと浸って満たされます。続きが読める事が嬉しいし、この続きはどうなるのかが早く知りたい・・・読んでよかったと思える一冊。

教師 / 持丸宏司

- 本で生かされてきた子が本の暗い側面ごとどう守れるのか。

大日本印刷 / 佐々木愛

- 本というものが好きならば、本に影響を受けて生きてきたならば、読んで考えさせられる物語。議題が重いため好みはあれど、設定の密度、描写の密度、巻の引き際のインパクト、こんなに素晴らしいのに意外と読んでいる人が少ないことがずっと歯がゆかった。今年ようやくノミネートが叶って心から嬉しいです！！

WEB制作・ディレクター / デザイナー / 河本 智芳

- 深く練り上げられた世界と人物たちが美麗に、力強く描かれ、その魅力にどんどん引きずり込まれていく。少しずつ知れていくその世界の知識と物語の行方が、ページをめくるワクワク感が止まらない。幕間の設定紹介も見ごたえ抜群だし、1集ごとのまとめ方や引きの作り方も秀逸で、4集のラストを見たらもう最後まで見届けるしかなくなった。“書”の持つパワーを描き伝えてくれる、この骨太なハイファンタジーの書の魅力を多くの人に味わってほしい。

会社員 / 伊東敬祐

- 繊細で密度の高い作画、どっしりとした独自の世界観、そして計算されつくしたシナリオと設定に圧倒されました。作者陣の名前ですら後で読み返すと「あ！」となる…すごい…！何年たってもずっと読み継がれていく物語だと思います。

ゲーム会社勤務 / 畑中瀬路奈

- 意外にも初のマンガ大賞ノミネートなんですね。なぜ今ノミネートなのか？とも思わなくもないですが、改めて既刊を読み直す機会ができて良かった。壮大過ぎる図書館を巡るファンタジー。話が進むにつれて明かされる謎と新しく出てくる謎要素のバランスが絶妙。そしてなんといっても画力の高さ。世界観の説得力を高めている。世界が広すぎてまだまだ話は中盤にも差し掛かってないのかもしれないけど、先になってもじっくり最後まで描いてほしい。

bar 図書室 / 岡部愛

- 「風のカフナ」って原作があって著者はソフィ=シュイムという人でそれを濱田泰斗って人が訳したものを泉光がマンガにしたって表紙にはそんな触れ込みがあるけれど、奥付の著者名とクレジットは泉光で(C)Mitsu Izumiだったりするあたりに何かいろいろありそうだから、翻訳書のコミカライズに過ぎないんだよねといった思いは引っ込めておくのがよさそう。もちろん翻訳書だろうとライトノベルや小説だろうと原作があってそのコミカライズでも素晴らしいものがいっぱいあるから分け隔てはしない。そうしたことへの疑問符を超えてでも『図書館の大魔術師』は深い物語性があるって広い世界観があるってユニークなキャラクターたちがいる上に、それらを圧巻の画力で描いて目にも素晴らしいビジョンを見せてくれる。なおかつ何か潜みがありそうな部分がおのここの作品にある種の神秘性をもたらして大いに気にさせるのだ。差別されていて本すら読ませてもらえない種族の子供がそれでも本に並々ならぬ興味を抱いてそのことをセドナという司書(カフナ)に気付いてもらえて道が開ける。ボーイ・ミーツ・ガールなのかおねショタなのかは判断に迷うところがあるけれどもそうして生まれた関係性を軸にしつつシオ=フミスという名の少年が夢を諦めないで頑張るって司書になっていく成長のストーリーがあり、精霊たちが絡んで起こるファンタスティックなエピソードもあってとこことは違う場所の暮らしに触れられる。本がもたらす叡智というものも本好きにはとても響く。世の中には本を読まないでも生きていける人はいるし、それで悪いことはないけれどもせっかくまたにこれだけ溢れた本なんだから読んでおきたいと思うのが道理。そこに詰まっている知見であり描かれている世界でありといったものに触れることで、得られる満足感だけで人は生きていけるのだから。いや食べないと死んでしまうけど。そこの両立を図る意味でも司書って最高の仕事かも。なんてことも思わせてくれるマンガだ。

書評家/ライター / タニグチリウイチ

- 大作ファンタジー漫画に欠かせない「世界観の作り込みの細かさ」と「圧倒的な画力」がきっちり揃っている名作。読者は「本」を大切に思っている人が多いはずなのでこの世界でいかに本や物語が大切にされているか、勇気や夢を与えてくれる存在であるかがぎゅうっと描き込まれていることに夢中になれるはず。この物語の主人公シオを通して一緒に成長しているような没入感が得られる作品です！

元書店員 / 内野智未

- 作画のクオリティがとにかく高いと思います。物語のスピード感や、テンポも良くそのためファンタジーなのに、リアルにあるかのような引き込まれる作だと思います

tetote 代表 / 力丸 真

- 海外のファンタジー小説のコミカライズか、と思って原作を探してみましたが、、、。ファンタジー好きなら、いやそうじゃなくても、必読です。

オフィスオーガスタ マネージャー / 樋口健

- 8巻で大きく物語が動き出し始めました。ここまで異様なまでに丁寧に作り込まれてきた世界観があるからこそ、この先に予感される出来事の重大さが読む側にも緊張感を持って伝わってきます。一つの事件が起きるたびに、この世界で働き生きる人たちがどのように反応し、行動を変えていくかが絵的にも圧倒的なディテールで描き出されていて、世界のうねりやどよめきが紙面を通して伝わってくるかのようです。国産ハイファンタジー現在進行形の最高峰と言っても過言ではない作品です。

株式会社ムービック / 岡部 真矢

- たぶんマンガ大賞の選考員のみなさんはこの本が大好きだろう。本好きなら有川浩の『図書館戦争』シリーズを例に挙げるまでもなく、図書ネタについてはつい傾倒してしまう。本作の主人公シオ・フミスは貧しく本が買えない少年時代を送るが、努力を怠らず都会で働く機会を得て、知識と魔法に磨きをかけていく。その様が実に小気味いい。もっとも読み心地がいいシーンばかりではなく、きっとこの先、負荷がかかるシーンがやってくる。それでも、本好きたちとこのマンガについて語り合いたい。そう思わせてくれるシリーズ。

ライター／編集者（馬場企画） / 松浦達也

- 「本によって個が苦しむのはしかたがない」とある登場人物の長回しの一部ですが、個人的にはよくこれをこの作品で言わせたなと思いました。主人公はこの言葉に抗っていくのかもしれませんが、こういう物事の本質を浮き彫りにする側面にも今後とも期待します。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- これを読んだら久しぶりに図書館に行きたくなった…！とても綺麗な絵とよくできた話で、一気に最新刊まで読みました。ちょっと忘れていた感覚、世界は自分の手で切り開けるんだと胸が熱くなる作品です。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 一次投票しました。祝ノミネート！もしこれから読んでみようかなと思う方がいたら、ぜひ電子ではなく紙で読んでいただきたいです。図書館・本を題材にしてるので描き込み凄まじい表紙も含めて、良質なファンタジー文学のような満足感が味わえます。

営業 / 佐々木つむぎ

- 中世の中央アジアのような世界にファンタジーをミックスした舞台を細部までとても丁寧に描かれています。物語の導入や進行などとても読みやすく世界観に入りやすいです。古典的ではありますが、ドストレートな冒険活劇は非常に好みます。

デザイナー / 高永貞光

- 二次選考にあたり初めて読みましたが、重厚な世界観とストーリー、それを見事に表現する緻密な絵柄に圧倒されました。書物と魔術を巡る物語で、海外児童文学、とりわけファンタジーが好んで、本という存在そのものが好きな人にはたまらない漫画だと思います。キャラクターもそれぞれ個性があり、第一印象が最悪だと思ったキャラクターも、単に嫌な奴で終わらないところがいいですね。とにかくいろんな設定が練りに練られて壮大な物語になりそうなので、今後どこまで話が広がっていくのか楽しみです。

主婦 / 堀江千秋

- 繊細な書き込みだけでも圧倒されるのに世界観もすばらしい漫画。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- 友達の大きな本棚から借りた漫画でした。子供の頃に図書館で借りた児童書を読んだ時のようなわくわく。物語はもちろんです。素晴らしい絵がさらにわくわくさせてくれます。ページをめくるのが楽しい。ある仕掛けにも驚きました。ぜひあまり調べたりせず読んでほしいです！

声優 / 冨岡美沙子

- やっぱり「本」が好き。と再認識させられた。SNSのない世界設定で「知」を保存する手段は本しかないのを本を大切にしているのは当たり前なのだが、メインストーリーではない、本の修復作業とか装丁・紙質に言及する話が楽しい。逆に本に全く興味のない人にとっては本作の魅力は半減するんじゃないかと思うが、学園もの・お仕事もの的な楽しさに、主人公の出生の秘密や世界の謎に絡んだ英雄たちの過去の真実など、王道のファンタジー物語は、読んでいて飽きさせないし、非常に先が気になる。欠点は、長所と裏表だが、完結がいつになるか想像できない丁寧な描かれる壮大な展開。絵や内容の密度を考えると年1冊の刊行ペースは早いぐらいだと思うものの、見習い期間を終えて配属部署が確定して、いろいろあって世界の真実を知って敵と戦って、予言されている世界が変わる出来事で主人公が重要な役割に担って・・・あと10年どころじゃ終わらないよね。

丸善ジュンク堂書店・書店員 / 小磯洋

- 差別を受ける少年が本の世界に魅せられ、困難を乗り越えていく王道展開の中に、本に関するたくさんの知識、ファンタジーを交えた歴史文化や魔術などワクワクが溢れた作品です！「本」好きの方にぜひ読んでいただきたい作品！

会社員 / 竹本慧

- 図書館好きにはたまらない作品がまた出てきちゃった……！ という感じ。子供の頃、図書館は魔法の世界への入り口だった。どこにでも行けたし、どこまでも行けた。図書館に足を踏み入れると、その先には知らない世界が広がっていて、どの本を手取るかで行先は変わるスリリングな場所でもあった。あのときの高揚感が作品の中に溢れていて、どんどん引き込まれる。司書さんに導かれて旅に出る、あの感じが最高に楽しい。

ライター・編集 / 島影真奈美

- とても綺麗な描写で広がる壮大なストーリー。イラストもキャラもストーリーもどれを取っても完璧で、漫画の枠を超えた感動がありました。最高に面白かったです！序盤にいじめっ子が出てきて主人公に絡みますが、画力凄すぎていじめっ子すら可愛くて憎みきれなかったです（笑）こんなにも映画にも負けないスケールが漫画にも描けるのだと驚きました。

芸人 / ムーディ勝山

- 主人公が本を通じて成長し、仲間との絆を深めていく姿に、ただの冒険物語以上の価値を感じます。読後その情熱と書に対する深い愛情に胸が打たれました。

株式会社エイミング マーケティングプロデューサー / 伊藤千恵

- イラストの良さとストーリーの良さ。司書という職業が世界を動かし、そこに魔術を絡めているのも面白い。主人公以外のキャラクターのストーリーも面白く、この先が楽しみです。

デザイナー / 平沼寛史

マンガ大賞2025 ノミネート作品

月刊アフタヌーン / 講談社

「どくだみの花咲くころ」城戸志保

選考員コメント・1次選考

■ クラス内の問題児・信楽くんの創作物に沼った主人公・清水くんの推し生活のお話です。優等生のはずの主人公が、推しの為に色々奮闘しバカになっていく姿、その他の登場人物（特に担任の先生）にも魅力があり、全て愛おしいと思えるマイベスト漫画になりそうな予感。誰かへお勧めする際にかなりの説明力を必要としそうですが、「皆さん、一話読めば分かります」と断言できる漫画ですので、無料で第一話と読み切り版が読める公式サイト・アプリへ今すぐGOです。

会社員 / ターシ

■ 同じクラスにいる少々特性が強い少年・信楽くんと、何でもソツなくこなせる清水くん。一見正反対の2人だけど、信楽くんの作る工作にもはや性癖と言ってしまうくらい惹かれてしまった清水くんのやり取りがトリッキーながらも微笑ましく、1話ずつ進むごとに変わっていく2人の関係性が最高です。小学生にとっては大きすぎる家庭環境の違いも、普通も普通じゃないもなんのその、当たり前前に包みこんでしまう懐の深さ。この2人をはじめとした登場キャラクターもみんな人間くさくて魅力的です。すでに注目されていますが、やはり今回推さずにはられない一作です。

公務員 / 宇田川結衣子

■ 恵まれた境遇に暮らす優等生なきよみず君といろいろとギリギリながらき君の友情？物語です。シンプルなコマ割りながら、カメラの寄り引きがめりはりがあって、リズムよく、またそのことが物語の密度の高さを上げることに貢献してくれているような。まだ2巻ですが、とても濃密な漫画体験をさせてもらっています。二人がどこへ向かっていくのか、とても気になります。

教員 / 戸田穰

■ 今回「鉄板」とは思いますが、それでも票を投じたくなる秀作。読み始めの頃は、正直、昨年の受賞作に構造が似過ぎていても感じた。しかし、それはある種「時代が求める普遍的価値」ではないかと思直した次第。事件的には何のアップダウンもないこの物語を、これだけ面白く続けられる作者の才能は本物だと思う。

読売新聞文化部 / 石田汗太

■ クラスで浮いてるちょっと変わり者と優等生とのボーイミーツボーイ。クスッと笑ってしまう場面が多く、楽しく読めます。小学生男児、おもしろいよね。

主婦 / 赤坂真実

■ キャラクターが魅力的過ぎる。多様性などの難しいテーマを感じつつもキャラクターの魅力と独特な作風、圧倒的な話の面白さでストンと作品に入り込んでしまいます。

会社員 / 竹本慧

■ 家庭環境も性格もまるで違う2人の少年が、信楽くんの（得体の知れない）アートを通じて友情を育んでいく。子供さえ格差によって分断されてしまう時代、プリミティブな衝動と感情でその壁を乗り越えていく2人がなんとも爽やか。そして何より、独特のゆるいギャグや端正な絵が魅力です。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

■ 不器用だけど良き友情。子育て中で友情とかつつつい惹かれる。

カメラマン / 平沼 久奈

選考員コメント・2次選考

- クラスの問題児・信楽くんへの推し生活により、優等生だった主人公・清水くんが変質していく様が面白いです。話が進むにつれ、清水くんの行いに信楽くんが引くのもいいですね。段々と他キャラクターにも話が広がり始めたので、色んな人物の色んな視点での展開にも期待大です。作品を通して日常の物への見方に影響を受けそうな作品です。

会社員 / ターシ

- 信楽くんと清水くん。クラスの問題児と優等生…かと思いきや、逆に見えたり2人ともそれぞれに不器用さを抱えていたり。人によって濃淡はあれどいわゆる「普通」からは少しズレていて、その凸凹を時にはお互いに、時にはたまたますれ違った誰かに支えてもらったりという、読者にとってもなんとなく思い当たるような不安と安心が入り混じった不思議な作品。好きです。2人とも伸び伸びすすく育っておくれ！

元書店員 / 内野智未

- どくだみの花咲くころが懐かしく思いだされる、この時がそんな過去になる頃までふたりの少年を見守っていきたい。

教員 / 戸田穂

- 物語りの始まりからずーっとモヤモヤしたもどかしい気持ちで、読んでいる自分の感情やどのように展開して欲しいのか自分でもわからなくて奇妙な気持ちになる作品でした。とにかく面白いと思ったことだけは間違いない。

PENICILLIN / HAKUEI

- 破天荒な天才に振り回される優等生の男の子の話かと思いきや、なんだかんだで二人ともやばい、いやむしろツッコミ系優等生に見える清水くんの方がナチュラルにぶっ飛んでいるという驚きのインパクトでまずやられてしまいました。人とは違う感性や行動様式を持っていることによる生きづらさとか、創作の儂さと尊さにも触れつつ、それでも清水くんと信楽くんの不思議な距離感を眺めることに浸っていただくお話でした。信楽くんへの極大感情でどんどんクレイジーになっていく清水くんに目を奪われてしまいます。独特の色気の漂う絵柄から繰り出される、中毒性のある空気感と、噛み合わなさがむしろ心地良くなってくる会話のやり取りが癖になります。

株式会社ムービック / 岡部 真矢

- どくだみの花の野生的なウツとなる青臭さがクセになる、そんな作品。読む前の勝手なイメージ、予想を完全に裏切られてめちゃくちゃ笑ってしまった。ギャグテイストの中にも触ってはいけない、触りたくないと思わず境界線を引いてしまう自分の弱さ、その核心をグサグサ突いて刺してくるようでもあって。「僕たちにはわかるんだ」「だけど言葉にするとどンドンずれていく気がして だから今はただ見ていたい」他者と一瞬だけ通じ合った瞬間のかけがえのない尊さやその儂さを、感覚でなんとなく理解している瞬間がきらきら輝いていてグッとくる。

フリーランス / 金輪英恵

- 岡崎体育が自我をこじらせた持たざる20代の屈折マインドを歌ったインディー時代の名曲『鴨川等間隔』。歌詞のなかに「橋の上、見下ろしながら見下される」という一節がある。鴨川沿いに等間隔で座るカップルを橋の上から見下ろしている自分が、実はカップルたちから見下されたような気持ちになる心情を歌ったフレーズだ。屈折した自我を自覚しているからこそ、俯瞰したメタ視点で気持ちまで見通している。そんな重層的な自分を自覚するのは、この作品の主人公の年頃（小学校高学年頃）だろう。優等生は自認するより幼い部分を持ち合わせ、ナチュラルなみだし者はときにとてもまっとう。そんな小学5年生の2人が織りなす友情物語は誰もが経験した甘酸っぱい時代を想起させてくれる。気持ちを寄り添わせたいという情熱は、不器用なコミュニケーションで相手との関係にテンションコードのような代えの効かない音を響かせる。コミュニケーションが整理されて久しい大人にとっては、こんな甘酸っぱい少年・少女時代が羨ましくもある。清水、信楽、九谷、小鹿田、小石原、瀬戸、丹波、砥部、壺屋、笠間、唐津、美濃など登場人物全員焼き物という仕掛けもちょっと楽しい。

ライター／編集者（馬場企画） / 松浦達也

- 表紙の絵の感じから想像していた話と全然違っていた！いきなり大好きな漫画に入った。これだから自分が知らない面白い漫画に出会えるからマンガ大賞は素敵だなあとしみじみ・発達グレーな子の成長について考えさせられるものもありながら、キャラクターが生き生きとしていて、楽しく可愛く面白い

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 突発的な行動と繊細さでクラスに馴染めない信楽くんと、優等生で「いい家の子」の清水くん。まるで異なる2人の少年が、信楽くんの「異形のアート」を通じて予想もつかない方向に交流していく。特にクールな清水くんが暴走していき、信楽くんをドン引きさせるシーンは最高でした。ユーモラスなやりとりと詩的なモノログでつむがれる物語は、まるで良質な児童文学のような読後感。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 清水と信楽の信頼関係が独特な形で形成されていく物語で、日常の話でも常にどきどきしながら読んでしまいます。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 1巻もすぐおもしろいと思ったけれど、まだどういった作品なのかがつかみきれなくて、でも2巻で「あ、こういうことが描かれていくんだな」と合点がいき、かつもっともおもしろくなっていて、もっと好きになった。お母さんたちの描き方もだいです。

ライター / 門倉紫麻

- 子どもはみんなおもしろい。常にどこかで大人の想像を超えてくる。大人かと思うような常識的な対応をしてくる子もまた、見ていると型にはまらない部分を見せてくる。しかしそんな子どもたちも、大人になると尖った部分が見えにくくなってくる。自分もまたそんな1人だからこそ、せめてマンガの中だけでも、大人の予想を軽く上回ってくる子どもたちの姿を見ていたいかもしれない。

会社員 / やのこうじ

- キャラクターが魅力的過ぎて最高に面白い！多様性などの難しいテーマを感じつつもキャラクターの魅力と独特な作風、圧倒的な話の面白さでストンと作品に入り込めてしまいます。信楽君に執着する清水君の奇行に毎話吹き出してしまいそうになります。これからも楽しみです。

会社員 / 竹本 慧

- 小学生男子だったことは一度もないのに、あの日に戻りたい……と思わせてくれる作品。あの子、変だったよなあとか、でも、一緒にいてとてつもなく楽しかった放課後とか、いろいろなものを思い出す。ちょっとこだわりが強く、ふつうにしてたら集団からはみだしちゃうような子たちのとくにキラキラしているわけでもない、なんの褒賞もない日常と掛け合いがいとおいしい。ほのぼのしているんだけど、作為的なほのぼの感とは一線を画してるところも好き。

ライター・編集 / 島影真奈美

- 小学生の発達障害児を描く難しさに成功している。同人誌での意欲的な挑戦が実を結んだ。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 痲癩やパニックでクラスで浮いてしまう特性がある信楽くんと、成績も良くなんでもこなせる優等生の清水くん。一見絡み合うことなんてない二人が、ある日見た信楽くんの工作に対する清水くんの偏執的な思いからどんどん仲良くなっていくのですが、この凸凹ながらも、全てを理解しなくても興味だけで突き進んでいくのって小学生男子！って感じで笑えます。現実はそのうまいかかもしれないけど、誰が普通とか普通じゃないとか、おうちがどうか、仲良くなるには関係ないんだよね、本当は。ちょっと変わってるけど、面白いやつじゃん！特性や複雑な背景はあるけれどもフォーカスされすぎず、キャラクターの一面として漫画の背景の一部になっているのがこの漫画の懐の深さだと二次で再読して改めて思いました。ややシュールな絵柄やカバーデザインもストーリーの空気感にマッチしていて漫画として完璧。もっとたくさんの人に知られてほしいです。

公務員 / 宇田川結衣子

- 主人公清水の自分の立ち位置を知った瞬間が気持ちよすぎてやられた。人生で一番大事な場面って自分が主役ではないって知った、その時なんじゃないかとすら思えた。友人関係がたくさんの失敗の中から構築されていくのも楽しい。今後もずっと追っていきたい、そんな微笑ましいマンガ。

October Beast 代表・デザイナー / 北山友之

- 優等生のタガが外れてしまう清水くんのリアクションは、何度見ても楽しい。端正で冷めたタッチの絵柄もじわじわ怖いし、それが崩れるところの衝撃がたまらなくクセになる。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 「こどもの世界」ものだが、小学校高学年男子を描いた作品って意外と少ないような。言語化が不得手な子と饒舌な子を対置させつつ、意外と立場が逆転したりするのが面白かった。

ときどきライター / 縣丈弘

- 昨年の「君と宇宙を歩くために」にやや構造が似ているのだが、本作には本作の面白さがきちんとあって、その点を高く評価したい。芸術とはそれ自体が独立して「ある」のではなく、鑑賞者がいて初めて成立するのだという、ある種マンガの本質にも関わることが、軽妙な笑いのうちにさりりと描かれていて気持ちよい。それにしても、本作に限りませんが、最近「推し」という価値観が「愛」を超えつつあるのでは？ 大げさに言えば、これは文明的転換だと思えます。

読売新聞文化部 / 石田 汗太

- 実は今回のノミネート作品では第一印象で「読まず嫌い」だったのがこの作品だ。絵に癖があるというか、素朴な感じで。ところが読み始めるとこれが止まらない。優等生で足も速く、恵まれた家庭に育った清水（キヨミズ）と、奇声を上げたり奇行に走ったりと予測不能な行動が多く、クラスで遠巻きにされている信楽。正対な2人の小学5年生の交流を主にキヨミズ視点で描く。5年生といえば自我の発達とともに自意識過剰の渦の縁に片足がかかり始めるころ。「自分が主役」だった世界で「他者」の存在感が増してくる時分でもある。級友や大人に気に入られる思考や所作をそつなく身につけたキヨミズだが、信楽の芸術的才能を「発見」したことで、衝動を抑えられず少々ストーリーチックに彼につきまとうようになる。その一方通行的で過剰な前のめりと自問自答ぶりは実にコミカル。2人のすれ違いがたまに埋まったときのトキメキ描写はほほ笑ましい。そしてコミュニケーションに難がある問題児だったはずの信楽が、前触れなく発する実在的発言は格好いいとしかいえない。「正常」な自分と「正常じゃない」はずの彼の立場が反転する瞬間は見どころだ。子供時代の終わりごろ、つまらない大人になる前に信楽と出会えたキヨミズは幸運だ。その得がたい価値に気がつくのは、たぶんありきたりな大人になってしまってからなのだ。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 掲載誌のアフタヌーンで1回目から読んでいますが、この作品の魅力をあらわす言葉がずっと見つかりません。分析めいた評価をしてしまうと、この作品に対して失礼な気がしてしまいます。信楽くんも清水くんも、なんだかいつもわたしの予想外。「この子たち、なんておもしろいんだ…」というシンプルな視点で、これからも彼らを見守っていきたいです。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 読み始めた当初は前回大賞を受賞された「君と宇宙を歩くために」的なものなのかなと思ったんですが、また違う内容に昇華されてますね。清水くんの突き抜けた感情と、信楽くんの不思議な存在感が絶妙なバランスで絡み合っていてとても面白い。特に、清水くんが信楽くんの才能に気づいてからの暴走っぷりが最高。小学生らしい、好きが暴走するとこうなるんだなというエネルギーの強さに共感してしまいます。

会社員 / 三浦佑樹

- 痾癩もちでちょっと変わっている信楽くんと、彼が作る『作品』に魅せられた優等生清水くん。清水くんの『作品』への執着が変態じみていく様と、二人のかみ合わないやりとりがツボです。「ふふっ」って笑わせてくれる大好きなお話。

主婦 / 赤坂真実

- 変な感じだけど普通な感じ、一方的な視点では見えないものだらけでいい。

大日本印刷 / 佐々木愛

- 信楽くんの魅力に憑りつかれます。清水くんの気持ち判る～。すごく深いことを言われているようで、そんなシュールなところからの???これは何なんだろう?となる展開など、もうすごく楽しい体験をさせてくれます。よくよく読むと清水くんも相当変!

株式会社アニメイト / 鈴木寛子

- 子どもの頃、ずーっと「普通とはなんだろう」と、調査している感覚があった。それに価値があるかどうかは置いておいて、楽しいことが楽しいと思えない、悲しいはずのことが悲しくない、おいしいものがおいしくないのは、恐怖だった。そこから「常識」という最適解を身につけてきて大人の顔をして過ごしているのだが、今なら分かる。持って生まれる感性は、人によって、まるで、まるで違うのだ。そしてその感性に従って生きることに、何ら遠慮は要らない。明らかに人と違う信楽くんはもちろん、「俺は勉強ができる たまにわざと間違える」と他人の考えを視野に入れることが出来ているようでそこが本質じゃない清水くんのふたりが、あるがままである瞬間が清々しい。それを連続写真のようにすくい取るこの作品、奇跡。

ニッポン放送 / 吉田尚記

マンガ大賞2025 ノミネート作品

FLOS COMIC / KADOKAWA

「死に戻りの魔法学校生活を、元恋人とプロローグから（※ただし好感度はゼロ）」白川蟻ん、六つ花えいこ、秋鹿ユギリ

選考員コメント・1次選考

- 主人公の頑張りに泣いてしまう。コミカライズの最高峰だと思います！タイトルから想像した味ではなくて驚きました。ファストフード食へに行ったら高級料理だった気分。

声優 / 綾瀬有

- 今年いっき読みして一番泣いた漫画です。長いタイトルで手に取らない方もいるかもしれませんが、これは本当に上質な少女漫画です。困難を乗り越えて気持ちを通じあったと思いきや…本当にもどかしいけれど、みんな必死で、その熱や空気が触れそうな間の表現、素晴らしいです。

WEB制作・ディレクター / デザイナー / 河本智芳

- 今年、1番オススメする作品です。恋人のヴィンセントと共に死に、自分だけが過去への記憶を持ったまま魔法学校でかつての恋人と出会い、今度こそ守ろうとするオリアナの物語。表情や一コマが何て魅力的で可愛いのだろうかと読み返すたびに感動します。コミカライズ作品として大成功だと思います。原作自体の内容やキャラクターの魅力が最大限に描いていて世界観が美しく、演出も素敵です。オリアナ、ヴィンセント、他のキャラクターも可愛すぎて心臓がギョーンとなります。

営業 / 佐々木つむぎ

- 転生系の作品がなんとなく苦手で避けたいのだけど、人に勧められて読んだら見事にハマりました。良質の少女マンガで、胸が締め付けられたりキュンが止まらないです。

主婦 / 赤坂真実

- 友達に勧められ、絵がとても可愛くていいなぁと読み始めましたが、キャラクターみんな好きになって、関係性も素敵で、お話も謎を残しつつ進んでいくドキドキと恋模様にもニコニコしながらあっという間に既刊全部読み終えてしまいました。気になって原作小説も読みました。もちろん物語はそのままにコミカライズされているのですが、こんなにも感情をすくい取ってくれているのかと驚きました。文章や物語が持つ雰囲気と魅力的なキャラクターの表情や仕草、感情を見事に絵で表現されていたんだと感動しました。私も文章の情報だけでお芝居することもあるので、改めてしっかり表現したいと思いました。

声優 / 富岡美沙子

- 異世界？ファンタジー？生き返り？タイトル長いな…などと、正直流行に付いていけなかったがために、先入観でこれまで避けていたことを後悔しました。もし同じように思ってる方がいたら、迷わず読んでください。美しい絵と、甘く切ない物語、ひとたびページを捲れば虜になること間違いなしです。タイトルから思い浮かべるイメージとは違い、内容は古典的かもしれませんが、時折、敢えて世界観とは少しずれた表現や台詞を使っていて、そこがまた良いです。私はそのお陰で入り込みやすかった気がします。頑張るオリアナ、一途なオリアナ、愛する人のためなら後先を考えないオリアナ、とにかくオリアナが可愛いです。まずはヒロインを好きになれるかが肝なので、最高でした。そしてヴィンセントの感情の変化、表情の変化、少しずつ解かれていくのがよくわかり、不器用な愛情表現に完敗。みんな大好き（ですよ？）ミゲルをはじめ、周囲のキャラクターにも溢れんばかりの魅力があります。素敵な物語に出会えて本当に良かったです。

会社員 / 堀尾素子

選考員コメント・2次選考

- 色々各方面に謝りたいとまず正直に思った。読まず嫌いは良くないなあと。いやぁ！面白い！続きが一気に読みたくなった。夢中になった。人におすすめたくなった。読んで欲しいと思った。こんなにもまっすぐで、好きを溢れさせて、頑張っ、健気で、一生懸命で、この主人公を見ていてめちゃくちゃ応援したくなった。女性だけでなく、男性も絶対ハマる。自分がハマったから、敬遠しないで読んでほしい！

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 一次投票しました！ノミネートとっても嬉しい？！！2024年で1番友人にオススメした作品です。とにかく絵と表現力が素晴らしいコミカライズ作品。一コマ一コマが美しく、登場人物が可愛くて。思春期のように、コマ毎に漫画に打ち震えて感動するのは久々だなあと幸せな気持ちになれました。『死にプロ』が沢山の人の胸キュンしてもらえますように！

営業 / 佐々木つむぎ

- とにかく絵が綺麗で登場人物たちのちょっとした表情が可愛くて引き込まれます。毎回きゅんきゅんしながら読ませてもらってます。登場人物みんなとにかく綺麗で良い子たちでみんな幸せになって欲しいです。

デザイナー / 玉澤綾子

- 恋する女の子が頑張る姿ってどうしてこんなにも愛おしいのでしょうか。そんな月並みな言葉を並べるべきではないかもしれませんが、やっぱりどうしたってこの漫画の一番の魅力は、オリアナの真っ直ぐにがむしゃらに頑張る姿だと思うのです。オリアナの行動に、言葉に、心を動かされ、死に戻る前の世界とはまた別の物語が進んでいく。とにかくキャラが魅力的で、オリアナはもちろん、ヴィンスには乙女心をくすぐる魅力があり、読者は漏れなくオリアナと一緒に悶えていると思います。みんな大好きであろうミゲル、全てのツボを押さえている男です。オリアナの優しい友人である、気高く強く美しいヤナ。何度ヤナのような友人が欲しいと思ったことか。そしてヤナの護衛であるアズラク。ヤナとアズラクの物語は、ぎゅっとなる胸を押さえながら必死に読みました。私自身はあまり流行に乗れておらず、いわゆる異世界・転生モノにはあまり手を出していませんでした。実はこの作品も、存在を知ってから読むまでに時間がかかってしまいました。でも読み終えてから、なぜもっと早く読まなかったのかと後悔しました。もし同じように読もうか迷っている方がいたら、ぜひ手に取ってほしいです。きっとあなたの世界に彩りを添えてくれます。

会社員 / 堀尾素子

- 心から人に勧めたい、いや、勧めずにはいられない作品だったので投票させていただきました！長いタイトルの作品をつい敬遠してしまうことは、読書経験が豊富な方ほどあるかもしれません。しかし「死に戻り」は避けるにはあまりにも惜しい作品です。キャラクターたちのひたむきさに何度も胸を打たれました！泣きました！！ドキドキハラハラしました！！先が気になって原作小説の方も少し読んだのですが、展開を知っていてもマンガの更新を今か今かと楽しみにし、一コマ一コマに一喜一憂しています！！感情がこんなに乱高下する作品に会えて嬉しいです！！

声優 / 綾瀬有

- BL以外の恋愛マンガと距離を置いて早数年、そんな私がどハマりしたこの作品。なろう系、ファンタジー、異世界、死に戻り、魔法学校、今まで避けていたワードてんこ盛り。しかしその根幹は良質の恋愛マンガで。健気に相手を思い守ろうと努める登場人物たちの(両?)片思いすれ違い譚なんて、少女マンガで育った人間は大好きに決まっている！ぎゅーときゅんの繰り返しで、涙を流したりにっこりしたり感情が忙しい。とにかく登場人物みんな良い子、嫌な奴が出てこないのも良い。私はもう天の目線というか親目線で読むことしかできないけど、若い子にはぜひ自分目線で世界に入り込んで読みふけてほしいです。もちろん、私のように恋愛マンガから遠ざかっている古の少女マンガ読みたちにもおすすめです。

主婦 / 赤坂真実

- 過去に戻ってやりなおし、というもう子供のころから観まくったお話でこうして今もドキドキできるのは何故なのか？男女が人が惹かれていくのは根源的に生き物に備わったものなのだからなのか？細かく考察する必要はないのかもしれない。このマンガはとても面白くて、そしてどの巻を読んでも恋が詰まっていてドキドキする。

October Beast 代表・デザイナー / 北山友之

- 「なろう系」や「〇〇令嬢」などの長い作品タイトルのファンタジー系作品にはなんとなく手が伸びないまま今まで過ごしてきました。そういったレーベルの作品がマンガ大賞にノミネートするのもめずらしいなと思いながら読んでみたところ、とても面白くて食わず嫌いを反省しました。魅力的なキャラクターたち、特にミゲルのことを好きにならない女性はいないのでは？これきっかけで、他のファンタジー作品も読んでみようと思えました。新たな出会いをありがとうございます。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- どのキャラも好きになる。可愛すぎる。健気で元気っぱいのオリアナも、素直になれない(たまに素直な)ヴィンセントも、とっても優しいミゲルも、寄り添ってくれるヤナも、静かに熱いアズラクも、みんなみんな大好きで、どうか全員幸せになってくれと祈りながら読んでいます。読み進めたり読み返したりして気づくこともあるけどまだまだ謎は残ったまま。早く続き読みたい！

声優 / 富岡美沙子

- この世界観が、好きです。

書店員 / 桶谷佳代

- 今流行りの設定と言えばそれまでですが、絵の上手さもさることながら、いつの時代にあっても支持を得たであろう作品力は普遍的。少女漫画的心理描写と青年漫画としても耐えるミステリー要素のある展開は、寧ろ「流行りの死に戻りモノ」なんて偏見で読まず嫌いしてたら勿体ない良作です。

中央書店 / 井出麻悠美

- 個人的にはなろう系のコミカライズの作品はあえて、マンガ大賞とは別カテゴリーと思って(今までどんなに自分のおすすめ作品でも)あえて候補外にしていたんですけど、この作品は特にコミカライズされたことで、ものすごく原作の世界観を美しくも切なく切り取って余すことなく表現していると思います！(原作では全然序盤なのに)情感がどばどばと溢れて、こんなに胸が張り裂けそうになる展開、マンガの方が、より泣けます！なぜ死ななければならなかったのか、その理由はコミカライズの段階ではまだ判明していなくて、回帰したことで変わってしまった互い&友人たちとの関係、それでもやっぱり好き、そんなより細かい心の距離感や機微がセリフのないコマからも溢れて来て、読むたびに胸が痛い！マンガで心をこれでもかともききさせて、ぜひ原作で心の補完をして欲しい作品？！！(とはいえこの作品はあえて原作を読まずに、マンガで真相まで追っていったら原作を読んで欲しいかも！)

俳優 / ジェネラリスト / 大倉照結

- ヴィンセントとミゲルが見目麗しくてドキめく。ロマンス漫画としてもとても綺麗な絵で良いし、恋愛要素だけで無く黒幕が居るのではないかというミステリー要素もあり、続きが読みたくなる漫画。主人公の言動に私はついていけない部分もあるが、そのあまりの一途さに心を揺さぶられました。

主婦 / 岸本しのぶ

- 絵の魅せ方がとても上手くて良かったです。続きが気になりすぎて原作に手を出したくなりました。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- なんて素晴らしい少女漫画。原作の方の話作りやキャラづくりはもちろんベースだけでも、空気の手触りを感じられる線の描写が時間を感じさせる。表情を見せるシーンとあえて見せないシーンの緩急が素晴らしい。せつなくも辛くなる前にすこしギャグを入れてくれて、読み進めやすい。後半のヤナのお話が昨年一番ポロ泣きました。タイトルが長いとよくある転生系と思って読まない人もいそうなので、そういう人にこそ勧めたい。

WEB制作・ディレクター / デザイナー / 河本 智芳

- 異世界なろうの中で、自分がの上がっていくとか、すぐくつらい立場を逆転していくというのではなく、他人(大好きな元恋人)の為に、自己犠牲も厭わない行動に涙が出ます。もう誰が犯人なんだ！と思いつつ、実は犯人にも事情があったのかもと、この物語に出てくる人たちみんなに感情移入してしまう優しさがあります。オリアナ、ヴィンセント頑張って乗り切って！生きて！

株式会社アニメイト / 鈴木寛子

- 人物の内面描写が細やかで読んでいるうちに、登場人物みんなが好きになってしまいます。特に表情だけで語らせる部分は秀逸。

会社員 / 津田圭

- 一巡前の人生での、恋人の死の真相を突き止め回避すべく頑張る、というハードな舞台設定ながら、すれ違いつづも少しずつ近づいていくキャラクター達の心の機微がどこまでも丁寧に描かれていて、私のようなおっさんまでもが年甲斐なくハラハラドキドキさせられてしまいました。オリアナとヴィンセントや他のキャラクター達の間模様様がとにかく魅力的に描かれていますが、謎の多いお話のため、おそらく真相に近づくにつれ来るであろうめちゃくちゃしんどい展開に今から胸がキュッとなっています。

株式会社ムービック / 岡部 真矢

- 名家のプリンスと商家の娘。身分の違う恋の話に謎の多い「死に戻り」というタイムリープをからめる現代的な手法。もっとも一部設定こそ現代的だが、物語の要所には切ない悲恋や境目の曖昧な友情と愛情、満たされきらない承認欲求など、少女マンガの王道を行く要素が盛り込まれている。しかしまだ「死に戻り」の謎は解かれておらず、主人公たちの行く末もどうなるかわからない。駆け足でもなく引き伸ばすわけでもなく、主人公たちの気持ちを書き切ろうとする意図が込められた作品には、気持ちをぐっと引っ張られる。

ライター／編集者（馬場企画） / 松浦達也

- 死に戻っても、ままならないもので相手の好感度はゼロ。けれど、そこから猛烈に上げていく強い気持ちと行動力。時に胸を痛め、時に満たされた気持ちになりながら、このまま見守っていただきます。主人公を取り巻く人物たちのままならない運命が、切ない。

教師 / 持丸宏司

- 以前から友人におすすめされていたのになんとか読み損ねていて、ノミネートされたタイミングで読み始めたのですが、なんとなく読んでなかったことを後悔しました…。近年稀に見る珠玉の少女漫画ド直球作品でした。老若男女すべての少女漫画好きは読んでほしいです。原作はライトノベルで既に人気のある作品とのことですが、マンガとしてもハイレベルに完成されていると思います。コマ割りのうまさなのかストーリーは読み応えがあるのにスイスイ読み進められるし、出てくるキャラクターの造形が美しいので眺めてるだけでもほれほれします。表情や動きも伝わってきます。漫画でこんなに表現できるの？ヒロインがいじらしくてかわいくて、お相手が文句無しにかっこよくて、周りのキャラクターもいいヤツで、いじわるなのは運命だけ。もう！こういうのみんな大好きでしょ！！他の登場人物の恋模様も気になるし、全編胸キュンの極みです。ファンタジーだから、転生モノだからと敬遠しての方こそ読んでほしい！

公務員 / 宇田川結衣子

マンガ大賞2025 ノミネート作品

FEEL YOUNG/祥伝社

「女の園の星」和山やま

選考員コメント・1次選考

- 何度読んでも楽しめる。

マンガ読み / サイトウマサトク

- 何の変哲もない、平凡な学校の話なのに何故こんなに引き込まれるのか。くだらないのにちょっとしたエッセンスにぶつぶと笑ってしまう最高のマンガです。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス 営業企画マネージャー / 阿部大介

- 今オススメ漫画ある？と聞かれたら、まず答えるのがこの漫画！この漫画が発売されてからは私の中のオススメ不動の一位です。女子校で働く男性の先生の間違ってハーレムとかそんなのとは真逆な、でもリアルな生活を描いた作品。変な人しか出てこない。うまく説明できないから読んで欲しい。ものすごい静かなテンションなのに、いつも笑かしてくれます…！くすりとした笑いから、ツボに入ると抜け出せない笑いまであるので電車の中や公共の場で読むのは危険かも

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 女子高の日常ドラマを男性教員を巡る視点から、ときに生徒たちから淡々と描く、、、のがことごとくギャグ過ぎて、読む場所を選ぶマンガです。落ち込んでいても嫌なことがあっても、このマンガを思い出すと元気になります。

弁護士 / 三葛敦志

- 独特のセンスは健在で、巻数が進んでも、毎回違った角度からの物語展開に意表を突か飽きさせない。つつい笑ってしまう。お薦めしたいのはもちろんだが、皆でどの話が好きかで盛り上がりたい。気の合う友人が見つかりそう。

丸善ジュンク堂書店・書店員 / 小磯洋

- ページをめくるたびに声を出して爆笑したのはいつぶりだろう。特に4巻は和山ワールド炸裂で堪能しました！

カンフェティ / 小森和博

- 毎年推している女の園の星。こんなにジワジワと心を侵食してくるマンガは今年もこのマンガが1番だった。嬉しいです！実写化を！実写化でもみたいです！

カメラマン / 平沼 久奈

- 新刊が久々だったので新鮮な気持ちで読めたのですが、やっぱり面白い！絶妙な間合いと台詞と、漫画ならではの表現と、毎回期待を越えてきます。お笑いが好きで、まだ読んでいないという人はぜひ読んでください。大きい声やオーバーな動きではなく、話術やシナリオでじわじわ笑わせる漫才やコントが好きの方は、絶対ハマると思います。そこまで奇抜なことはしていない（否、卒業アルバムの写真の回はなかなか奇抜だったかも）、淡々とした展開なのに、思わず声を上げて笑ってしまいます。

主婦 / 堀江千秋

選考員コメント・2次選考

- 猛烈にハマってしまいますね「女の園の星」に。ジャンルのひとつが「女の園の星」というべきなのか、むしろ「和山やま」ワールドと言うべきなのか。百聞は一見にしかず、読んでごらん下さいよこの作品を。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス 営業企画マネージャー / 阿部 大介

- 今オススメ漫画ある？と聞かれたら、まず答えるのがこの漫画！この漫画が発売されてからは私の中のオススメ不動の一位です。女子校で働く男性の先生の間違ってハーレムとかそんなのとは真逆な、でもリアルな生活を描いた作品。変な人しか出てこない。うまく説明できないから読んで欲しい。ものすごい静かなテンションなのに、いつも笑かしてくれます…！くすりとした笑いから、ツボに入ると抜け出せない笑いまであるので電車の中や公共の場で読むのは危険かも

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- ほぼすべてのコマが面白い。奇跡的な作品。ほぼすべての登場人物が美しく描かれてあるのに、それが特に物語に作用しないのもいい。

マンガ読み / サイトウマサトク

- 読み終わった後もジワリと心の中に面白さを残してくれる不思議なマンガ。マンガでも面白いけど実写化もみたい！

カメラマン / 平沼久奈

- ゆる？い世界に浸っていく感じが最高に好きです。くだらない笑いの渦に飲みこまれて頭のなかが空っぽになって、雑多な日常をしばし忘れられる私の癒しです。星先生の生徒になりたい…

主婦 / 紺野泉

- 女子校での先生と生徒の日常漫画。こういうジャンルの漫画はあっさり完結したりする事もあるので、4巻が出てひとまず安心しました。どうか、どうかこのまま末長く読ませて欲しいです。生徒の家族や親族が出てくるようにもなったのでこのまま女子校内の枠を飛び越えて全然関係ないところまで行ってほしい。主人公が全然出て来なくても全く気にならないくらい他のキャラクターが良いのも魅力です。白昼夢見たのかな？みたいな展開や会話が癖になります。萌え展開に全然ならない、これが真の女子高生漫画です。個人的な願望として、古森ファミリー主体のスピノフ作品はどうですかね先生。。。

会社員 / ターシ

- 今更おすすめしなくとも、その面白さは既に十分周知されていると思うのですが、やっぱり面白かった。絶対にあり得ないシチュエーションなのに、「わかる」と共感して笑ってしまうのはなぜなのか。そして、絶対にいるわけがないのに、どこかそのへんにいそうなキャラクターだと思ってしまうのもどうしてなのか。「日常」と「非日常」、そして「普通」と「普通じゃない」のバランスが絶妙なのだと思います。主人公であるはずの星先生についても、まだまだ明かされていないことがあるのでは？と思うので、今後どこまでわかるのか、それともわからないままなのか、より注視して読んでいきたいと思います。

主婦 / 堀江千秋

- 巻をましてもシュールな面白さは変わらず

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- 安定の面白さで安心して読めます。女子高生独特の無敵感に笑いが止まりません。この年独特の感性は自分の娘にも大切にしてほしいと思いました。いろいろな意味で将来の参考にしたいと思います。

デザイナー / 玉澤綾子

- 巻を重ねるごとに、ちょっとずつズレてる学校の日常の表現に磨きがかかっていってます。

医師 / 岸本 倫太郎

- じんわりクスッと笑えて読むたびにマンガっていいよね。って思える漫画です。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- 辛い時は、和山先生の作品で癒されてます。特にこの作品は、クスクス、ニヤニヤ、ゲラゲラに富んでます。2024年、1番声を出して笑った作品でした。

カンフェティ / 小森和博

- マンガ大賞ノミネートの常連。独特の和山ワールドが癖になる。かったるい雰囲気のある教室での、職員室での日常生活が流れていく。癒しではないが、浸っていきたくなる作品である。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

- 女子校を舞台にした生徒と教師による日常系シュールコメディ作品。醸し出されている空気感や登場人物の表情はもちろん、コマとコマを繋ぐ“間”が絶妙で、読者がページをめくる時間すらも“間”として上手く使われている感じがニクい。手元に置いてパッとページを開けば、それがどのページであろうと、そこから数ページ読めばクスッとできてしまうような安定感がある。

弁護士 / 田邊幸太郎

- このマンガが持っている、「もしかすると似たようなことが自分の周りにも潜んでいるかも…」と思わせるところが大好きです。

鳥取県立図書館 / 野間勤

- 全体がじわじわおもしろいのはすごい。

大日本印刷 / 佐々木愛

- ある女子高の男性教員を中心とした日常系のギャグマンガといえばこれです。このマンガ、大多数の登場人物が、真顔なんですよね。で、真顔でじわじわくるギャグを連続してくるという。反則です。いつでもどこでも笑ってしまいます。書きながらも思い出し笑いのレベルですw

弁護士 / 三葛敦志

- 気がつけば、新刊が出るごとにほぼ毎年ランクインしているのがすごいです… (M-1 の笑い飯のような存在に…)。でも新刊のたびにフレッシュに笑えて幸せを感じて人に勧めたくなるので、当然かもしれません。4巻はメガネ店と卒業写真のエピソードが好きすぎました。女性作家の作品が青年誌にいつまでも残る中、こんなに老若男女に愛される女性誌連載作品は貴重だなとも思います。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- なにが起こるでもないある女子高の物語。この面白さをずっと続けられるのは本当に和山やま先生だからこそですね。2024年1番人に「読んだ？新刊も最高に面白くて笑った？」と言われたコミックス。本当にすごい、ずっと続けてください。

bar 図書室 / 岡部愛

- シュールが最高に面白い、もう、超メジャー作品だと思うけど、もうここまできたら1票いれずにはられない。

tetote 代表 / カ丸 真

- 人物同士の間合いと掛け合いの妙を表現するという点で、現在和山やまさんを上回る作家さんはそういないのではないかと、そう感じるほどにやはりうまい。

会社員 / やのこうじ

- 実際に、こんな先生たちがいたら、楽しいでしょうね。気づかなかっただけで、実はいたのかなあ。いや…いなかったな。

書店員 / 桶谷佳代

- 熟練の刀匠がとぎすぎました刃のように、なにもしていないのにすでに切れている……そんなマンガです。何を言っているか自分でもわかりません。何書いても雰囲気でおもしろくなっちゃう……。

作家 / 海猫沢めろん

マンガ大賞2025 ノミネート作品

月刊サンデー GX / 小学館

「COSMOS」田村隆平

選考員コメント・1次選考

- ヒューマンドラマ？地球外生命体ドラマ？心が揺さぶられる点においては、人も人以外も分け隔て無し。
教師 / 持丸 宏司
- 宇宙人のための保険屋という設定が新しく面白い。主人公の嘘を見破ることのできる能力だけでストーリーは成り立つのに、そこに宇宙人、保険屋、など更に面白くなる要素が盛り込まれていて一巻から心を掴まれた。田村先生の言葉選びも大好きで、僅かな不幸に賭ける博打という言葉に心を揺さぶられた。
スターダストプロモーション・アイドル / 秋本帆華
- 異星人による犯罪組織との戦いというメインストーリーより、その合間に描かれる自分の星を捨てて地球で1人で生きていくことを選んだ個々の異星人たちの物語は、「YOUは何しに日本へ？」を見ている時のような不思議な感動があり、面白い。
丸善ジュンク堂書店・書店員 / 小磯洋
- 宇宙人専門の保険調査機関に雇われた“嘘を見抜ける高校生”と、素性を隠して地球に住む宇宙人たちのアクション&ヒューマンドラマ。緩急を織り交ぜた良質のエピソード群がそれぞれに印象に残る。
書評家・ライター / 福井健太
- 人の嘘を見抜ける高校生と、宇宙人専門の保険調査員と出会い、自身もその調査に巻き込まれていく物語。宇宙人にも善性や悪性、人間のような心の情動があり、一話一話に人と人を結ぶドラマがあります。嘘を見抜けるからこそ人の心根に気づき、人に寄り添える主人公の姿にぐっときます。
デザイナー・シンガーソングライター / 平松新
- 「宇宙人」という王道の設定に「保険」という人間に馴染み深い設定が加わったことで、ちょっと生活感のある、身近に感じられるSF物語になっていると思います。そして主人公・水森の嘘がわかるという能力。人の嫌なところばかり見えてしまい、冷めた態度だった水森が、あることをきっかけにその能力を活かし、対宇宙人の保険調査員としての道を進み始める。さまざまな人生を背負った宇宙人と対峙していき、これまでの信条が覆り、価値観が変わっていく。物語が進むにつれて、水森の表情がどんどん変わっていくのがよくわかります。べるぜバブの古市が好きだったので、過去作と変わって主人公のビジュアルがそちらの系統なのが個人的にとってもツボでした。田村先生のキャラクターは性別関係なしに、とにかくみんなかっこいいので、見ていてとても気持ちが良いです。
会社員 / 堀尾素子
- 今SFを読むならこの作品。シリアスとギャグのバランスがピカイチ
会社員 / 齋藤隼

選考員コメント・2次選考

- 『COSMOS』は、宇宙人が地球に住み込んでいる現代日本を舞台にした、SF バイオレンスと感動ドラマが融合した作品です。物語は、嘘が「臭い」で分かる特殊能力を持つ高校生・水森少年と、他星人専門の保険を取り扱う会社 COSMOS の保険員・穂村燐との出会いから始まります。地球には、あたかもインバウンドのように宇宙人が大勢やってきており、彼らが普通に日常生活を送っている世界です。水森少年の住む世界でも、宇宙人が存在を隠しながら生活することが当たり前となっています。作品中では、違法な宇宙人を取り締まるシリアスなシーンと、心温まるエピソードがバランス良く描かれており、穂村燐と水森少年の関係性や、宇宙人との交流を通じて生まれるドラマが大きな魅力です。また、主人公が仕事を通じて「ありがとう」をもらうことで成長していく様子も、物語の大切な要素となっています。この成長の過程が、読者にとって感動的で共感を呼ぶポイントとなっています。総じて、SF 要素と心温まる人間（宇宙人）ドラマが見事に融合した、おすすめの一作です。

会社員 / 佐藤優

- 「においで嘘がわかる」という主人公の衝撃設定からの怒濤の展開！まだ味わってない方はぜひ！

鳥取県立図書館 / 野間勤

- 今 SF を読むならこの作品。シリアスとギャグのバランスがピカイチ

会社員 / 齋藤隼

- アクションと人情話を両立させるのが、田村隆平のいいところだと思ってます。相手が一筋縄ではいかない宇宙人のせい、どちらもパワーアップしてるのがいい。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 宇宙人と保険屋さんと高校生という不思議な組み合わせですが、話にぐいぐい引き込まれていく感じで夢中になって読んでしまいました。

会社員 / 林礼春

- 宇宙人×保険屋の SF だけど宇宙人だけど、ヒューマンドラマがそこにある。かなりシリアスな話の展開の中にユーモラスもあり、やっぱり MIB を思い出す w キャラが個性的で、個人的には砂啗推しになりました…w バトルシーンは迫力があり、見せるシーンの構図も最高…。ウユニ塩湖の見開きは圧巻でした。人として当たり前の事が宇宙では通用しない。でも地球にいる以上は、ルールを守ってもらう。これ…ぜひ世界の観光客にも伝えたい。現地のルールに従ってください！

元 SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- 地球上に外宇宙生命体が多数飛来し、人間に擬態して暮らしている、という設定は今までもあったと思うが、それらが強制加入させられる保険会社があるというアイデアは斬新だ。そして地球人の主人公が、否応なく事件に巻き込まれ、当該保険会社に見習い入社することになるのだが、その理由が「人の嘘が感知できる特殊能力を持つ」というポイントが何ともエモい。敵であっても味方であっても、人（宇宙人含む）は様々な理由で嘘をつく。浅はかなその場しのぎの嘘も、命懸けで何かを守ろうとする嘘も、その背景も含めて主人公は丸ごと感知してしまい、全てを我が身で引き受けなければならないのが辛いのだ。ちょこちょこコミカルなエピソードを挟むバランス感覚も絶妙で飽きさせない。正統派 SF 少年マンガの傑作だ。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

- 田村隆平が帰ってきた。大作をひっさげて！

教員 / 戸田穰

- 際立って斬新な設定という訳ではない。「MIB」を例に出とすまでもなく、一般的には知られていないが実は地球には多くの宇宙人が住んでいて、そのトラブルを解決するための政府の秘密機関があるといった設定の物語は小説・漫画・映画などのメディアを問わず数多くある。物語も浪花節で、古典的ともいえる展開の話が多い。でも面白い。分かっている、読むたびに泣いてしまう。作家の「漫画力」の高さがすごい。各キャラクターの個性の差や能力もはっきりしていて、各々にしかできない任務をこなすアクションシーンはかっこよくて分かりやすい。超 1 級のエンターテインメントの、喜怒哀楽・起承転結の盛り合わせの満漢全席作品です。

丸善ジュンク堂書店・書店員 / 小磯洋

- 田村先生の描くキャラクターのかっこよさたるや、本当に惚れ惚れしてしまいますね。性別種族関係なしにとにかくかっこいい。絶妙なツボを突かれます。「宇宙人」と「保険」という異色の組み合わせによって、SF でありながら、

どことなく私たちの生活にも馴染むようなお話になっています。各話で様々な宇宙人の人生が描かれますが、それは他人事とは思えない、とても「人間味」を帯びたものです。出会いを経て変化していく主人公・水森もまた、人間でありながら嘘がわかるという能力を持っていて、どうやらそれはただの偶然ではなさそうで……今後の物語の展開にも期待が高まります。

会社員 / 堀尾素子

- 「宇宙人は普通に地球上に存在している」という前提の作品といえば、僕にとっては「レベルE」。「COSMOS」はどんな漫画なのかとても気になっていましたが、いやはや面白い！完璧にハマってしまいました。どれほどの時間をかけてこの作品に至ったのか教えていただきたいくらいに、ストーリーはもちろん、設定から登場人物の背景まで、とても綿密に練られ、描かれていることが伝わってきます。かといって重すぎず、軽すぎもしない。その絶妙なバランス感覚こそが、田村隆平先生の大きな魅力なんだろうなと。またひとつ、早く続きを読みたい漫画がまた増えました。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- 1次選考でも推させていただいたCOSMOS。やはり本当に面白い…！人間と宇宙人それぞれに考えや心があって、それらが時にぶつかり、時に溶け合う様子を見て、感銘を受ける。気を抜くとすぐ感動させてくれるので読む場所は注意した方が良さそう。時間が経ってもまた読み返したい自分の人生のそばに置いておきたい漫画。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

- 構成と設定が面白い。そしてヒューマンドラマが心地よい。主人公の成長もそうだが、周りも主人公に影響されて変化していく心の成長もとても良いバランス。安心して読んでいられる。不穏な空気でシリアスな展開もあれば、コミカルなギャグ要素もあり飽きさせない。広く勧めたい作品。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- この人はやっぱり漫画が上手。こっちを引き込んで離さない吸引力がありました！最高！

OKAMOTO' S / オカモトショウ

- SFだねえ。というのがまずひとつ。知らない間に地球にはいっぱい宇宙人が来るようになっていて、それぞれに保険なんてものに入っていて問題が起これば保険会社から担当者がやってきていろいろとアクシデントに対応する。現実の社会にもある生命保険とか損害保険の枠組みを宇宙に広げてみたらどんなことが起こるんだろうという想像力を刺激してくれるところもあるし、宇宙人自体にどんなバリエーションがあるんだろうといった興味もかき立ててくれる。あとはアクション。謎の女子高生にして保険会社「COSMOS」で課長なんて結構な役職にいる穂村燐がスーツ姿で繰り広げるバトルのスピーディーでスタイリッシュでパワフルな様をはじめとして、他の面々によるアクションのカッコ良さに目を奪われてしまう。そんな凄まじい奴らの中に混じって嘘に敏感なだけのただの地球人の水森楓にいったい何ができるのかって思わなくもないけれど、ピンポイントで嘘が分かるのは敵を相手になかなか有効みたい。そうした技の妙によって進んでいく物語も面白い。実は宇宙人だったバイト先の先輩が余命幾ばくもない中で世界中を旅する姿を見守りそして最後を看取る寂しさにじんわりとさせられる展開もあって、そうした人情系で行くのかと思ったら「笛吹き男」という児童誘拐ばかり繰り返している謎の組織が現れ結構な規模と強さで「COSMOS」の前に立ちふさがり。何か裏でもあるのか、それはどれだけの影響力を持っているのか、なんて想像から宇宙を巻き込むようなバトルに発展していきそうだけど、時々保険会社物ならではのホロリとした宇宙人情話も読ませて欲しいかな。

書評家 / ライター / タニグチリウイチ

- 面白いなあ、面白い。自信を持って人に勧められる漫画です。先生の好きが詰まったキャラがこれでもか！これでもか！！おん？まだ足りんのか？みたいなレベルで出てきて本当に助かってます。安村さんに会いたい…っていうか各巻の最後で泣かせてくるなよ泣いちゃうだろ…次に何が起こるか未知すぎるし未知で当然な世界なのでこれからも楽しみにしてます！！

会社員 / 布施直人

- 宇宙人専門の保険調査員という設定が新しい。どこか新鮮な感覚のSF漫画。不可思議なストーリーに引き込まれる作品。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

- 宇宙人専門の保険会社 COSMOS の活動を通して描かれる SF ヒューマンドラマ。SF 要素、バトル要素、青春要素、ハートフル要素など様々な要素が詰め込まれているがバランスがよく、気付けば一気に読んでしまった。死亡保険やリビング・ニーズ特約などに引っ掛けて、心に来る話を描く構成もうまい。

弁護士 / 田邊幸太郎

- 嘘の匂いを嗅ぎ分けられる特殊能力。とそれだけで面白そうなのに宇宙人まで絡んでくると、もう最高です。是非。

オフィスオーガスタ マネージャー / 樋口健

- 世代的に作者の前作の印象が強い故か、ノーマークだった本作。1話から面白い！同じようなボーイミーツガール系の漫画は星の数ほどあるのに新しさを感じさせるのは、設定にオリジナリティーがあり、物語の進行を妨げるようなテンポの悪くなる事必至のお約束は最小限にされていて、かつハラハラさせるページ・カット割りが随所に散りばめられているから・・・などもっと深く考察していけば更に多くの理由が見つかると思う。どんどんキャラクターが登場しているのでここはひとつアニメ化→第二の〇〇〇〇の座を射止める日も近いように感じる、そんな作品。

フリーランス / 金輪英恵

- 宇宙人と保険っていうお金のお話って斬新なのに、そこに「嘘」判別要素が入ることで、派手にドカンドカン行きそうなバトルマンガかと思いきや、めちゃくちゃ淡々とストーリーが進んで、ここでギャグなの？とかまさかのハートフル？とかうまいことまとまっちゃう秀逸感！ストーリーがめちゃくちゃ盛り上がってる訳じゃないのに、随所にツボを指す、やられた？感があって、そのどんでん返しにとにかく面白いんですよ。あと、宇宙人設定がこれまた良くて。毎回、新種珍種の宇宙人と損害保険の内容がどうくるのか楽しみなので、早く続きが読みたい！そしてアニメ化熱烈希望！

俳優 / ジェネラリスト / 大倉照結

- SF はあまり得意ではないのですが、これはめちゃくちゃ面白いです。宇宙人専門の保険会社。異星に移住するもの大変なわけで、そのための保険。ときにバトルあり、ほろりとする話あり。異星人だって、皆が好戦的ってわけでもないですから、そのあたりの日常と非日常、動と静の境界線の引きかたがとても巧みなのです。

書店員 / 野口忠義

- 宇宙人ひっそりとまじって暮らしてるんだなあ。

カメラマン / 平沼久奈

マンガ大賞2025 ノミネート作品

週刊ビッグコミックスピリッツ / 小学館

「この世は戦う価値がある」こだまはつみ

選考員コメント・1次選考

■ まずタイトルがめっちゃくちゃかっこいいです。戦う価値がある、なんて断言されたら、頑張りたくなっちゃうじゃないですか。覚悟を感じます。最初は痛々しく、過去の辛い出来事だけでなく現在もから追い詰められた主人公が人生を「清算」するために生き方を変えていくところは、清算というよりはまるで反転攻勢するようで、勢いもあってただただ勇気ももらえます。人生の価値なんて考えたら悩んじゃいそうですが、ストーリーは暗くなったりせずに出てくるキャラもそれぞれ強さがあってみんな魅力的です。悲しい出来事も少なくない近頃、優しく寄り添うような作品にこれまで癒されてきましたが、本作のように自分もやってやろうじゃん！なんて思えるような作品はありそうでなかったような気がします。

公務員 / 宇田川結衣子

■ どん底人生をどう決算していくのか、主人公・伊東紀理のこれからの出会いと展開を見届けます！

カンフェティ / 小森和博

■ 序盤は現代的な会社でのパワハラなど、会社で弱い立場の女の子から吹っ切れて変わっていく姿が面白い。これだけ、一気に吹っ切れたら楽しそうだなと感じました。後々、その時の上司が働いている場所に来るのがまたいいですね。

デザイナー / 平沼寛史

■ 「一度すべてリセットして、自分のために生きられたら」現実の自分の世界では、踏み切れないこの思いを、見事漫画の中で昇華してくれており、爽快感を与えてくれる。

広告会社 プランナー / 平沼良章

■ 限界 OL 人生総決算。OL を辞め自由を選び、怖いくらいの刹那に生きる紀理。人はどう生きるべきなのか、単純な答えではなく、様々な登場人物を介して、見方をそれぞれ示してくれる。自分のやりたかったことを明確にメモれるってだけでも彼女は凄い。ましてやそれを順番にやっていけるのはもっと凄い。紀理の生きざまをしっかりと目に焼き付けなければ。孤独を抱えて生きていかなければ。

October Beast 代表・デザイナー / 北山友之

■ やりたくてもできないことをマンガの中で叶えてくれる…。私が少し前まで失業中の身で、新たな趣味を見つけましたが、せっかくだったらこんな人生の決算してみたかったと羨んでしまいました。とにかくパワフルでエネルギーギッシュで、心に刺さりまくります。

書店員 / 野口忠義

選考員コメント・2次選考

- 成長する過程で家族由来のトラウマを抱え、「周りの役に立つ」自分になろうと猫をかぶった社会人生活では職場やろくでなしの彼氏から好き放題に扱われ、ポロゾウきんのようになった25歳女子。その「人生の決算」を描く。会社に辞表を叩きつけ、どう思われたって自分は自分、と踏ん切れば一発逆転、自由で無敵な境地が手に入る。吹っ切った先の主人公のハチャメチャな振る舞いとべらんめえ口調は何ともいえず痛快かつ爽快だが、その解放感にはいつも背中合わせの寄る辺ないかなしみがある。公園のブランコで昼間飲むビールのうまさに流す涙の美しさはマンガにしかできない至高の表現。どん詰まりの絶望とその先にあるはかない希望の両方を塗り込めて物語は続く。安い歌謡曲が流れる神田の回転寿司で、このコメントを書くために一人キンドルで読み返していたら思わず号泣しそうになった（危なかった）。そして2次選考締め切り前日のきょう、作品の重要な舞台となる妙見島を訪ねた後にこれを書いている（めっちゃ寒かった）。たとえるならそれほどまでに読み手の背中を押す力があるマンガだ。作者がストーリーをこの先どう着地させたいのかは分からないけれど、この世には「戦う意味」があるとどう思い続けさせてほしい。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 全力で戦ってみたからこそ、見えてくるものがある、ということを強く感じさせてくれる作品です。
- 1巻が衝撃的に良かったです、『ゾン100』と似たような感じもしたけれど、テーマがブレてないので良いです。まだまだ物申せない日本人という部分がある中で、わかりやすく一石を投じる作品だと思います。

会社員 / 林礼春

tetote 代表 / 力丸真

- 24時間戦えますか?の時代は終わった。でも戦わざるを得ない人はまだまだ多い。人手不足、物価高、世の中やっつけられない事も多い。それでも踏ん張る人がほとんど…。自分の人生をリセットする勇気、「我慢してたことはやり返すし、返せないままのものはきっちり返す。奪われたものは取り返す。」そんな紀理が羨ましい半面、重い内容なのに、紀理を通して見返してる気持ちになれるからなんだか楽しく読めてしまう。現実味があるようで、ない…でも力強く惹きつけられる。

元 SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- いま最も熱い作品です！ 主人公が会社を辞めて、やりたかった事をやり、人生の貸し借りを精算していく物語に、羨望の眼差しを向けるていました。自分も少し前に無職期間があったところで、なんか無駄に過ごしたかもしれないという後悔を、これを読んでから痛感するほどに、この作品は自分に刺さりまくりました。原稿中や家事しながら聴いているラジオ三昧だと書いているのを見ました。今後、物語にラジオが描かれていくのか、またガールズバーの客や、伊東の同僚が畑中とか、もしかしてお笑いが好きなのはと勝手に勘繰っており、これからどこかで描かれるのかをちょっと楽しみにしています。

書店員 / 野口忠義

- この作品にとある父親が登場します。個人的なことですが私の父親もだいぶアレな人間でした。その父親のエピソードを読んだ後、夢を見ました。なんのこっちゃと思われるかとは思いますが、それだけ力のある作品だと思います。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- 日頃のうっ憤を晴らしてくれます。知らず知らず「自分の殻」なるものを作っていませんか？漫画だけど、いや漫画だから没頭していい、そんな作品。

本と文具ツモリ西部店 / 津守晋祐

- ぐぐぐっと物語の冒頭に来るうねりにやられました。日常に抱えるもやもやを、ここまでざらっとでも小気味よく打ち破ってくれるとすっきりします。そして、読み終わってから、でもここまではできないな、とふと現実に戻る瞬間も悪く無いです。

弁護士 / 三葛敦志

- 物語の導入部はかなり鬱々としていてどうなるのか…と思って読み進めた時の爽快・痛快感がたまらないです。人生に行き詰まりを感じた時に、これくらい吹っ切れてもいいのかな…と新たな価値観を見出させてくれる作品です

デザイナー / 高永貞光

- とんでもない始まり方をした作品。どこか切なさも感じるのに爽快で、主人公の強さに惚れます。

女優 / 齋藤明里

- 冒頭が少しつらくてためらってしまったけど、主人公の行動にぐいぐい引っ張られて一気に読んでしまいました。突き刺さる言葉も多く、人生の決算をしていく中で心が痛むことはあるだろうけど紀理のこの先を見たい。「私の人生に価値はあったのかを。」

主婦 / 紺野泉

- 自分が生きている理由、生きていい理由なんて今まで考えたことがなかった。臓器提供カードという生きていい理由を手にした後の主人公の暴れっぷりにスカッとした。鬱々とした人生・社会への決算漫画。自暴自棄にも捉えられるが、その危うさがとても魅力的。周りの人たちの優しさ生き様で、凝り固まった価値観も変わっていく。この先どう決算を進めていくのか楽しみ。

スターダストプロモーション・アイドル / 秋本帆華

- 主人公が変わっていかうとする姿、前のめりなようにいて時に冷静なまなざし、人生に対するまっすぐな向き合い方を見ていて、上手く言えませんが読んだ後猛烈に胸が熱くなりました。

ゲーム会社勤務 / 畑中瀬路奈

- 抑圧を振り払って本来あったであろう自分に立ち返ったときの心地よさ。ただ、この先それだけではなさそうな感じもして、とても楽しみです。

医師 / 岸本 倫太郎

- これだけ振り切った決断、生き方に憧れる

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- 自分の人生をやり直す物語。もちろんそれは、他者とどう向きあうか、向き合いなおすかという物語でもある。

マンガ読み / サイトウマサトク

- どこにでもいそうな彼女の今後の後が気になるので推してます。戦った先にどんな景色が見えるのかこれからも楽しみにしています。

カンフェティ / 小森和博

- 心の弱さを強引に強さに切り替える危うさと清々しさが心地良い。

PENICILLIN / HAKUEI

- 職場と恋人の言いなりになり、その果てに限界を迎えた主人公が、すべてを吹っ切るためにやり残したこと——「決算」を行っていく物語。おどおどして謝ってばかりいた態度から一変し、強気で子供っぽく、時には暴力も辞さない真っ直ぐな態度になった主人公がとても魅力的。決算が終わったら自分の命を捧げる覚悟を持っているところもお強くてすき。この決算を通じて様々な人と出逢い、主人公や周りの心にも変化が現れるところも見どころ。強く生きる元気をもらえる。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

- 過去のトラウマから自分を抑えつけて生きてきた主人公が、「好きに生きる権利」を得て、失った自分を取り戻していく物語。かと思いきや、オレンジの頭でマークIIになった彼女は、取り戻すだけでなく、さまざまな科学反応を起こして新しい自分を獲得していく。それはきっと彼女が自分をさらけ出して動いた（戦った）から。「仕事以外することないから、休日ヒマでヒマで一、ハハハ」などとのたまう自分のダサさに気づかせてくれたのは、「今年こそ？ 来年こそ？ 何年生かれるつもりで生きてきたんだ」という MOROHA の曲のフレーズと、やっぱりこのマンガだったのです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

「ドカ食いダイスキ！もちづきさん」まるよのかもめ

選考員コメント・1次選考

■ 劇薬だ。毒薬とすら言える。読めば確実に胃をやられ、健康をやられて苦悶から墮獄へと至る魔導の書。けれども一方で、読めば確実に胃を満たされ心を潤わされて至福から昇天へと至る福音の書でもある。いずれにしても命に関わることは変わりがないけれど。まるよのかもめ『ドカ食いダイスキ！もちづきさん』（白泉社）は、ただひたすらにドカ食いをする望月さんという女性のストーリーだ。分厚い弁当箱から鳥照りを乗せたご飯をくらい大盛りのカップ焼きそばにマヨネーズをぶっかけそれをふたつもくらい四合飯に具材をぶち込んで炊き上げたものにオムレツを載せてオムライスにしてくらといった具合に、どれも見れば美味しそうと感じつつ、お腹がはち切れそうといった鑑賞へと至って胃のあたりが重くなる。表示される異次元のカロリーが食べたヤバいと見る人の脳に警告をもたらす。けれどもそうした警告をまるで聞かずに、望月さんはひたすらドカ食い続ける。明日が健康診断という日も我慢できずに冷蔵庫に入った同僚たちの弁当やバナナやプリンを食べてしまうから凄まじい。もちろん普段より少ない量によく我慢したとは言える。言えるけれども日頃の不摂生ぶりが一食の制限で改善するはずもなく、健康診断では危険な数字が出てこれは痩せねばとランニング等に興じる。そして食べてしまう。鶏肉はヘルシーで玄米も健康に良く菜種油は植物性でウーロン茶は脂肪を減らすとされているから、どれだけ食べても飲んででも大丈夫。そんな理論を独自に組み立て実践していく望月さんの姿に誰もがあのきつつ、けれども惹かれてしまうのだ。あるいは欲望に弱い人間の愚かさを見せようとしているのかもしれない。それとも煩惱に導かれてこそ人間らしい生き生きとした生活が送れるのだという誘いかもしれない。判断は読んだ人に委ねられた。見て自分への言い訳をそこから見つけるもよし。やがて健康へと影響を及ぼし始める展開を知って悔いるもよし。読んでこそ分かる何が確実にあるマンガだ。

書評家/ライター/タニグチリウイチ

■ 今年の話作といえばコレかな、と。斜め上からの変わり種ですらグルメ漫画では出尽くした感がある中で、暴飲暴食不摂生が死に直結する事を思い出させる新視点…美味しそう！食べてみたい！が、一切無いのがまた凄い。下手なホラーよりリアルに怖いです。

中央書店 / 井出麻悠美

■ 食事にカロリーを表示するんじゃない！カロリーを！ ……と突っ込んでしまう一作。女性とドカ食いを組み合わせるなんて反則では。それだけにクスリと笑わせてくれる一作です。

サブカルライター / 河村鳴紘

■ 破滅的な食生活を通じてタナトスを描く。グルメマンガの解答のひとつ。ダイエット中としては身代わりでもあり、戒めでもあり。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

■ まだ食事で至ったことは無いのですが、読んでいて色々共感してしまいました。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

■ 自分の代わりにすべての「暴飲暴食の罪」を引き受けてくれる、その姿に癒される。ダイエットをしている身として、飯テロマンガを避けがちなのだが、これはある意味そこは侵されることがない。わたしの代わりに、食べて！思い切り食べて！もちづきさん！！！！

クラスター株式会社広報 / 西尾美里

■ 2024年に漫画を読む界限だけではなく色々なクラスタを巻き込んだ破壊力であれば、やはりもちづきさんが白眉でしょうか、おじさん趣味を女子高生に行わせるという定型フォーマットから、ドカ食い気絶を女子OLにやらせるという非人道的な試みは果たして大反響となり、これ笑っても良いものなんだろうか……？という葛藤を生じながらも反面教師として心にとどめておこうという気迫・単語のセンス・スピード感と三拍子の揃った怪作でした。

住職兼ライター / 蟬丸 P

- 「あればある程良いとされるソーセージ」「サンド & トーストの群れ」「この世の脂を全て流して消し去ってくれる奇跡の飲料(黒ウーロン)」1コマ1コマのワードセンスがキレッキレ。空前絶後の食欲全開マンガ爆誕!!! グルメマンガなんてどれも食べ物が美味しそうでキャラやストーリーなんておまけおまけ、、、とか思いながら読んだら即どハマリして腹が減りました。食欲による完全支配がされたらこの境地に至れるのだろうか…ただめっちゃ食べてるのに、なんかこう、美学みたいなものを感じるから全然下品に見えないの不思議。

会社員 / 布施直人

選考員コメント・2次選考

- この作品に限っては評価する人達が口を揃えて「これ、笑ってもいいヤツなんだろうか？」という疑問が真っ先に出てくる怪作であり、健康に対する反面教師というか「あ、これ真似したらアカンやつや」という恐れと共に笑ってしまうという非常に複雑な感情を呼び起こす一点突破であり、現代の蛸壺化している各クラスタの壁を突き破って認知されている希有な作品なので、これで良いのだろうかと思いつつも一位に推す価値は充分にあると思ひ投票。

住職兼ライター / 蟬丸 P

- 昔見ていた番組で「やりすぎぐらいがちょうどいい」というキャッチフレーズがあったけどほんとそれ。っていうかそれ以上。最高がすぎる。我々は今ギャグマンガとグルメマンガのジョグレス進化による開闢を目の当たりにしている・・・！まだ1巻なのに圧倒的な爆発力と暴走力を以て選考員を魅了してけちらしサイクロンした作品と言えるでしょう。ずっと正解でしかないのこのままいけるところまで突っ走ってほしい。「・・・を2個！」とか「あればある程良いとされるソーセージ」とか「ホレエ(ベアッ)」とか、ほんと現実世界の脳内音声に影響を及ぼして困るいいぞもっとやってほしいもっと過激ワードほしい。全責任(摂取カロリー)は私が持ちます。こういうの好き！！！！あ、ちなみに私は業スーの自身フライでよく脳が痺れます。これからはカロリーーハーフによる半減乗算していきますね^^

会社員 / 布施直人

- 食らう！食らう！食らう！全編、吹き荒れる食欲の嵐！食いまくる OL もちづきさん。食欲に任せて突き進む修羅の道の果ては何処。もうひとつの孤独のグルメ。読んでいだけで満腹になる豪快な作品。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

- 日本人はメシがすすすぎる。おかしいくらいメシ好き。メシくいながらメシの番組見てる。その異常性を認識していない日本人が多すぎる。このマンガを読んでやっとなんか異常性に気づいた。

作家 / 海猫沢めろん

- 若い女性と大食いという組み合わせ、暴走の度合いにページをめくる手が止まりませんでした。主人公が(かなり)過剰摂取したカロリーは、日々の運動で消費しているのでしょうか……と思いつつ。「細かいことはどうでもいいんだよ！」というパワーを感じさせてくれます。

サブカルライター / 河村鳴絨

- この漫画、凶暴につき……。日常のちょっとした心傷に付け込む暴食。ストレス過多の私などは中毒的に読んでしまっています。最近、体重計が恐ろしくてw。

本と文具ツモリ西部店 / 津守晋祐

- 刹那的な快楽を求め、自己破壊を繰り返す——そんな生き方を描いた作品がマンガ大賞にノミネートされるという事実に、今の時代の空気を強く感じます。私自身、気づけばそれなりの年齢を重ねてきましたが、未来に明るい希望を抱けるかと問われると、正直なところあまり自信がありません。日々目にするのは、暗いニュースばかり。世の中がこれから良い方向へ向かうとは、到底思えなくなった頃に、「先のことをいちいち思い悩んでも仕方がないし、今を楽しめればそれでいい」と考えるようになりました。すると、不思議なほどに、人生が楽しくなりました。ストレスは可能な限り避ける。でも、喜びのための努力は惜しまない。そんな自分の生き方は、もちづきさんとどこか重なる気がして、なんとなく頼もしいような、ちょっと怖いような。

接遇スペシャリスト/ライター / 田邊加奈

- 夜中に読んじゃいけない、読んで人間の健康をマジで破壊する飯テロ漫画。驚きなのが、まだ1巻が出たばかりなのに色々コラボ決まっているのが凄いですね。腹が減りすぎて手が震えて「今なら誰にでも勝てるかもしれない」と思える程のガチギレ状態は本当に良くわかります。ドカ食いでなければ救われない夜が社会人にはあるんだ。。そんな人間がこの日本には沢山いるのだなと思いました。

会社員 / ターシ

- ごめん、単行本読んだら面白かったわ。令和の無頼派マンガだなあ。そうそう、俺たちには自分の健康を磨り潰しながら一時の享楽を享受する権利があるよ。ぞんぶんに味わうといいや、と思いました。所詮他人事なので。1巻だけだから小気味よく読み終わられたけど、これ2巻3巻と続いたらどんどん陰鬱な、ぞっとするようなマンガになるので、笑いながら楽しめるのは今だけだと思う。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 美味しいもの元気いっぱい食べて幸せ～！とかじゃない。読んだ後に罪悪感のようなものがある…。本能的に命の危険を感じるからか？ずっと命を危険にさらしている人間を目の当たりにしているからか？それなのにこの漫画を読んだらいつもより多く食べてしまった。怖……ホラーじゃん。ギャグマンガじゃないじゃんホラーじゃん。人に薦めるのもどうかと思いましたがもういいやみんな巻き込んで道連れにしてしまえ。医者みなさんに「ギエーーーーッ！」「無理だって…無理だって！！！！」等リアクションしてもらいつつ、専門的な解説を副音声で聴きたい。この本体だけだとヤバイ。まさか最後バッドエンドじゃないよね??とにかくこの漫画には医者が必要。医者をお願いします！もしくはここに病院を建設してください。いのちだいじに。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 最新話更新の度に読者をざわつかせる「本物」感と、更に上に行く「終末」感。多分怖いもの見たさなんだろうけど、今一番目が離せないのは確かですよ。

中央書店 / 井出麻悠美

- ドカ食いの快楽と危険性を啓発するおそろしいマンガ。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 「服なんか着てられるか」とか、「『ある』のがいけない」とか、心に残る印象的な言葉の数々とコマ割りの絶妙さに脱帽しました。

鳥取県立図書館 / 野間勤

- 健康に悪すぎる。人間がやってはいけないことを実行するもちづきさんありがとう。絶対真似をしてはいけない。大好きです。

NIC リテールズ(株) 書籍仕入部 / 池本 美和

- 読んでいて身につまされる作品です。食生活は大事ですね…。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

マンガ大賞 1次選考作品

全作品名・選考員コメント掲載

「愛さないといわれましても～元魔王の伯爵令嬢は生真面目軍人に餌付けをされて幸せになる～」石野人衣、豆田麦、花染なぎさ

- 美味しそうにごはんを食べるヒロインと旦那様の甘々は見ただけでほっこりして可愛い。アビーちゃんは癒します！

主婦 / 紺野泉

「アウトサイダーパラダイス」涼川りん

- 何の前情報もなく1巻を読んだときの、現実が捻じ曲げられる怖ろしさ。いったいこれは、なに？ 恐怖と笑いと異常な眩暈、その奥になにかとてつもなく繊細なものがあるようにもみえる。

会社員 / 末永龍介

「あくたの死に際」竹屋まり子

- 読んでいるうちに、内側から情熱とエネルギーが湧き上がるような、忘れていた感覚が蘇るような。そんなじわじわと湧き上がってくる面白さを感じました。

株式会社エイミング マーケティングプロデューサー / 伊藤千恵

「あくまでクジャクの話です。」小出もと貴

- 読後、生物学に親近感が湧く一冊。生物学的視点で恋愛を紐解く新感覚ラブコメです。ユーモアと知識が絶妙に絡み合い、知的好奇心と漫画欲を一気に満たしてくれる作品。そのバランスがとても心地よく、ぜひ読んでほしい作品です！

株式会社エイミング マーケティングプロデューサー / 伊藤千恵

- 前作『サイコロまんちか』も知識とユーモアが光る秀作でしたが、今回はさらに進化。「人間も生物の一種」という視点で語られる生物学的恋愛論がユニークで、恋愛に大変不器用な美少女と、真面目な高校教師のコンビが、生物学的な視点と人間味を融合させて、さまざまな問題を抱えた生徒たちの悩みを解決していきます。知識系マンガの深みとギャグの面白さが両立して、単なるラブコメを超えた魅力があります。社会問題を取り上げつつも軽やかに展開する物語、そして豊富な参考文献から、作品に込められた熱意が伝わります。特に性スペクトラムをテーマにしたエピソードは、多くの人に響く内容かと思います。生物学好きにもギャグやラブコメを楽しみたい人にもおすすめ。

接遇スペシャリスト/ライター / 田邊加奈

- 最初の「末代男子」のキーワードで、この作品の虜になりました。コメディ作品ですが、モテない理由を生物学で説明されると、所詮は人間も動物にすぎないんだといやでも思い知らされます。自分にとっても刃物でえぐられるような心境になりつつも、面白いので先を求めて読んでしまう作品です。

書店員 / 野口忠義

「悪魔二世」志波由紀

- なんというか、独特の気持ち悪さと気持ち良さがたまらなくて、何度も読み返してしまいました。レトロな絵柄に、私には好ましい悪魔の表現、主人公二人のブレない姿勢が見ていて気持ちいい。これからの展開に期待を込めて投票します。

WEB制作・ディレクター / デザイナー / 河本智芳

「悪役令嬢転生おじさん」上山道郎

- 長く少年漫画で活躍されていたものの、今ひとつ振るわず気分転換にとネットに上げた一コマ漫画からの連載と大ヒットとなり、世にある悪役令嬢ジャンルと一線を画す出来に仕上がった転生令嬢おじさん。組み合わせの妙に止まらず長く培ってきた漫画経験との相乗効果で安定・かつベテランの筆運びと安心してお勧めできる良い作品かと。

住職兼ライター / 蟬丸P

「悪役令嬢の中の人～断罪された転生者のため嘘つきヒロインに復讐いたします～」白梅ナズナ、まきぶろ、紫真依

■ 絵が本当に美しく、透明感がありまず、引き込まれます。今となってはよくある悪役令嬢もの…？ではなく、全く新しい悪役令嬢なのが素晴らしい。話の組み立ては読み手を飽きさせず、主人公の行動も理念にしっかり裏付けされた強い意思に共感できます。悪役令嬢ってテンプレートになってるよね。と思う方にこそオススメしたい作品です。

図案家 / 橋本 寛子

■ (原作未読のため恐らくの) 大団円に向けて復讐劇が大詰めを迎えている今が一番面白いから、皆今呼んでくれなきゃ勿体ないぞ！と声を張り上げて宣伝したくなる程、界限は大きく盛り上がっております。狡猾かつ周到に準備してきた全ての労力はこの時のために費やされたものですからね、そりゃあもうピナの歪んだ顔が気持ち良くて仕方ない。その歪みっぷりたるや・・・天晴れです。原作者様とコミカライズ担当様の相思相愛っぷりも微笑ましく、ここまでお互いに相乗効果を生み出して発展する作品も無いのではないかと思います。この爽快感は『競馬』に例えたくなるのもうなづける。まさに人に勧めたい(というか勧めた)漫画作品です。読者諸君「「そこだー！！！！差せー！！！！」」

フリーランス / 金輪英恵

■ 一気に読みだすとこれかしら。異世界転生、悪役令嬢、復讐譚とテンプレもいいとこだけど、だからこそその浮かぶ瀬もあれ。比較的シンプルな原作をマンガ化したことでグンと解像度が上がってより楽しめるようになった感じ。メディアミックスかくあれかし。特に異形のデザインがユニークで、この絵柄でこの奇抜なデザインがでてくるのかという驚きがあったり。あと主人公の悪役令嬢ツラが見事で平和な内政チートやってるのが白面の者の化身が悪行を為しているようにしか見えないあたりうまいと思う。原作もろとも一気に読みするのが楽しい感じでした。

ソフトウェアエンジニア / 第式齋藤

「アサシン&シンデレラ」夏野ゆぞ

■ ダメダメなスパイがターゲットのアサシンと契約結婚。イラストの美しさにときめき、アサシンのお兄さんのデレデレさに胸きゅんし、スパイのねねこの可愛さにくらくらしてます。

女優 / 齋藤明里

「あさってのニュース」北村みなみ

■ とても遠い未来のようだけど、現代から地続きで考えられるリアルがあって、実はとても近い、ほんの少し先の未来に感じます。AI、メタバース、昆虫食、人工出産など、様々な話題のSF短編集。切ない話もあるけれどどの話も優しくてこの未来に生きてみたいと思いました。北村さんが昆虫食の話を描いたのは「ミドリムシを燃料にした”やさしいバス”を見かけた時の違和感がきっかけ」とおっしゃっていて、私も同じバスを見かけた時に、優しい！？優しいのか！？と思っていたのでなんだか嬉しかったです(笑)

声優 / 富岡美沙子

「アパレルドッグ」林田もずる

■ 「服が売れない時代に」もいろんなところで耳にするものの、ファストとファッションの台頭により売れてなくはないのです。と思いつつ、モノに対する価値観にも多様性がある時代の下で青臭いくらいに懸命に取り組む姿が心地よい。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス 営業企画マネージャー / 阿部大介

「アフターゴッド」江野朱美

■ 連載開始から続きを楽しみにしている作品です！類似作品が思いつかない唯一無二の世界観。哲学的にも感じるセンス。情緒ぐちゃぐちゃにしてくれるのでひたすら感謝です…！

声優 / 綾瀬有

■ マンガ大賞で候補に挙げられる最後のチャンスなので。最初からずっと漫画が上手いし、先の予想ができない。

主婦 / 赤坂真実

■ 神秘性とたくさんの謎、更に笑いと猫が次々と襲ってきてこのマンガの中毒になりそうです。神とされる IPO と人の関係性が敵対のはずなのに好きになってきます。

会員 / 竹本慧

「アマチュアビジランテ」内藤光太郎、浅村壮平

■ この物語の主人公は、おっさんで人生の底辺にいる男。彼は社会から断絶された孤独な毎日を送っており、生きる希望を失っていました。そんな彼が、自宅にこもり政府の要人暗殺計画を練るという危険な計画に没頭していたのです。しかし、事件は突然起きます。隣人が闇金融に攫われてしまったため、これまでに磨き上げた暗殺術を駆使して、闇金融との戦いに挑むこととなります。そして本格的に開花する殺人の才能。この漫画の魅力は、自己再生の物語がリアルに描かれているところ、そして周囲の人々との交流を通じて変わっていく主人公の心情や、緊迫感あるアクションシーンが特に見どころです。社会から見放されていた男が再び立ち上がり、人を助けようとする姿。しかしその才能は暗殺だっという物悲しさ。『アマチュアビジランテ』は、孤独と絶望の中から希望と勇気を見出す現代劇。アクションと人間ドラマが融合していて、これからの展開も期待できる一作です。

会員 / 佐藤優

「淡島百景」志村貴子

■ 歌劇学校の寄宿舎に住む女の子たちを中心に歌劇団に関わる様々な人々を描いたオムニバスですが、連載中に起きた現実での出来事と正面から向き合い、そして描かれた物語のラストに唸られました。作者の過去作に登場するキャラたちもちょこちょこ出てくるので、そこもうれしいです！

ゲーム会社勤務 / 畑中瀬路奈

「生き残った6人によると」山本和音

■ これまでも面白いとは思っていたのだけど、最終巻の落とし方というか潔さみたいなものが気持ちよかった。オチとタイトルの関連性なども、ベタといえばベタなんだろうけど、逆に感心させられた。

イロイロ屋 / 杉本善徳

「いじめ探偵」榎屋克優、阿部泰尚

■ 小学生のいじめという重いテーマを扱いながらも、最後には希望を感じさせる作品。主人公が被害者に寄り添いながら問題解決に奔走する姿には胸を打たれます。いじめを「学校の問題」として片付けず、社会全体で考えるべき問題として描いている点が素晴らしいと思います。私も子どもを持つ親として、思うことがたくさん出てきました。すべての世代に読んでほしい。

会員 / 三浦佑樹

「イズミと竜の凶鑑」風水そう

■ マンガのコマはあちら側への窓のよう。身を乗り出せば、向こう側に広がる世界をつぶさに眺めることができるんじゃないか。そんな作品が好きなのですが、2024 年に会った物語で、窓からの世界が最も魅力的に描かれていたのが、この「イズミと竜の凶鑑」でした。洒脱な台詞回しやユーモアとともに描かれる自然、生物、種族、社会の営みは、描かれているものごとを超えて立体的に世界を浮きあがらせ、私たちの想像力に旅をさせてくれる。作中の言葉を借りれば、「冒険の香りがする」作品です。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

■ デザイン、アイデア、ストーリーが噛み合ったファンタジー。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

■ ファンタジー世界を舞台にした弱小出版社で「竜の凶鑑を作る」という役に抜擢された記者と護衛の冒険者という話ながら、既存のファンタジー設定ではなく独自の竜という種の取り上げ方や、それにまつわる人間の思惑やどうしようもない現実に向き合いながら成長していく凸凹コンビというバディものでもあり美しい世界観の構築とアートワークに圧倒される作品。

住職兼ライター / 蟬丸 P

「異世界ありがとう」ジアナズ、荒井小豆

■ 中身は普通のオッサンが頑張るから、無理なく共感してしまいました。随所に散りばめられたいろいろな元ネタが分かるオッサンでよかった。

教師 / 持丸 宏司

「1秒24コマのぼくの人生」りんたろう

■ 普通の高校に進学した普通の女子が普通にギターを弾き始め、普通にバンドを組んで唄い始める物語。そこには、友達が一人もできないままひとりひとりぼっちでギターの練習に励んでいたとか、コミュニケーションが苦手代わりに学習帳いっぱい詩を書き殴っていたとか、虐めが原因で高校を辞めて都会に出て来て唄い始めたとかいったドラマティックなイントロダクションはない。入った軽音部でも、すぐにバンドを組んで大活躍してライブに出て評判になってといったサクセスストーリーはなく、ひたすら練習に励む中でなんとなくメンバーが出来て、けれども壊れてそしてまたつながってといった“あるある”な日常が繰り広げられる。それが面白い。誰かと誰かが付き合っていて分かれたといった恋愛沙汰がバンドの崩壊を呼んだり、再結成につながったりする。唄えば下手だからと笑われて悔しいと思って炎天下の公園に行って、アンプも繋がらないエレキギターを弾きながら大声でがなりたてたりもする。クワハリ原作・出内テツオ作画の『ふつうの軽音部』は、鳩野ちひろという女子高生が毎日を学校とギターとアルバイトに費やす日々がただ綴られていだけなのに、それが猛烈に面白いのは、誰もが送っている日常と隣り合わせの世界がそこにあるからだ。自分でも飛び込んでいけそうで、けれどもちょっと引いている人にこういう世界も面白いかもと思わせる親近感。下手だからギターを弾くのも歌うのもためらっている人に得ずやっつけてしまえと思わせる牽引力。諸々の魅力がページから漂ってきては読む人を絡め取って話さなくさせる。『ふつうの軽音部』にはそうした魅力が最初からあって、そして巻を重ねても衰えるどころかますます魅力を強めている。ナンバーガールや andymori や銀杏 BOYZ といった、イマドキ感から少し離れた邦ロックの渋い楽曲を込んで歌うところも、目立とうとか売れようといった気持ちより先にこれが好きだ、これを演りたいといった気持ちの表れとして同意を誘う。こんな気持ちを持って挑む鳩野の歌ならいったいどれだけのものなのかといった興味をかき立てられる。ページからはそんな声なき声が耳に響いてくる。アニメ化なり実写化なりがいずれ企画されたとしても、そこで誰かが唄う歌が心に響くかは分からない。マンガだから想像の余地があってそこに鳩野への思いを載せることができるのだ。とはいえ、やはりアニメなりドラマなり映画になって登場した時、そうした気持ちをまさに代弁してくれるようなシンガーがそこにいたら、気持ちもグッとなびくことだろう。企画する人たちの手腕が問われる。脳天気だけでなく、父親との関係など少しの痛みも持った鳩野がこれからどうなっていくのかまだ見えない。普通の軽音部らしくバンド間の競争もあれば先輩後輩の面倒や関係もあってそれが混乱を来しそう。軽音部の中での勢力争いのような芽も出てぐちゃぐちゃになっていく可能性もあるが、そこでも鳩野は鈍感に歌い続けてくれるだろう。周囲もそんな鳩野に導かれ、普通に対バンに勝って有名になっていってくれることを願いたい。

書評家/ライター / タニグチリウイチ

「いつか死ぬなら絵を売ってから」ぱらり

■ エゴ、歪さ、業の深さ。「絵を売るために」という目標を成し遂げるために描かれたストーリーに引き込まれ、読み手は常に「早く続き見たい」欲求を駆り立てられます。

広告会社 プランナー / 平沼良章

「一級建築士矩子の設計思考」鬼ノ仁

■ 建物についての奥深さを知ることができ、且つ、美味しいお酒も飲みたくなるマンガ。図面の見かたや様々な工法、違法な建築についてや、設計士が憧れる建築物も紹介されたり、とにかく建物好きにはたまらないです。これを読んでからは一級建築士の凄さに感動し、敬意しかありません。

書店員 / 野口忠義

「INNU」小丸ひかり、大沼隆揮

- 喋るバグが強くてシブい。次のボケがいつ、どうくるのかページを捲るまで分からない、ツッコミ不在のシュールなコメディ作品。これをバグ主体で描こうと思った発想が既に面白い。イヌの表情はいちいちうるさい（が、それがいい）。頭の中を空っぽにして読める良作。

弁護士 / 田邊幸太郎

「いやはや熱海くん」田沼朝

- 「いやはや」のタイトルから、何かしらの落胆するような残念な主人公のストーリーかと想像しつつ読んでみると良い意味で裏切られました。ゆる？く流れるストーリー展開がとても心地よいマンガです。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス 営業企画マネージャー / 阿部大介

「ウスズミの果て」岩宗治生

- 世界観にただただ圧倒されます。救われることを祈ってページをめくってます。

オフィスオーガスタ マネージャー / オフィスオーガスタ樋口健

- 彼女の任務には本当にゴールが訪れるのか。そんな厳しすぎる退廃世界での生き様と風景に途方もない美しさを感じながら、どうか救われるような日が来ることを願いながら、毎話を楽しみに追いかけています。好きすぎて今年もプッシュです。

会社員 / 伊東敬祐

- 終末世界で感じる人やアンドロイドの優しい思い出が暖かく心に染みます。

会社員 / 竹本慧

「詩歌川百景」吉田秋生

- 田舎とはいえ温泉のある観光地のため閉鎖的過ぎず、保守的な人はいても基本的には皆優しい地域社会の姿は昔の日本映画を見ているような気分になる。様々な年齢層の登場人物たちのそれぞれの立場の心象が描かれているので、誰かしら自分を重ねられる人がいるのではないかと思う。実在感が際立っており、他人事とは思えず、詩歌川とそこに住む人達がどうなっていくのか、ずっと見守っていたくなる。隣人がどんな人かも分からない都市暮らしのため、真逆に近い物語世界が気になるのかも。

丸善ジュンク堂書店・書店員 / 小磯洋

「うちのちいさな女中さん」長田佳奈

- 昭和初期の丁寧な暮らしぶりをとても丁寧に描いた作品。現代社会で忘れていた、生活の中の小さな幸せを再認識させてくれます。毎度出てくる料理がとてもおいしそうで、食べたくなります。定期的に出てくるハナちゃんの顔芸にはいつもくすりと笑われます。

デザイナー / 高永貞光

「写らナイんです」コノシマルカ

- ホラーと可愛さ、青春の絶妙なバランスが光る新感覚を味わいました。怖さの中に温かさが感じられ、不思議な魅力に引き込まれます。ホラーが苦手な方でも読めちゃえるホラー×ラブコメ作品です！

株式会社エイミング マーケティングプロデューサー / 伊藤千恵

- こんなにキャラクターが愛らしく可愛いのにホラー描写が怖い。ホラーモノが苦手な私は怖いシーンに目を背けながら、可愛いキャラクターを見守りたいので読み続けている。緩急のバランスがいい！

bar 図書室 / 岡部愛

「海が走るエンドロール」たらちねジョン

- 自身の体の老い、同志へ劣等感などに苛まれつつもそれを凌駕する『映画を撮る』欲求、包み込むような親愛の情

が、波に翻弄されながらも舟を漕ぎ続ける姿を支えていく。この作品ならではの貫いたテーマ、もっと沢山の人の触れて貰いたい。今頃あの人映画撮ってんだろ？なあとはいふかべて微笑むのは、その、なんなんでしょうかね。ありがとうございます(?)。

フリーランス / 金輪英恵

- 65歳を過ぎ、夫と死別した主人公が、失くした物を取り戻すように、映画制作を目指して美大に入り直す。二十歳前後の大学生に囲まれて、自分に残された時間を意識しつつ、映画作りに一心に取り組む主人公の心情がリアルだ。焦りと諦めとそれでも希望と…。創ることに取り憑かれたら、年齢は関係ない。また、映画業界の関係者(監督・映画祭プロデューサーなど)のエピソードにも愛情を感じる。全ての創るものを応援せずにはられない。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

- 夫を亡くした65歳のうみ子さんが第二の人生として映画作りの道を歩むようになるけれど…というお話ですが(ざっくり言うなら)、残された時間とどう向き合うか?好きなものとどう向き合うか?若い才能とどう向き合うか?等々、うみ子さんの年齢より下の人たちにもグサッと刺さるテーマがいくつも描かれています。自分がうみ子さんぐらいの年になった時に、彼女のような選択や生き方が出来るかなあ…とも考えさせられます。

ゲーム会社勤務 / 畑中瀬路奈

「狼の娘」小玉ユキ

- 現実味のないお話なのだけど兎ユキ先生の描くマンガではスッとその世界へ入っていきける。不思議な感覚。

カメラマン / 平沼 久奈

「大きくなったら女の子」御厨稔

- 斬新!男の子が可愛らしくて小さくて、身体が大きくなると女の子に性転換する。いわゆるクマノミ的な感じの「女性化」いままであったような設定なのに、しっかりとした世界観と、それぞれの悩みや生活が辛辣に書かれていて、面白い!たまにどっちがどっちだっけ?と混乱してしまう時があるw

元 SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

「OHMYGOD」反田背骨

- 1巻からドハマりしています。個人的にはこのハマり方はかつてのドロドロ、かつてのファイアパンチ的なハマり方です。最新4巻を読みました。疾走感が変わらず、展開も気になります。絵もどんどん見やすくなって、代わりにストーリーはハードになって、次巻が楽しみです…!

クラスター株式会社広報 / 西尾美里

「奥田の細道」相葉キョウコ

- 小説家と編集という、読者が普段知ることのできない出版業界の内部を題材にした意欲作。刺激的な回想シーンで始まり、その後も漂い続ける不穏な空気感、対照的な2人の編集や才能あふれる小説家の登場に、今後小説家志望の主人公の身に起こる数々の受難が予想され、続きが気になる。漫画家と編集ではなく、あえて小説家と編集を題材にしていることも興味を惹かれる。作者の祖父が小説家であったということも公表されており、そのご経験やご知見に根ざした話なども今後どこかで見られるのであろうか。

弁護士 / 田邊幸太郎

「オルクセン王国史～野蛮なオークの国は、如何にして平和なエルフの国を焼き払うに至ったか～」野上武志、樽見京一郎

- 戦争という単語、特に、兵站がお好きな方はぜひ。そうでない方にも圧倒的な説得力で迫りくるファンタジー戦記を是非ご堪能いただきたいです。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

「織田ちゃんと明智くん」常盤ギョ

- キュートな女子高生の信長様がかわいくて怖くてたまりません。翻弄される明智くん、がんばれ!

主婦 / 紺野泉

「夫の遺言が「同人誌描け」だったもので」むんこ

- 亡くなる夫の遺言から同人活動を再開する年配女性の話。同人あるあるで笑わせながらハートフルでほっこりする。良い夫婦良い家族を見て、読んで良かったと思える漫画です。

主婦 / 岸本しのぶ

- 同人誌即売会コミックマーケットが生まれて 50 年。同人誌という文化が日本のほぼ全世代をカバーする時代となり、こうした作品が生まれるのも必然と言えるだろう。内容はタイトルが全てを表しているが、結婚・出産・子育てで同人誌活動を止めていた主婦が、先立った夫の遺言でまた筆を執ることになる。出色なのは、子供達が世代ギャップを感じながらも、懸命に応援する家族愛と、主人公である母のいにしへのオタクっぷり。これを描けるのも同人誌キャリアのむちゃ長い作者・むんこさんだからこそリアリティだ。そして最後に明かされる、夫婦の馴れ初めのエピソード。すごい純愛を読ませてもらった。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

「乙女怪獣キャラメリゼ」蒼木スピカ

- 最初は気楽に読み始めたんですが、しっかり展開していてギャグと真剣さの行き来がクセになります。恋のドキドキで怪獣になってしまう少女が自分のままならない体質に振り回されるお話ですが、伏線回収もしっかりしているので、このまま丁寧に最後まで描き切ってもらえるのを楽しみにしています。

WEB 制作・ディレクター / デザイナー / 河本智芳

「おぼんちゅうさぎ」可哀想に！

- 何をやっても頑張りが報われないのがクローズアップされがちだが、その立ち居振る舞いにどんどんツボっていくのがこのマンガの真骨頂。シュールさより、可笑的。可哀そうでもカワイイ。最近「ちいかわ」がサブキャラ含め壮大になっているのに比べ、こちらはどこを読んでも延々おぼんちゅうさぎのみ。その潔さにも惚れる。

October Beast 代表・デザイナー / 北山友之

「おひさまとえんぴつ」羊の目。

- 優しくてかっこよくて尊くて、、、。全世界にお勧めしたいマンガです。

オフィスオーガスタ マネージャー / オフィスオーガスタ樋口健

- 聴覚障害がある読書好きな少女の物語で、イヤな現実（差別も含めて）に触れつつも、障害という弱点を長所に変える強み、周囲の心の優しさが素敵です。きれいごとかもしれませんが、こういう世界であってほしい。

サブカルライター / 河村鳴紘

- 電車の中で何の気なしに読んでいたら、途中で（これはまずい…）と読むのを止めて、鞆にしまいました。ここで号泣するわけにはいかない、と。で、家に帰って安心して涙流しながら読みました。喜怒哀楽とも異なる「優しさに泣く」なんて、最近は無かったので、いい作品に出会えてよかったとしみじみ感じました。

書店員 / 野口忠義

「おひとり様には慣れましたので。婚約者放置中！」晴田巡、荒瀬ヤヒロ

- なるう系では「ふたりの世界」でふたりだけの世界で両片思いが多いですが、この両片思いはまわりのわちゃわちゃが混じっていて、大変楽しく読んでおります！気持ちが明るくなります。

株式会社アニメイト / 鈴木寛子

「おぼろとまち」石ト悠良

- 個人的に 2024 年に始まった中で最も楽しんでいる作品。かなり強引に表現するなら「JK (おぼろ) と JK (おぼろ) による日常系マンガ」と言えそうなのだが、今までの「日常系」という概念がすべて「平成レトロ」と札を貼られそうなぶっ飛んだ日常が繰り広げられる。これが令和の日常…ッッッそもそも「日常系」というジャンルでこの作品を捉えようとする自体がナンセンスであり、高校生の日常はこういうハチャメチャがあったのではと

いう錯覚すら覚える。そういえばこんなかんじだったわ(ちがう)1話の「学歴マウントで憤死」とか「怒りをぶつけるのは疲れる」とか、なるほど言語化するとそうなるのねと思うワードセンス。人の顔を覚えるのが苦手な私にとってキャラクターの髪型が変わるのは結構困ったりもするのだけど圧ッ倒ッ的な個性があれば髪型変わっても容易に識別できる、っていう新鮮な発見。今後も冴えわたるおぼろの倒置といざとなったら叩き込む準備ができているまち二ーに期待。

会社員 / 布施直人

「オレが私になるまで」佐藤はつき

■ 前巻から随分と待った。この間で、以前以上に多様性やジェンダーへの解釈がグンと進んだ(という表現が正しいのかはわからないが)ことから、読み手に与えるインパクトの種類も変わってきているように感じる。すばらしい作品。

イロイロ屋 / 杉本善徳

■ このマンガをまた推すことができよかった。4巻発売は2021年12月、最新5巻が24年6月……。2年半の長きを黙って待っていたファンは少なくないはず。連載そのものは電子書籍で追えるにしても、紙の本にまとまるのは感慨しきり。男子小学生がある理由で女子になってしまい、元の性に戻れないまま中学生に。よくある設定のようだが、このマンガのよいところは、10代前半の不安定な気持ちや、主に友人、時に異性(つまりクラスメートの男子)との関係で抱えがちな不安と、それを乗り越える勇気、そしてその先にある成長を繊細に丁寧に描こうとしている点だ。その意味でとてもまじめなマンガなのだと思う。主人公アキラは造形がかわいいだけでなく、思慮深いというか、おとなしく内省的な性格であるところが物語に深みを感じさせるゆえん。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

「女×女のうまくいかない恋愛エッセイ parlor」藤生

■ 今年読んだエッセイ漫画で一番衝撃でした。今も繰り返し読んでます。1巻も2巻も大好き。私も近所の人妻マップ作ってみたい!ご自身の言語能力の高さと自己分析が素晴らしいがゆえに、失恋エピソードをここまで表現できるのでしょう。際どい話や発言ももはや痛快。新しいタイプのコミックだと思います。編集者さんや他の作家さんとのやりとりもすごい。個人的に昔から新書館さんファンなので、色々面白すぎました。

営業 / 佐々木つむぎ

「ガールクラッシュ」タヤマ碧

■ K-POPもオーディション番組も全然詳しくないんですが、ぶっ刺さり毎話課金です。ダンスシーンの躍動感、ユニットの描き方の上手さ、たまのカラーも全部素晴らしいです!電子限定で8巻まで出ているんですが、今度紙媒体も出るとのことでもっと売れて欲しい作品の一つです。

声優 / 綾瀬有

「カグラバチ」外菌健

■ 少年漫画、ジャンプ漫画に必要とされるものを全て待ち合わせた上で、今の時代の暗さをチェンソーマンや呪術廻戦とは違った形でアップデートした素晴らしい作品。王者の風格があります。

OKAMOTO' S / オカモトショウ

■ 週刊少年ジャンプの王道を行くアクション大作!しかも鬼滅や呪術などの近年の大ヒット作をしっかり咀嚼したダークで骨太な作品世界を構成しているぞ!さらに『チェンソーマン』的な映画的なカットも豊富!とにかく面白い。

会社員 / やのこうじ

■ 刀での戦闘シーンを見る目は、ここ数年、鬼との戦いで肥えたはずなのに、カグラバチは新鮮に、抜群に、面白い。絵も綺麗で読みやすく、芸術のよう。主人公チヒロの心の重さ、安定感が読者に安心をもたらすが、その根底に`復讐`があるとすると、また緊張感が増してその後の展開が楽しみになる。

スターダストプロモーション・アイドル / 秋本帆華

「株式会社5年1組」神海英雄

■どんな素材も特濃激アツ激エモなマンガに料理する異能の漫画家・神海英雄先生の新作です。面白いこと大好きだけどやる気が続かない主人公・率紀が、社長令嬢でもあるスーパー小学生・孔雀ちゃんと学校を面白くするためのビジネスを、小学校の空き教室から始める物語です。タイトルの通り「ビジネス」が題材のマンガながら、最強ジャンプという低年齢層向けの雑誌らしく、小学校を舞台としたコミカルでキャッチ？な演出とテンポ感で展開していきますが、「儲ける＝お金を得る」こととはどういうことか、という大人の世界に通じるテーマを、やさしい言葉とアツい物語で真摯に描いています。神海先生の真骨頂でもある、「真っ直ぐな心と言葉が、葛藤を抱えた魂を揺さぶる」様は健在。超優秀だけど独創性に欠ける孔雀ちゃんが、ちょっとおバカだけど型破りなアイディアマン率紀とのビジネスを通じてどう変化していくのかが気になるお話。大人が読んでも、自分の仕事に対して火が入るような気持ちになれるマンガです。

株式会社ムービック / 岡部 真矢

「かまくらBAKE猫倶楽部」五十嵐大介

■今、私、こんな本が読みたかったのです。嬉しいです。絵もとても素敵で、カラーで見たいな、アニメーションも見たいな、と凄く思います。歴史も盛り込まれていたり、色々で、わくわくします。続きが楽しみです。

書店員 / 桶谷佳代

「かわいすぎる人よ！」綿野マイコ

■親を亡くした姪と叔父のとのハートウォーミングな物語。かわいいは見た目ではない。その考え方や周りに対する愛や優しさや思いやりにも表れるもの。読後感が最高に良い。このかわいさが伝播する。愛おしい、愛おしすぎる作品。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西 良昌

■一言でいうなら「優しい世界」！主人公メイちゃんがとにかく柔らかくて優しい良い子ですし、美人な叔父さんはじめ他の登場人物たちも色んな葛藤やコンプレックスを抱えつつ、最後は笑顔になるようなお話ばかりで、読後に胸が温かくなります。

ゲーム会社勤務 / 畑中瀬路奈

「かわうそセブン:[伝染るんです。]フューチャー」吉田戦車

■東京新聞で連載が復活していたことは知っていましたが地方に住んでいるとなかなか目にする機会は無く、こうして1冊にまとまってくれたことがとても嬉しかったです。小学生だったわたしに「乱丁」を教えてくれたあの印象的な装丁を思わせる、懐かしいたずまい！大好きなキャラクターたちも30年の年月を経て描かれ方に多少の変化はあるものの、やっぱりこの戦車ワールドが大好きだと再確認しました。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

「喫茶アネモネ」柘植文

■とある町にある懐かしい雰囲気のある喫茶店アネモネ。老マスターとバイト女子のよっちゃんが、変らぬ笑顔で迎えてくれる。個性豊かな常連客の皆さんも和やかにお店で憩いの時を過ごす。そんな定型の時間が止まったような空気を、柘植文ならではの味のあるシュールなゆるさで描く。新聞漫画の見本？のような作品。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

「喫茶ニュー魔王城」山本四角

■魔王と勇者の戦いによって平和になった世界で、実は死んでいなかった元魔王と元勇者が喫茶店を営んでおり、何も知らないバイトの女の子を交えて描かれる魔王城の日々という、ネットで投稿されていたシリーズが単行本になって発売、魅力的なキャラや異種族の掛け合いや緻密な描写などオリジナルの異世界ファンタジーとしては出色の出来映えでした。

住職兼ライター / 蟬丸 P

「気になってる人が男じゃなかった」新井すみこ

■ SNS で読み始め、推しからの友情！気になってマンガを買いました！

カメラマン / 平沼 久奈

「君にかわいいと叫びたい」ハッピーゼリーポンチ

■ 他人からみたらほんの些細なことだったりするものも、別の誰かにとっては大切な宝物かもしれない。「好き」という気持ちや情熱をひたすら肯定してくれているような圧倒的な幸福感に包まれる作品。登場人物全員微笑ましく愛おしい。何度も読み返してるのに、毎回多幸感で泣いてしまいます。はしゃいでいる 2 人に混ざりたい！全員を褒めてあげたい！！大好きです。

元書店員 / 内野智未

■ 仲良くなれたらいいな、近づいてみようかな、私の大事なものを大事にしてくれてうれしいな、あなたといると楽しいな、もっと仲良くなりたいな……という、人と人の間に生まれる美しいものをストレートに全開で見せてくれる。桐山さん、南さん、ずっとずっと仲良しでいてね。

ライター / 門倉紫麻

「きみの絶滅する前に」我孫子楽人、後谷戸隆

■ 規格外の反出生主義どうぶつ譚、あるいはポストアポカリプス再生産的未来主義批判ノワール漫画。こういう物語があるということ自体に計り知れない意味をもつということはもちろんとして、ペンギンの目がいい。

会社員 / 末永龍介

「きみの横顔を見ていた」いちのへ瑠美

■ 昨年読んだ漫画の中で、最も心地良い清涼感を感じた The 少女漫画。ここまで真ん中の青春恋愛物語は久しぶりに読んだので（読むこと自体への）恥ずかしさはあったのですが、令和らしいテンポの早さ、さらっと描きつつも可愛い画風、何より登場人物皆ええ子で……いい年齢の大人でもストレスなく読めました。登場人物みんな自立してて、でも弱った時はちょっと肩を貸りる。そんな距離感が好ましい。全員片思いしてるので矢印はひたすら一方通行なのですが、これも果たしてどうなるか。

フリーランス / 金輪英恵

「CANDY EIGHT ～わたしたち、最高で最強のヒロイン～」星屋ハイコ

■ 少女まんがの絵柄なのにご本人様に似ててすごい。特徴を捉えすぎた描き分け…！少女まんがらしさ全開の可愛さとちょっと泣けるところもあり。書店員としては特典のクリアカードがめっちゃ人気でした。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

「今日、駅で見た可愛い女の子。」さかなこうじ

■ なぞなぞ豆本持ってた。謎のふわふわのキーホルダー集めてた。たまごっち持ってた。ローラー消しゴムも持ってたし他にもいろんな消しゴム集めてた。エンジェルブルー様に元気してた？って聞くくだりツボでした。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

「今日も吹部は！」宮脇ビリー

■ 吹奏楽は格闘だ。そんな訳はない？ だったら宮脇ビリーの『今日も吹部は！』（小学館）を読むと良い。ギャルな部長と眼鏡の委員長風な副部長が殴り合っただけでは何かの決着を付けようとしている。トランペットのパートでも部員が殴り合い蹴り合って主義のためにしのぎを削り合っている。部長と副部長の場合はまだ、吹奏楽部の方針を全国大会で金賞を目指そうとする、ユーフォニウムが響いているような吹奏楽に関わる対決だからまだ良いけれど、トランペットのパートの殴り合いに蹴り合いは、部長と副部長とのどちらが受けで攻めなのかといった見解の相違によるもの。その重大性は大いに分かるけれど、しかしやっぱり吹奏楽とは関係ない。というより『今日も吹部は！』を読んでも、吹奏楽が奏でられているような場面はなかなかない。あるのは部員たちが会話したり殴り合っ

たりしているような場面ばかり。あるいはクラリネット吹きの男子部員が使っているリードを手に入れたいと後輩の女子部員が望む場面なり、一見ひ弱そうに見えるトランペットの先輩の女子が実は元ヤンで合気道の達人で元野球部のエースすら投げ飛ばす場面なりといったもの。演奏からはほど遠い。けれども面白い。そして吹奏楽味もある。どこに？というのつまり吹奏楽部で表がコンクールを目指す猛練習なら、裏にある部員たちの日常であり感情であり関係がしっかり描かれているということだ。どのような興味を持って吹奏楽部に入ってきたのか。どのような関係で吹奏楽部内の諸々な事柄が進んでいくのか、等々。そうしたことは例えばユーフォニアムが響くような小説なりアニメにはあまり描かれない。鬼のような顧問の下で巧くなりたいと頑張る女子部員の話がほとんど全編を覆っている。そんな女子部員にも恋のドラマはあって、他の部員が絡んだもやもやとした関係が描かれても、大きく発展してギクシャクとしてギスギスになって瓦解するような展開にはならない。そして、吹奏楽そのものにもまるで影響は出ない。そんなはずはないのだ。音楽がメンタルに左右されるならそこに何かしらの影響は出るものなのだ。人が音楽を奏でる以上、人の感情や関係も音楽に現れる。そうした状況の片断を『今日も吹部は！』は描いた物語なのだ。片断がいつ描かれるのか、本当に描かれるのかの予想がまったくつかないことは別にして。野球部のエースで学校を甲子園まで連れて行った汐見草太郎が、世をはかなんで屋上で黄昏れていた時に、小松原ルーシーから声をかけられ吹奏楽部に引っ張り込まれる展開はなかなか珍しいものだ。エースならきっとバッターとしても四番で投げられなくても走れなくても活躍できそうなものなのに、そうはせず吹奏楽部に入って右も左も分からない吹奏楽の世界で頑張ろうとする汐見の姿に、スポーツマンのセカンドキャリアの可能性が浮かび、あるいは道はどこにだって続いているという格言めいたものも浮かんで、同じように挫折を味わっている人に希望を与える。そうして入った吹奏楽部で女子が殴り合っている姿を見るのもひとつの経験。そこから野球部では絶対に出会えなかった人たちに触れ、考え方も知って成長していくドラマを見せようとしているのかもしれない。だったら吹奏楽でなくても良い？そこはそれ、いつかきっとやっぱりどうにか吹奏楽そのものにも描写が及んで、やる気のある部員もない部員もどっちでもない部員もまとまって、全日本音楽コンクールで金賞をとるような活躍を見せてくれるだろう。くれないかもしれないけれど。

書評家/ライター/タニグチリウイチ

「凶乱令嬢ニア・リストン 病弱令嬢に転生した神殺しの武人の華麗なる無双録」古代甲、南野海風、磁石、刀彼方

■ ここ最近で一番おもしろかった異世界転生もの。ストーリーのテンポもよく、アクションが特に良い。

広告会社 ブランナー/平沼良章

「恐竜とカップのいる図書室」相澤いくえ

■ 生き辛さや繊細な距離感を表現する作品は数多くあるかと思いますが、ダントツでずっと相澤先生が好きです。生き辛さのその先にあるキラキラしてるものを具体的に描ける稀有な作家さんだと思います。このお話は女子高生2人の友情がメインですが、ファンにはお馴染みのカップのおかげで心のモヤモヤした部分がとても伝わりやすかったです。いつどこで誰と出会うかで人生が変わるんだよなあとそんな当たり前のことを改めて深く考える作品でした。

営業/佐々木つむぎ

「霧尾ファンクラブ」地球のお魚ぼんちゃん

■ 二人の女子高生が男子について語り合うギャグマンガとして始まり、中盤の転調でムードが切り替わり、クライマックスで構図が激変する。実は油断のならない技巧的な一作。

書評家・ライター/福井健太

■ ギャグとシリアスのバランスが最高。笑いの要素はすこしシュールさも感じるがテンポがよく重い感じはない。ここまでのキャラクター性を理解した上でラストは感情が入り乱れるのでより味わい深い。ポジティブでさわやかなエンディング。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT/涼平

「キリングライン」モリエサトシ

■ 女子高生と殺し屋、ラブでアクションでバイオレンス！ジェットコースターみたいです！

主婦/紺野泉

「銀のくに」はやしわか

■ 雪国で暮らす主人公。そこで一緒に暮らすことになった今まであったことも無い従兄妹。雪国新潟を舞台にした物語。環境や立場の違いに戸惑いながらも生きていく子供たちを丁寧に描いた作品。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

「クイックオバケの動かない漫画」クイックオバケ

■ 実際は経験したことないのにどこか懐かしさを感じる不思議な感覚。

医師 / 岸本 倫太郎

「空賊ハックと蒸気の姫」井上智徳

■ タイトルのまんま、スチームパンク+ラピュタ、その他いろいろごちゃ混ぜってワクワク、ドキドキさせる。こういう冒険譚はいまどきとても貴重だ。現実世界がフィクションよりも過激になってしまった2025年において、けちくさいリアリズムとは違う昔ながらの「マンガ」の役目、マンガという表現しか果たせない役割を作者は強く意識しているのだと思う。それは尊い営為だ。まだ1巻だけだが、応援したいので1票入れます。作者特有の元気で明るく、めげず、あきらめないキャラクターたちがこれからどんな活劇を見せてくれるのか楽しみ。ありそうでいていまどき実は少ない、なかなか描けないマンガ。いつかフルカラーの大判コミックで読みたい。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

「クジャクのダンス、誰が見た？」浅見理都

■ 冤罪をテーマにしたサスペンス。小出しの情報を説くミステリー部分と、人間の情の部分のバランスが良く、登場人物の感情の揺れが手に取るようにわかって面白い。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

「クニゲイ～大國大学藝術学部映画学科～」高野陽介

■ 映像制作をテーマにした、主人公が自分の限界や他者の才能に打ちのめされながらも、努力を重ねる姿が描かれた青春ストーリー。教師のアドバイスやライバルの厳しい言葉が、主人公を成長させていく鍵となっていて、応援したくなるだけでなく、読んでいるこちらまで「頑張ろう」という気持ちにさせられる。映像分野に造詣が深い方が読まれるとさらに楽しめるかもしれません。

会社員 / 三浦佑樹

「劇光仮面」山口貴由

■ 特撮オタクを拗らせすぎて100周くらいして却ってまっすぐになった、みたいなキャラクター達で紡がれてきた『劇光仮面』。今までは「ヒーローもの特撮」から正義の魂を受け取ったアマチュア達が中心に描かれてきましたが、ここにきてヒーロー系のおもちゃを作り続ける大手メーカー勤務の真理りま、つまりは「アマチュアではない」人物をメインに据えたエピソードが展開されています。アマチュアだからこそその真っ直ぐで大きな愛を、ストイックかつ自由に表現してきた実相寺の立場と違い、業界にいるが故の縛りや、ビジネスとして関わらなければならないからの夢のなさ・自由でなさに直面するりまの状況を描くことで、そのような側面も含めての特撮愛を感じる物語になっています。逆境を経てもなお劇しく光る魂のありようは、ヒーローを愛する大人たちにより一層ブツ刺さっています。

株式会社ムービック / 岡部 真矢

■ 創作物をフィクションと知りながら本気になり救われることは誰にでもある。彼らと我々はなにも変わらない。ただ彼らの場合、純度がずば抜けて高い。

医師 / 岸本 倫太郎

■ 山口貴由先生の作り出す世界観が大好きです。特撮やヒーローへのリスペクトをバシバシ感じる、独特な濃い世界は山口先生ならではのです。

主婦 / 岸本しのぶ

- 剥き身の日本刀みたいに危険なマンガ。身を覆い、顔を面する者たちの物語。作中、いわゆる怪人的な怪異の力を持つ者たちが現れてくれて本当に気が楽になった。救いをえた。身を覆い、顔を面する者たちに、真っ向から相対してくれる存在があの世界にいてくれたことがありがたかった。でなければ、身を覆い、顔を面する者たちが、ただのイカレ野郎になってしまうように思えたからだ。良かった、相対する者がいてくれて。応える者がいてくれて。彼らをただの狂人にしないでくれ。ただ、その怪異の者たちもそれぞれの事情を抱えながら雪の中で消えていくのがこの世界の無常だ。戦いは続く。

ソフトウェアエンジニア / 第3齋藤

「煙たい話」林史也

- 昨年に引き続き投票させていただきました。共存、共生、そんな言葉を並べてみる。ただそこに一緒にいるということが、なぜこんなにも難しいのだろう。何故言葉にしなければわかってもらえないのだろう。他者のことも、自分のことすらも理解できなくても、理解されなくてもいいから、互いに損なうことなく生きていくにはどうしたらいいのだろう。やわらかく繊細な絵、その中にちりばめられた隠喩、ページを捲る手は軽快ですが、読み終わってからふわふわの小さな棘が全身に刺さって動けないことに気が付く。5巻のラストは苦しく、これまで単行本派だったのですが、絶るようにウェブ更新をクリックしてしまいました。劇的に何かが変わるわけでも、解決するわけでもない。正直人生そんなものだけど、漂い、潜り、時々浮上して、少しだけ視界が開けたりする。先日、運よく林先生のトークショーに参加することができて、この作品に対する想いがより強くなりました。誰かが悪い人に見えないように気を付けている、というニュアンスのことを仰っていたのが印象に残っています。ある立場の人を主人公としたとき、その横や逆の立場にいる人を下げたり悪とすることで主人公の主張を通すのが、わかりやすく共感を得やすいですが、思い返すと確かにこのお話にはそれがない。読んでいて、苦しくなることはあっても居心地が悪くならない理由は、これだったのかもしれないと思いました。まだまだ続きますという先生の言葉にほっとしつつ、このお話と向き合い続けるからには、私自身もまだまだふわふわと漂い続けるのだなぁと思いました。自分なりに感想を書きましたが、本当はどんな言葉を並べても少しも伝わる気がなくて、もわっとした、ざらっとした、このお話の空気がそのまま伝わればいいのと思っています。この漫画を目の前に積んで、とりあえず読んで、と言いたいです。一人でも多くの方に届きますように。

会社員 / 堀尾素子

「煙と蜜」長蔵ヒロコ

- 大正の物語、丁寧に描かれているの読み始めるとじっくり読んでしまいます。素直にまっすぐに、少しずつ大人になっていく姫子ちゃんをみると切なくなってしまう。
- 唯一無二の空気感。姫子と文治さんの2人の関係性の可愛らしさと色っぽさの両立が素晴らしく、ずっと幸せでいて欲しい……と願っています。

主婦 / 紺野泉

女優 / 齋藤明里

「ケントゥリア」暗森透

- 『ケントゥリア』はダークファンタジーバトル漫画です。物語の始まりはオーソドックスながらも、表現のテンポが良く引き込まれます。主人公は奴隷からスタートし、突然変異で100人分の力を手に入れるという急展開から始まります。この漫画の面白さは、バトルパートもなのですが、家族愛や憎悪が交じり合う複雑な人間関係、そこに介入してくる怪奇なモンスターたちにあります。これらが混在することで先の読めないストーリーとなり、ただのバトル漫画では終わらない魅力を引き立てています。残酷な表現が多い中でも、物語中に散りばめられた謎は漫画として非常にオーソドックスな話ではありますが、次に何が起こるのか全く予想がつかない展開が続くのが魅力です。終わりがどうなるのか全然見当がつかないので、是非チェックしてみてください。

会社員 / 佐藤優

- 最近のダークファンタジーバトルもので、一番おもしろかったと思います

tetote 代表 / 力丸 真

- ジャンプ+ はおすすめ漫画が多いが、その中でも今最も先が気になる漫画

会社員 / 齋藤隼

「恋せよまやかし天使ども」卯月ココ

■女の子も男の子もカッコよくてかわいくて、ギャップ萌えサイコーですよ。

主婦 / 紺野泉

「恋とか夢とかてんてん」世良田波波

■きつい！けど、判る。主人公の人を傷つけてしまったかもと、自分の放った言葉を後悔するシーンに、これは本当によくある。そして、乗り越えられない部分もよくある。自分とは違う行動力ですが（恋していきなり大阪に引っ越したり）でも、葛藤や自分に甘い部分とか、共感したりないな〜。と思ったり、1冊読むのに感情が大きく揺さぶられた作品です。

株式会社アニメイト / 鈴木寛子

「恋より青く」深海紺

■女子学生の揺れる心を、穏やかに、丁寧に描いていく。若いころの心の機微とは、確かにこういうところがあったものだったと思わせてくれる、そんな逸品です。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

「高度に発達した医学は魔法と区別がつかない」瀧下信英、津田彷徨

■お医者さんがファンタジー世界に転移したらという異世界転移もの。ファンタジー世界の住人の特性や性質を現実世界の人間に置き換えた場合…こういう症状になるのでは？という発想が面白いです。しっかりとした医学の土台にほどよいバランスで空想が混ざり合い読んでいて違和感をあまり感じさせません。作画もとてもすばらしく物語をビジュアル面からしっかりと支えています。

デザイナー / 高永貞光

「古々路ひめるの全秘密」小松翔太

■ツッコミほぼ不在のギャグ漫画とっていますが、それだけではなさそうだ、、、と思わせる作品です。絵がとんでもなく上手く、西洋風ファンタジーとSFと現代アクション等色んなジャンルがごった煮しているのにストレス無く読めます。イグアナのレギュラーキャラがいるんですが、毎回デフォルメせずに鱗までちゃんと描いているのは作者の唯ならぬ拘りを感じます。ただ、週間連載でこのクオリティは大丈夫かと心配にもなります、、、ってくらい絵が上手いです。ワンパンマンの原作者:ONE先生の作品を読んだ事がある人ならハマるのではないかと思います。

会社員 / ターシ

■元勇者で銀河のお姫様で魔法少女で除霊師で幻獣保護やってる女子高生が主人公なんですよ〜なんてこと言ってくる漫画家がいたら、私が編集者なら即ボツ食らせてます。てんこ盛り過ぎる。なのにそこが面白い。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

「Colori Colore Creare」天野こずえ

■天野先生の描く、あの大好きな優しい世界にまた行ける。そう連載開始時に思いました。あかさんを取り巻くちょっと不思議で素敵な出来事を見ていると、不思議と日常に転がっているちょっとしたことに目を向けられ、優しい気持ちになることができます。天野先生の完結作であるAQUAやARIAの世界との接続も面白く、これらの世界の成り立ちを知ることができるかもしれないという視点でも楽しめる作品。4巻では一つの大きな節目を迎えますが、20話終盤の画角を固定した時間経過と、それに伴う切なさの描写が秀逸で、最後まで涙が止まりませんでした。読んでみると、時間がゆっくりと流れるような、そんな“すてきんぐ”な作品。

弁護士 / 田邊幸太郎

「さいごの恋」野原広子

■「消えたママ友」「妻が口をきいてくれません」の作者が更なる境地に進んだ。46歳独身、更年期を迎えた女性がマッチングアプリを始める物語は、超シンプルな絵柄なのに深く孤独をえぐる。穏やかに平和に進んでいくかと思いきや終盤は劇的展開で全く先が読めない。お見事。ただ、最後の最後に別の作者の有名マンガを持ってきてオチにするのは疑問です。

朝日新聞記者 / 小原篤

「最終電車の恋人たち」ダヨオ

- まず純粋に漫画が上手い。絵、コマ割り、セリフ、構成も完璧な中に、少女漫画以上のときめきが溢れていて、読み終わった後は、すぐ人に勧めたくなりました。特別なことなんて何も起きなくて、唯只管にサラリーマン2人の恋を丁寧に丁寧に描いてるのですが、BLというジャンルで限られた人にしか届いてないのが本当に勿体ない。実際職場の男性陣に勧めてみましたが、皆一様に感動・感服しておりました。この作品は人と感想を共有したくなること間違いなしです！

中央書店 / 井出麻悠美

「ザ・キンクス」榎本俊二

- 人に安心して勧められる榎本！大っぴらに好きと言える榎本！表紙を隠さなくて良い榎本！可笑しくて楽しくて大好き！

中央書店 / 井出麻悠美

- 家族を見守る優しさと絶妙な距離感。着眼点の鋭さと表現力。良き父親、そして巨匠の趣きがあります。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 榎本俊二先生の作品はずっと読んできましたが、正直、人にすすめるにはなかなか難しく（苦笑）ようやく大声で万人におすすめできて嬉しいです！大声過ぎて小学生のような感想になってしまいますが、ものすごく絵がうまい！誰も観たことのない構図に、執念とも言える描き込み量。味のあるキャラクターたちもみんな愛しく、女の子の瞳の中はまるで宇宙が広がっているように美しいです。深夜ラジオの回や映画の回はSNSで読んで涙した方も多かったのでは。誰が読んでもお気に入りの回が見つかる、何度も読み返したい傑作です。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- あらゆるマンガ賞に名を連ねている作品。ずっと気になっていた。なかなか手を出さずにいたが、ふとした機会に読むことに。面白い！そして心地よい！読んで良かった。

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- 超・超巨匠、榎本俊二が下ネタとグロを抜いたら何が起こるのか…！ 残ったのは、一見日常ファミリーコメディに見える、超純度の高い、狂気。遅く起きてきた怠惰な母親、というよくある日常の中で吐かれる「私も徹夜で寝た！」という語義の矛盾をものとしめない態度、「地元ささやか祭り」ほか固有名詞に漂う毒気、各回の扉のダイナミックな表現、全てが他の作品にはないクレイジーさがあふれている。ただ同時にこの作品、画面がとて、とてもデザイン的に美しいのだ。美しい狂気に価値がないはずが、あろうか！

ニッポン放送 / 吉田尚記

「佐々田は友達」スタニング沢村

- 個性的な「友達」の存在を通じて描かれる、主人公・佐々田の視点は独特で繊細な色合いに感じ、優しい気持ちにも胸が締められる気持ちにもなる。もう戻ることがない、会うことはないけど、その時確かに向き合っていた「友達」との時間の記憶を手繰って、良いものだったのかもなと思いながらページをめくりました。

会社員 / 伊東敬祐

- ノンバイナリー女子を描く強い意志を感じました。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 陰キャの佐々田ちゃん、陽キャのゆーきちゃん（高橋優希）がまず出てくるので、陰キャ対陽キャの話かと言えばそうではなく、かといって、陰キャと陽キャが理解し合う単純な話でもなく、丁寧に描写が魅力的な高校生マンガです。高校が舞台のマンガといえば、今回は『RIOT』や『ふつうの軽音部』など他にも印象的なものがありとても悩んだのですが、佐々田ちゃんが自宅に友達を招いて催す「お茶会」で出てくる料理が大変魅力的だったのがこのマンガを選んだ決め手の1つだったりもします。

鳥取県立図書館 / 野間勲

「サチ録～サチの黙示録～」茶んた

- ギャグのキレ味がキレッキレで、読んでるといつもつい声を出して笑ってしまうのに、心がほっこりするシーンも毎回あって、笑い感動のバランスが絶妙です。毎話読み終わるたびに、なんとなく心が癒されてるのを感じます。無邪気で豪胆な「クソガキ小学生」サチ、生真面目で優しすぎる悪魔のボロス、煩惱だらけだけどどこか憎めない

天使のラン。もはや家族そのものなこの3人が繰り広げる日常が愛おしすぎます。できることならずっとずーっと一緒にいてほしいですね！3人以外の登場人物もみんなクセが強いのに魅力的で、掛け合いとか成長を見てるうちにどんどん好きになってしまいます。願わくば土日の夕方あたりでアニメ化していただいて、永遠にこの作品が続いて欲しいものです。

接遇スペシャリスト／ライター／田邊加奈

「さっちゃんとふくちゃんの5円玉」ド布林

■ 本当に「感情がめちゃくちゃにされる」とはこういうことだ。

作家 / 海猫沢めろん

「サラリーマンZ」石田点、NUMBER8

■ 今までになかったゾンビ漫画。サラリーマン前山田が会社の規則の中で困難を乗り越えていく。その行動に従い問題解決をしていく仲間たちも面白い。様々な人間模様はこの先も期待。

デザイナー / 平沼寛史

「サンダー3」池田祐輝

■ とてもワクワクして武者震いする。

PENICILLIN / HAKUEI

■ 可愛い絵柄から奇想天外なストーリー。シンプルで日常的なやりとりの描き方が難しい言葉を使わないのに叙情的、そのミスマッチもおそらく計算されていて素晴らしい。マルチバースの描き方を写実と混ぜているのも印象的。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

「三拍子の娘」町田メロメ

■ 繰り返しのような毎日の、なんと愛おしいことか！同じ家に住む3人姉妹の日常をコミカルに描いていくこの作品。この3人のように日々の中での小さな幸せやモヤモヤを、うまく扱うことができたならどんなに素敵なんだろうか。影響されて自分の日常も愛らしく感じられるほど、にこにこ朗らかな気持ちになれる話がたくさん。作風も個人的に大好きで、いろんな方に是非読んでほしい作品。読んだ後、きっとほっこりとした気分になれるはず。

会社員 / 杉佳尚

「じいさんばあさん若返る」新挑限

■ いきなり若返った老夫婦。周囲で巻き起こる出来事。ほのぼのとさせられる、おしどり夫婦コメディ。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

「J⇔M ジェイエム」大武政夫

■ 人格入れ替わりという、いわばベタベタな設定なのに毎話毎話本当に面白くて脱帽。全キャラが常にボケとツッコミ役を両方こなしているようなギャグの応酬に笑いが止まりません！

会社員 / 小野塚博之

■ 1巻から面白いと感じてはいたものの、なんとなく初速だけなんじゃないかと思込んでしまっていたことを反省している。今のところずっと面白いし、まだ展開してくるし凄い。続きが読みたい。

イロイロ屋 / 杉本善徳

■ ドタバタ入れ替わりギャグマンガでテンションの高いままずっと面白って凄くないですか？戦闘シーンが毎回カッコイイ。ギャグマンガなのに。登場人物全員もれなくぶっ飛んでいます。このマンガで1番イカれてるのは間違いなくママです。最新巻の展開も最高です。いま最もおすすめできるハードボイルド系ギャグマンガ。

会社員 / 竹本慧

- 昨年に引き続き投票させていただきました。殺し屋のおじさん (純一・J) と教育ママを持つ小学生の女の子 (恵・M) の入れ替わりの物語です。やっぱり絶妙に面白いですね。普段は笑いを求めて漫画を選ぶことはあまりないのですが、大武先生の漫画だけは別で、笑える確信があって手に取ります。もちろん笑いだけじゃないですよ！純一の身体で生き生きと過ごしている恵を見るのが大好きです。恵の身体で殺し屋の仕事をこなす純一が普通にかっこいいので、戦闘シーンも毎回お気に入りです。地味に好きなのはサブタイトルです。扉絵のデザインと一緒に楽しんでいます。4巻では新たな展開もあり、タイトルどおり、入れ替わり物語はまだまだ楽しく続いていきそうで嬉しいです。

会社員 / 堀尾素子

「塩田先生と雨井ちゃん」なかとかくみこ

- 新刊ポッコ泣きました。まるごと一冊過去編で、二人の過去から現在に至るまでが丁寧に描かれています。思っていたよりだいぶ辛かった。許せない奴が多過ぎる。

金海堂イオン単人国分店コミック担当 / 園田美智子

「しかし火事獅子歌詞可視化」問松居間

- 歌詞の内容が現実可視化される不思議な現象を軸としたオムニバス。バラバラな各話がパズルのように組み合わさって、心温まる奇跡の群像劇に。やさしさが世界を満たしていく。

朝日新聞記者 / 小原篤

「司書正」丸山薫

- 巻二、より陰謀が渦巻いてきました。そして謎も、ちょっと解明されかけたように見えて、より深まってきました。通りすがりの何気ないキャラクターの、「宮中ではね お喋りは長生きできないのよ」という台詞が全てを物語っていて恐ろしい。一方で、主人公の少女キビが別の生き物に『入る』能力の描写などは幻想的で、ドロドロとした群像劇と、美しいファンタジーのバランスがとてもよいです。緻密に描き込まれた衣装や背景など、絵も綺麗で読み応えがあります。

主婦 / 堀江千秋

「室外機室 ちよめ短編集」ちよめ

- 1巻モノの短編集ですが、ここ最近では最高傑作だと推しの1冊。表紙の書き込みから目を奪われたが、始まりから終わりまで、繋がっていないようで実は繋がっていて、短編集で物語は違うけど最後まで一貫していて、そして伏線的なものを回収。素晴らしい出来だと思います。これが商業デビュー作というのも驚き。完成された珠玉の1品。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西 良昌

- 全4編の短編集。読者を日常から非日常の世界へとシームレスに移行させていく話運びのうまさに思わず唸ってしまいました。短いながらも切り口の面白さと捻りが効いたストーリーはとても読み応えがあり、時にハラハラさせられつつも最後には温かい気持ちになれるような着地点が用意されていて読後感がとても良い作品です。

会社員 / 小野塚博之

- 商業誌の作品が、キャラクターの魅力に依拠した連載形式に片寄りつつある昨今、短編ならではの切れ味の鋭い作品も表現の幅としてけして失われて欲しくない。本作は短編集の形で、一篇毎にアイデアを凝らした多彩な作品を収め、短編を読む愉楽を読者に存分に味わせてくれる。注目の才能である。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

- 長編の序曲になりそうな短編から、切り口が鮮やかなものなど、合計4編が収められた短編集だけど、読後感はそれぞれが長編級。

鳥取県立図書館 / 野間勤

「自転車屋さんの高橋くん」松虫あられ

- 今、続きをとっても楽しみにして読んでいる本です。色々な場面で、どうなるのか、と、ソワソワしています。ハッピーになって欲しいなあ…………。

書店員 / 桶谷佳代

「シバつき物件」大森えす

- シバちゃんたちがとにかく可愛い。私もこんな物件だったら喜んで住みたいです。(溺愛するからすぐ成仏してしまいそうですが)

デザイナー / 玉澤綾子

「じゃあ、あんたが作ってみろよ」谷口菜津子

- ご飯をつくる女に、食べながら意見をいう男が捨てられるところから始まるけど…どんどん話が進むと登場人物のいろんな一面が見えてきて多方面に共感しました

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 男尊女卑の古臭い男が、彼女に振られたことからいろんな料理に挑戦し、目覚めて変わっていく—という枠組みを大きくはみ出し、主人公の踏み出す一歩が周囲の人たちを揺さぶるドラマチックな展開。男女の機微、男らしさ / 女らしさの呪縛を織り込む手さばきも鮮やか。作者の新境地と言えるのでは。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 「海老原勝男の物語は、私自身に対する警告のようなところがある」という一文で始まる谷口先生の後書きに、この作品の魅力が表れていると感じます。時代の変化に取り残されてしまった主人公・勝男を単なる悪役として描くのではなく、「もし自分だったら」と考えるところから生まれた物語。だからこそ読み手も勝男の変化や成長がだんだん愛おしいものになっていくのかもしれない。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 古風な考え方をもち主人公が振られたことをきっかけに、他人を知り自分の変革にチャレンジする物語。その姿をコミカルにリズミカルに描かれてるのがとてもよいし、自分の戒めにもなりました。自分を省みることができるあなたはかっこいい。と主人公がいわれるのですが、ほんとにその通りと思いました。今の時代に合ってると思います。すべての人に読んでもらいたい漫画です。

会社員 / 廣瀬公将

「獣王と薬草」坂野旭、良田竜和、ももちち

- 物語りの設定自体はもはや目新しくもないと思いつつ、斜に構えながら読むと… 純粋に面白い。続きが気になって仕方がない作品である。本当にヤラれました。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス 営業企画マネージャー / 阿部大介

「祝福のチェスカ」乃原美隆

- まだたった1巻とは思えない程の読み応えあるファンタジー。神から与えられた超能力、ルアを持つ者と持たざる者。持たざる者はヤグーと呼ばれ差別を受ける世界。舞台は世界中の王族・為政者の子供たちが通う学園。言語学の天才・チェスカとヤグーの王子シキが出会い、ある日をきっかけとして世界のルールが覆るのがこの物語の始まりです。この学園では生徒会メンバーは最も高貴な身分の生徒から選出され、彼らが新たな校則を決める会議は『王族会議』と呼ばれ、1巻は主にこの会議でのやり取りが描かれます。言葉も慣習も、それぞれの思惑も異なる登場人物たちの探り合うようなやり取りにわくわくします。良いところで次巻への引きとなっているので続きをととても楽しみにしています。

会社員 / 津田圭

「呪文よ世界を覆せ」ニコ・ニコルソン

- 「ただごと歌」を詠み続けている奥村晃作先生の「中年のハゲの男が立ち上がり大太鼓打つ体力で打つ」が引用されてるだけで、個人的には1票決定なのですが、万葉集や百人一首などの和歌ならともかく、短歌をこんな風に扱ってるマンガをあまり知らず、これを読んで短歌に限らず、そのほかの詩歌にも興味もってくれるとうれしいなあという思いも込めて1票投じます。

鳥取県立図書館 / 野間勤

「湘南爆走族 ファースト フラッグ」吉田聡

- 格好良い。湘南爆走族を読んだときは、良く理解していないで読んでいたなあ、と、ファーストフラッグを読むと感じたりしながら読んでいます。格好良くて、ワクワクして読んでいます。

書店員 / 桶谷佳代

「成仏させてよ！」百地元

- ヤンキー×お坊さんモノは数あれど、この作者の取材力と執筆力は凄い！「お坊さん」を単なるアイテムとして使わず、仏の教えや雲水さんたちの生活をしっかりと描いているので、普段マンガを読まないような方々にも読んで欲しいなと思います。

ゲーム会社勤務 / 畑中瀬路奈

「女子高生除霊師アカネ！」大武政夫

- 靈感無いのに生活の為に除霊師の仕事をする事になった女子高生アカネのお話。詐欺に使用されるテクニックを活かし、騙すだけではなく依頼者の心をちゃんと救うギャグ漫画となっており、大武先生の作品はいつも期待値を超えてきます。アカネの最低な父親の最低なアドバイスが何だかんだで役に立っており、正しい綺麗事だけでは物事を解決させたり、人の心を楽にする事ができないって現実を教えてくれるようです。話が進むにつれ、どんどん「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前」の九字切りが可笑しくなっていくのも最高です。

会社員 / ターシ

「しょせん他人事ですから ～とある弁護士の本音の仕事～」富士屋カツヒト、左藤真通、清水陽平

- 劇中、飼猫たちが言う、「人間は皆ウソをつき矛盾を抱えた生物であるらしい」との一言が深く刺さります。弁護士ものである本作劇中の、インターネットを介したトラブルの多くは、「なんでそんなこと書いたの？」ということばかり。でも、思い当たる方は少なくないはず。そんな時代を映したマンガです。

弁護士 / 三葛敦志

「炊くんの生きのびごはん」よしたに

- ストレスと暴食で身体を壊してしまった炊くんのヘルシー料理マンガ。エピソードがあるある過ぎて身につまされます。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

「スーパースターを唄って。」薄場圭

- 文字が視神経から脳を通して、心にストンと落ちた瞬間、ちょっと笑えて、直後に涙が止まらなくなる。そんな感情がコントロールできなくなる読書体験が2度だけあって、そのひとつが今年の最新刊でした。ステージの上から死ぬ気で歌ってくるマンガに、僕らはもう傍観者ではいられなくなる、キラキラした抜き身の美しい物語。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 理不尽や敵意、そういったものに対して怒り、戦う。伝えたいことが胸の内に、形にならずに溢れている。何者かになりたい。強い人間になりたい。そんな若かりし頃に持っていた情熱のようなものを思い起こさせてくれた作品。タフな世界に生きる登場人物の紡ぐ、作中のリリックには痺れました。おすすめです。是非ご一読を。

会社員 / 杉佳尚

- 底辺、貧困のなかから生まれる友情と、音楽。この世界観は昔より現代の日本では当たり前になってきているかもしれない。貧困や暴力、まさかの売人の主人公でスタートする何よりも「熱い」話に心がすぐに持っていかれる。

クラスター株式会社広報 / 西尾美里

- やるせない、救われない、到底ハッピーエンドになるとも思われない作品なのに、何故か行く末を見届けたい気持ちになる不思議な作品です。

会社員 / 林礼春

「スーパーの裏でヤニ吸うふたり」地主

■ はい、スーパーの裏で、店員さんとお客さんがタバコを吸うお話です。でも、その半径数メートルでは実は多くの方々の多くの生活があって、ドラマがあったりなかったりして、という当たり前の物語です。でも少しずつ進むロマンスがまた、よくて、です。

弁護士 / 三葛敦志

■ 優しい人たちが紡ぐ、優しい優しい物語。この作品の登場人物たちのように、優しい人間になりたいなあ。と、つい思ってしまう。わたしが誰かに薦めたい。そう強く思う作品。是非、一服してってください。

会社員 / 杉佳尚

「スクールバック」小野寺ころろ

■ こんな程よい距離感の、魅力的な人が自分の学生生活に居たら、どんなによかったろうか……と心底思ってしまう、用務員の伏見さんの温かな空気が読んでいて非常に心地よい。彼女に背中を押されたり支えられたりする生徒たちの成長は、年を食った自分にも響くものがあり、まさにスクール時代にバックしているかのような気持ちで、ホクホク読んでいます。

会社員 / 伊東敬祐

■ 親や先生ではない「用務員のお姉さん」という、少し距離のある大人の存在が物語の中心になっているのが新鮮で、その関係性がとても優しく描かれている作品。高校生たちが抱える悩みや葛藤は、一見小さなことに見えるけれど、本人たちにとっては本当に大きな問題で、その一つ一つを否定せず、ふんわりと寄り添う伏見さんの姿に、救われる気持ちになりました。作者の書いている別漫画の「保健の授業聞いてなかった奴」もとても好きです。応援しています。

会社員 / 三浦佑樹

■ ゆるゆるほわほわ、飄々とした用務員のお姉さんと、勤務先の高校の先生や生徒たちとの日常オムニバス。高校生たちから見たら大人だけど先生とは違う、少しだけ心を開いて打ち明けてもいいのか…？も…？という、絶妙な距離感。グイグイリードしたり感動的な台詞で悩みや困りごとを解決するわけではなく、ポンとただそこに置いてくれた温かい飲み物にホッとして少しの元気をもらって前に進めるかな？と思うような作品です。

元書店員 / 内野智未

「寿々木君のていねいな生活」ふじもとゆうき

■ 寿々木君の恋が是非成就してほしいと願わずにいられない！

会社員 / 林礼春

「スターウォーク」浅白優作

■ 遠未来で過酷な環境に置かれた人類の生き残りのサバイバルを描くハードSF。物語はまだこれからだが、海外SFばりの設定で普通に展開してきてびっくりさせられる。

ときどきライター / 縣丈弘

「ずっと青春ぽいですよ」矢寺圭太

■ とてもアホな連中で、良い。ずっと青春が続いてほしい。

イロイロ屋 / 杉本善徳

「全てのネガティブをプラスに変える夫 髭」B.B 軍曹

■ 発想の転換で日常生活を過ごす夫婦、髭(夫)と軍曹(妻)。軍曹の常識を髭の発想が覆す。読んでいて悩みが軽くなる、薬のような漫画です。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

「住みにごり」たかたけし

■ 汚いもの醜いものだからこそ無性に見たくなる。どうしても見たくなる。

PENICILLIN / HAKUEI

- 最初はサスペンス調の中に笑える話が多かったのですが、ストーリーが進むにつれ地獄の展開に、、、。それでもひと段落ついたかと思わせておいて、そこから更に地獄の展開へ、、、。最初読んだ時に「いや、続くんかい」「こっから本番なんかい」と思いましたよ。タイトルに偽り無しです。そして現在、日本が抱える色々な家族の問題を背負わされる主人公の姿。見てて辛くなる展開となり、より陰鬱な方向へ進むのかと思いきや、新たな登場人物・新たな方向へ向かわせるのは相変わらず流石です。ここ3年間でダントツでハマっている漫画です。

会社員 / ターシ

「正反対な君と僕」阿賀沢紅茶

- ありがちな分かりやすい「陰キャ」「陽キャ」の二元論ではなく、1人1人にそれぞれ違う個性があり、皆自分の性格に向き合いながら社会とすり合わせ、どう生きていくかを模索しているという当たり前のことを、明るく読みやすいラブコメティストを保ったまま描いている作者の力量に感服します。

丸善ジュンク堂書店・書店員 / 小磯洋

- 7巻はもはや東と平がメインを張っていてグイグイ引き込まれた。それぞれの抱えている問題は、まったく？み合うようなものに見えなかったが、一緒に過ごすうちに距離が自然と縮まり、じわりじわりと相手を変化させていく(変化してしまう)化学反応が鮮やかに描き出される。くだけたセリフの巧みさも一貫して魅力的。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 昨年完結のこちらも楽しかった。ラブに寄せた青春群像劇。キュートな作画だが、時に重い関係性への考察が。平と東が好きです。

ときどきライター / 縣丈弘

- ラジオの格言に、「しゃべり手はカメラである」というものがあります。同じ状況だったとしても、人によって、何に注目するかがまったく違う。例えば同じ本屋に行っても、私だったらマンガのコーナーが他の書店と違ったら気がつくでしょうし、料理の好きな人だったら料理本のラインナップに目が行くでしょう。連れて行くレポーターが違ったら、放送にのる言葉は全く違ったものになるわけです。この作品で描かれる高校生の恋愛模様は、ある意味とてもよくあるいきさつ。しかし、その中で、ものごとをクローズアップするオリジナリティが凄すぎる！！第34話の、クリスマスと初キスのエピソードの中に、生クリーム の値段に驚く描写とか、愛しみがあまりすぎて、も、泣けてくる。

ニッポン放送 / 吉田尚記

「せせせせ！～目指せ初H！童貞女子のときめき大作戦～」たばよう

- あまりに王道、まっとうすぎる青春と自意識のこじれ、コミュニケーションと孤独のお話。この話を描くためのシチュエーションがコレというのは、実のところ現在のわれわれの知覚している現実に誠実に向き合った結果なのではないでしょうか。

会社員 / 末永龍介

「全部救ってやる」常喜寝太郎

- 動物保護の話。今ではペットショップではなく、保護猫などから新しい家族を迎えるご家庭も増えていると思います。私もいつか動物を飼う時はそういうところからお迎えしたいと考えています。ですが、どういう場所からどういう状態でどうやって保護しているのか、里親が決まるまでどうしているのか、保健所に連れて行かれた動物はどうなるのか、など、知らないことがたくさんありました。他にも街で見かける動物と募金や、ペットショップでの販売の仕方など、知らなかったことだらけ。もちろんいろんな意見があると思うので、私はそうは思わないとか、うちのペットショップは違うなどもあると思いますが、先生が取材してその目で見た現実が描かれています。リアルなので人によっては読むのが辛いかもしれませんが、命を簡単に買って簡単に捨てられるこの日本で、たくさんの人に知ってほしい、読んでほしいと思いました。「全部救う」ことはできないかもしれない、できたとしてもいつになるかわからない。それでも「全部救ってやる」という気持ちで動いている主人公や、きっと同じ気持ちで描いている常喜先生の漫画を見てほしい。そして、これを面白いと言っているのかわかりませんが、漫画としてとても面白かったので勧めたいです。

声優 / 富岡美沙子

- 動物保護と、いっても、リアルな現状はあまり知られていないと思います、ペットに対してまだまだ先進国になりきれていない日本に、一石を投じる作品だと思います、読者が増えて、ペット問題を考えるきっかけになったらと思いました

tetote 代表 / カ丸 真

「ソアラと魔物の家」山地ひでのり

- 魔物ための家を作っていくという今までにない切り口で進むストーリーは、動きのある迫力ある描写で書かれていて、読んで無い方には読んで欲しい作品です

tetote 代表 / カ丸 真

「そぞろ各地探訪 panpanya 旅行記集成」panpanya

- まるで理想郷のような漫画。panpanya さん自身による装丁というのにも驚きですが、それも頷ける仕様。これはどこにも頼めないよな…というくらいに、あまりにもスペシャルすぎます。そのアイデアと、その視点に、ぞくぞくするような、くらくらするような…。こればかりは、手に取らなければわからないってやつです。まるで panpanya さん自身であるかのような、1冊の漫画。そして読み進めてみれば、内容の面白さが脳天を突き抜けます。たくさんのインスピレーションを、いつも具現化してのける panpanya さん。どんな目で世界を見ているのか、その目で世界を見せてほしい！と思います。そして、それを作品としてシェアしてくれている。いつも心を震わせてくれて、ありがとうございます。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

「宙に参る」肋骨凹介

- とても緻密な SF 設定、可愛い絵柄、そして軽妙なセリフの組み合わせが本当に絶妙で最高です。ストーリーも捻りが効いていて面白く、何度も読み返してしまいます。情報量(文字数)も多く読み応えも抜群！巻を追うごとに核心に迫る展開を見せてきており、続きが楽しみでなりません！

会社員 / 小野塚博之

「大正學生愛妻家」粥川すず

- 大正ロマン溺愛系を好むならこれがおすすめ。女中とエリート学生の身分差婚。お互いをいたわりあう気持ち。非常に尊し。

NIC リテールズ(株)書籍仕入部 / 池本 美和

「だいすき！いとしのムーコ」みずしな 孝之

- ムーコが帰ってきた！おかえり！新しい仲間も増えてますますラブリーなムーコの毎日がまた読んで嬉しいです！普段の生活に忙殺されて忘れがちな、日本の四季の移り変わりの美しさを思い出させてくれるのもムーコの世界。読めばいつでもホッとひと息つける、現代に必要な癒しの作品です。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

「ダイヤモンドの功罪」平井大橋

- 令和の斬新なスポ根。自分の才能に自分の精神が追いつかない時、人は傲慢になるのかと思っていたが、それは人によるらしい。ただ、天才の気遣いは時に傲慢よりも人を傷つけてしまう。主人公の綾瀬川の存在はまさにタイトル通り。天才の葛藤も細かく描いてあるが、凡人サイドの心理描写も丁寧で非常に感情移入しやすい。

スターダストプロモーション・アイドル / 秋本帆華

- できる子がさらに努力もしたら手がつけられないでしょう。同じ世代に、同じチームにいる、どうやっても叶わない存在。もしかしたら、それは今でいう大谷翔平なのかもしれない。楽しいだけではない現実をどう受け止めるのか。誰も悪くない、ただ、できることが罪のようで納得できない、それも悲劇なのか。毎巻読んで胸が痛い。

俳優 / ジェネラリスト / 大倉照結

- 主人公が最初から才能に恵まれすぎているのに、そこに特に初期は価値を見出していなかったためスポーツマンガには珍しいタイプの苦悩も見えるのが面白い。そこに加えて友人、対戦相手たちのほうに共感してしまう部分もあったりして、どの目線でも楽しめる。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

「大乱 関ヶ原」宮下英樹

- 誰もが知る関ヶ原合戦の結果が必然ではなかったこと、いろいろな人間模様やそのときの偶然の積み重ねであったこと、そして歴史とはそういうものであるということが感じられます。「神君家康公」が聖人君子とは程遠い、しかし極めて優れた政治家であることとか、歴史ファンにはたまりません。

弁護士 / 三葛敦志

「Daddy Steady Go!」シマ・シンヤ

- メインキャラクターは、3人のシングルファーザーたち。高校時代からの付き合いの彼らが、娘・息子のために奮闘する姿が軽やかに、賑やかに描かれている。子供と向き合いながら、自分自身とも向き合っていく。自らの中の父親像や、プライド、人生観。青春時代から歳を重ねるにつれて変化していくそれに真摯に向き合う彼らの姿は、とてもかっこいい。男の成長物語であり、ほのぼのの日常作品でもある。誰かに薦めたくなる一冊でした。是非。

会社員 / 杉佳尚

「タテの国」田中空

- 縦読みをこんなに活かしている縦読み漫画見たことない！下へ下へとスクロールする楽しさがあります。お話はかなり濃厚なSF。なのに普段SFを読んでいなくても読みやすい不思議な漫画。ぜひ縦読みできる漫画アプリで読んでみてください。マジでとにかく読んで。そして書籍版は田中先生自ら横読みを描き直してAmazon限定で発売中なのでそちらもぜひ！

声優 / 富岡美沙子

「偶偶放浪記」小指

- 前編手書きの文字と絵でつづられる放浪の記録。近くて遠いまちを活写する手つきはもはや現代の山頭火。才能しかない！

作家 / 海猫沢めろん

「たまのののののちゃん」いしいひさいち

- どれを読んでも面白い。すべての登場人物にキャラが立ってる。いしいひさいちって天才だと思うんですよ。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

「たまらないのは恋なのか」空華みあ

- 別冊フレンドで、BL??! と思って、読んでみたら大変面白くて、優等生の北原さんとヤンキーの美澄くんのお話しなのですが、美澄くんのピュアさが最高に可愛いです。

株式会社アニメイト / 鈴木寛子

「たまわりの月」界賀邑里

- 美しいモノクロの世界で描かれる因習村系ホラーにググっと引き込まれます。トリッキーでアクティブな化け物が出てくるのではなく、ドロドロとした「念」や「人の想い」のようなものが淡々と出てきますが、全体的に仄暗い世界観と相まってめちゃ怖い！洗髪中や夜中に目が覚めた時に思い出してドキッとするような正統派ホラー。

ゲーム会社勤務 / 畑中瀬路奈

「太郎と TARO」大白小蟹

- 値段が高いのでこの賞に推すのはためらいもあるが、個人的に昨年のベストワン。西島大介「ディエンピエンフー」や今日マチ子「いちご戦争」などの系譜に連なる寓意的戦争マンガの最高傑作ではないか。2冊組の本でなければ成立しない仕掛けにも感動します。これを出したリイド社は偉い。

読売新聞文化部 / 石田汗太

「タワーダンジョン」 式瓶 勉

- ファンタジーで RPG な世界観のある物語。ダンジョンという設定が RPG 感を強くさせているのでしょうか。絵も多くが白と黒で描かれたシンプルでありながら

芸人 / ムーディ勝山

- 今回の作品はどの式瓶先生が描かれてるんだろうか、と失礼な想像があたまに浮かんだ。メガストラクチャー、東亜重工製フォントなど、式瓶先生流のスターシステム的は健全なのに、絵柄、ユーモア、キャラクター性などなど、これまでのどの作品とも違うテイストで紡がれていることに（毎度のことながら）驚かされる。「王女を救いに巨大ダンジョンを攻略する」というたいへんシンプルで王道 RPG っぽい目的が、やっぱり誰も読んだことがないマンガになる式瓶先生ワールド。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 王道ダンジョンファンタジーでここまで読み進める手が止まらなくなってしまうのは初めてです！力持ちの主人公の秘密もだんだんと明かされてきて続刊が待ち遠しい…！倒すべき敵、人間の悪意、出てくるモンスターがゾッとするほど怖いです。ただのファンタジーでは収まらない。ダンジョンの造形も素晴らしく、セリフの無い風景のコマから空気感が伝わってきそうです。リリセン大好き。

会社員 / 竹本慧

「だんどーん」 泰三子

- 「ハコヅメ」の泰三子先生の歴史愛が炸裂。4巻の桜田門外の変のシーンは、これまで丁寧に描かれた両陣営の人間関係と利害が炸裂し、ただただ圧倒されました。幕末史としてはまだ序盤なのにこの見せ場の密度、この先どうなるのかワクワクします。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 後に日本警察の父となる川路利良を主役に幕末の動乱を描く。コメディタッチの中に前作『ハコヅメ』にも散見された人間性への達観が描かれており、時に戦慄させられる。

ときどきライター / 縣丈弘

「ちはやふる plus きみがため」 末次由紀

- 『ちはやふる』の続編にあたる作品です。キャプテンが後輩の花野堇になり、新体制の瑞沢高校の物語。各登場人物それぞれに問題を抱えています。競技かるたのそのものの魅力も勿論ですが、かるた部を通して、登場人物たちを介して成長していくストーリーがやはりおもしろい。【ちはやふる】という偉大な作品の続編ということで、ドキドキして読み始めましたが、さすが受け継ぐ作品としても違う作品としてもここから期待できます。（前作の登場人物が少し大人になって登場するのも嬉しいポイント！）

図案家 / 橋本 寛子

「超巡！超条先輩」 沼駿

- 交番が舞台で、型破りなお巡りさんが巻き起こすドタバタコメディというジャンプでは絶対にやりづらはずの素材なのに、沼先生ならではの圧倒的なテクニックで、「3話目くらいから何故かもうすでにずっとジャンプに居る長寿ギャグマンガみたいな存在感」という恐ろしいまでの安定感を持った作品になっています。ダメ人間超能力者お巡りさん、フィジカルお化けの真面目相棒、ロボ、とレギュラーだけでも濃い味の組み合わせなのに加え、クレイジーながら愛嬌のあるキャラクター達が無限にポップしてくるため、時に人情味あふれるエピソードを挟みながらもマンネリ知らずの笑いが毎回押し寄せます。ハラハラドキドキの限界バトル……ではない側の看板マンガの風格漂う作品です。

株式会社ムービック / 岡部 真矢

「血を這う亡国の王女」 我妻幸

- 世界観と絵が好きな作品。生き残っていた王女の戦う姿とそれを助ける戦士の関係も今後気になります。序盤からの脱走するまでの展開は息をのんで読むことができます。

デザイナー / 平沼寛史

「作りたい女と食べたい女」ゆざきさかおみ

- 女性同士の恋愛を描いている漫画で、かつタイトルからも第一印象はごはん漫画かな？となりがちな作品。確かに主人公ふたりの恋愛にほっこりして、登場するメニューは美味しそうな作品なのですが、女性同士の恋愛に留まらない人間関係で大事にしたいことを、丁寧に、昔の価値観から今の価値観へアップデートするように描いている作品であると思います。この作品を読むと、自分はちゃんと周囲の人を大事に出来ているかな？と振り返りつつ、より大事にしたいくなります。

会社員 / 津田圭

「冷たくて柔らか」ウオズミアミ

- 「堕ちてもいいなあ、地獄。だからちゃんと一緒なら」。うっとりするくらい流麗で表情豊かな絵がとにかく魅力の作品。ミドルエイジに差しかかる手前の女性2人（元同級生同士）の、友情とも恋愛ともいえない関係、その感情の揺れを描く。既刊4巻。主人公が抱える背徳感、というか自制心のようなものが少しずつ溶け始め、それにつれて恋情が燃え上がる。相手を大切に思う気持ち、それを踏まえて自分らしさを押し殺さないという決意めいた心情は相手の性別を問わないとはいえ、一線を越える予感をはらんで物語は進む。思いつめた瞳と紅潮した？、おしゃれなファッションや小物、風景描写など、丁寧にきれいなタッチが蠱惑的で、ストーリーにどっぷり没頭させてくれる大人の恋愛マンガ。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

「つらねこ」熊倉隆敏

- もっけやネクログなど日本や中国の怪異を描くことに定評のある熊倉氏の新作。土地の安定や豊作と引き換えにご神木に紐付けられ、町の外に出られない少女が同じ悩みを持つ友人を助けたい民俗学者の助けを得て「ネ」の国を抜けることによって様々な場所に出ることになるが……という東洋ファンタジーと現代が融合した冒険譚。独特の雰囲気と話運びに少々の不穏さを感じつつも一気に作品世界に引き込む様は圧巻。

住職兼ライター / 蟬丸P

「天狗の台所」田中相

- 天狗の末裔のお話し。でも家族の話し。ホッコリと、じーんと暖かく涙が出てくるそしてなにより絵が美しいのと、ご飯が美味しそう！話の中にあるレシピをあまりにも美味しそうなので実践したほど

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

「天幕のジャードゥーガル」トマトスープ

- 既に前回ノミネートした人気作ですが、中世ユーラシアの世界、権謀術数を駆使する主人公の女性の物語は巻数を重ねるごとにぐいぐいと引き込まれます。歴史好きは黙って読むべし。

サブカルライター / 河村鳴紘

- ずっと連載を追っていたのだけど物語も盛り上がり、話が混乱してきたのでまとめて購入して読んだが、本当に心や状況の変化が細かく描写されていますのめり込んでしまう。ポスト横山光輝はこの人しかいないと思う

鳥取県立高等学校教諭 / 佐川 由加理

- モンゴル帝国が世界最大の版図を拡大しつつある苛烈な時代。育った街をモンゴルに滅ぼされ奴隷として生きる少女が主人公です。非力な主人公は力が支配するモンゴル帝国の中で知恵を武器に逞しく生き抜いて行きます。その姿は学ぶ時間が充分にある頃にはなかなか気が付けなかった、「知恵は自分の未来の選択肢を広げ、人生を豊かにするきっかけをくれる。」ということをおしえてくれます。自信をもってすべての人におすすめできるマンガです。自由に学べるということはとても幸せなことなのです。

会社員 / 廣瀬公将

- 知らないことがこの地上にはある、と思わせてくれる文化人類学的な興味で読み始めたこの作品、4巻まで進んでも変わりなく、草原の民、モンゴルの寛容と苛烈さと様々なルーツが入り交じった文化がどのように現れていたかを、シンプルだからこそ特徴を捉えた絵柄で表現されています。しかし、巻が重なって、いまこの作品の本質は政治劇。かなり科学的な天文学の知恵から化学と呪術の間にあるような錬金術も、政治的な文脈の中に位置づけられている。「頭身の低いかわいいキャラクターの方が人を傷つけられる」とは作者のトマトスープさんの言葉ですが、このキャラクターこそ、重厚な政治劇を最大限に活かしています。

ニッポン放送 / 吉田尚記

「峠鬼」鶴淵けんじ

- 何度もここに書いているが、この作品が一度も候補にならないのはもったいないとしか言いようがない。5年で7巻というスローペースも評価されにくい要因か。絵柄のチラ見では想像しにくいと思うが、特に「SF好き」に強くお勧めしたい。絶対びっくりするから。

読売新聞文化部 / 石田汗太

「同志少女よ、敵を撃て」鎌谷悠希、逢坂冬馬、速水螺旋人

- 漫画家さん買いでしたがやはり期待を裏切らないキャラデザの麗しさ・・・！中身はかなり重厚な話なのでそのギャップがまた素敵です。原作小説含め、確実に今読む価値のある作品なんだなと。眼をかつびらいて、この厳しい世界の行く末を見届けられたらと思います。

フリーランス / 金輪英恵

「ドッグスレッド」野田サトル

- 実際のインハイでは、総合的にみると北海道勢が層が厚くて強いんだども、東日本大震災の頃、八戸工大一高が強かったあたりの設定で八戸も舞台のひとつにしてくれて、本当にありがてじゃ。東北フリーブレイズもあるすけな！アニメ化の暁には、ぜひ主題歌はNOT WONK、エンディングはandropにしてけるじゃー。

会社員 / やのこうじ

- もう1話目から凄く面白い！！！！キャラが立ち過ぎてる！！アイスホッケーが分からなくても、アイスホッケー初心者である主人公目線でスムーズに読む事が出来ます。どこかで見た事あるようなキャラが出ているのも嬉しい。

主婦 / 岸本しのぶ

「ドラゴン養ってください」東裏友希、牧瀬初雲

- 第1話冒頭での主人公の叫びこそが本作の根幹！そう、ドラゴンはこうでなくてははいけない！（意識の上では）理想と現実が織りなすギャップをさらに日常が侵食していく楽しいコメディ。

会社員 / やのこうじ

- ドラゴンがかわいい！！ドラゴンが居候するんですが、なんとも人間味溢れるニートのような発想のドラゴンでちょっと、ぽっちゃりしていてかわいすぎます

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 「養ってください」から始まる野良ドラゴン共同生活。ドラゴンのイルセラはツッコミどころ満載。ドラゴンなのに高いとこ苦手だったり、ちょっと見栄っ張りや、体を小さく維持する魔法をサバ読んで、堪えきれず道端で元の大きさに戻ったり…ドラゴンなのになんか後一歩足りないところがかわいい…主人公村上もまた趣味趣向や、ちょっと斜め上から目線なのがいい。何事にも動揺せず、冷静に、正すようにツッコむところがまた面白い。

元 SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

「泥の国」山田はまち

- 転生ものだけど設定が面白く、続きが気になりすぎます。純粹にお互い元に戻る事が果たして良いのか、読んだ後にいろいろと考えました。

デザイナー / 玉澤綾子

「ニセモノの錬金術師」うめ丸、杉浦次郎

- いきなり人身売買から始まる転生ファンタジー。エルフとか魔人とか、定番の登場人物が出てくるが、何か新しい感覚のある作品。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

「ニッターズハイ！」猫田ゆかり

- 男子校手芸部のお話です。ごく小さいサークルから、少しずつ友達の友達の友人の輪を広げていくところが、とても丁寧に描かれていて「新春期部活物」漫画のなかでも出色の作品だと思います。ちょうどわたしも編み物に興味が出て、amazonで編み物の教本を探しているうちに、おすすめにあがってきたのでタイムリーでした。

教員 / 戸田穠

「日本三國」松木いっか

- ここ数年ずっと1番面白いと思って読んでいる漫画です。先を予想できないストーリー展開に驚かされるし、煩わしく嫌なヤツの意外な面見えてきたり、キャラクターの面白みもどんどん出てきていて最高です。ぜひ大賞とってほしい漫画！

OKAMOTO' S / オカモトショウ

- 1巻から推してます！これからも予想を斜め上に超える熱い展開に期待しています！

カンフェティ / 小森和博

- 4巻で終わった「輪島桜虎」編があまりに面白かったのでその後を心配したが、6巻で登場した「九羅珀亜」にまたも驚づかみにされた。クセのある画風とセリフ回しで人を選ぶと思うが、一度ハマると全てが快感に転じる。ところで主人公は誰だっけ？

読売新聞文化部 / 石田汗太

「ニンゲンの飼い方」ぴえ太

- 魔獣、魔人が住む異世界に放り出された「ニンゲン」を魔人が飼う話。魔人視点と人間視点があってお互いの認識の齟齬や、言葉が通じなくても伝わるものが絶妙に描かれています。何よりもめっちゃくちゃ細かく設定された「ニンゲンの飼い方」ノウハウが面白い！犬や猫、人間が飼っている動物たちもこんな風に考えているのかも？と想像してしまいます。

元書店員 / 内野智未

「猫が4匹いる暮らし」カワサキカオリ

- 猫と暮らす著書を描いたエッセイコミック。新入り猫も入りました。病気やケガなどありますが楽しい日常が描かれています。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

「ねずみの初恋」大瀬戸陸

- 恋というのは交通事故のようなもので、不意に避けられず、見舞われるものだ。それなりの運動量をもった質量同士がぶつかり合い、熱に代わり、空に消える。色々なものがバラバラにちぎれ飛んでキラキラと光ったりして綺麗だったりもする。それを見たものはこういうしかない「あ～あ、ありゃ助からねえな…」そういう初恋マンガ。致命的。助からない。

ソフトウェアエンジニア / 第式齋藤

- このようなある意味殺伐とした作品がメジャー誌に普通に掲載され、それが普通に人気作品になっているところが、2020年代の日本社会が抱える困難さを象徴しているように思う。丸っこくてかわいらしい10代女子が闇社会に殺戮マシンとして育てられ、という「なさそうで、なし」な設定とわかっていても、鬱展開にからめ取られるように読み続けざるを得ないアリ地獄的な吸引力が、かつての「ウシジマくん」などの「ありそうで、あり」ゆえにドライ、なのでどこかエンタメとして安心して読めるというタイプのマンガとは違う。これくらいでないともはや「恋」に現実味を感じることはできないのかもしれない。マンガは社会の鏡。分断が進んで誰にとっても他人の命が軽くなった世の中の状況を下敷きに、凄惨で容赦ない殺人と暴力を描きながらも「小さな恋のメロディー」みたいな純愛を投入していちの希望をうかがわせる（でもバッドエンドっぽい予感）。普通にラブストーリーを提示できなくなった時代の、祈りのようなラブストーリー。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 殺し屋として育てられた機械のような少女が、無垢な少年と出会って純粋な恋心を抱く物語。恋を知り、普通の生活を望んでも、殺し屋の宿命と輪廻からは逃れられない…。きらきらした日常と、命のやり取りの緊迫感のギャップに引き込まれます。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

「寝坊する男」阿黒巧熙

■『寝坊する男』は、ジャンプ+で連載されていたユニークなバトル漫画です。主人公は高校生ですが、毎朝学校に遅刻してきます。実は彼は毎朝晩、幽霊と戦っています。学校に行く前に幽霊とバトルしてるせいで遅刻するという、一見ギャグ寄りの漫画です。しかしながらクラシカルなジャンプテイストを引き継いで、徐々にシリアスめな展開に発展してゆきます。コミカルとシリアスの絶妙なバランス。昼間の学校生活では学園ものなシーンが満載、しかし一転して緊迫したバトルシーンが展開されます。このギャップが面白く、オーソドックスな王道漫画です。『寝坊する男』は、遅刻常習犯の裏に隠された壮絶な戦いと、そのギャップを楽しめる作品。日常と非日常が交錯するこの世界観がおすすめできると思い推薦させていただきました。

会社員 / 佐藤優

「の、ような。」麻生海

■とにかく読んで欲しい。そして、コマの余白から漂う空気感を感じて欲しい。「の、ような」の前には色々な形容詞が付けられる。それは、「家族 の、ような」「兄弟 の、ような」「友人 の、ような」もしかしたら、すぐ隣にあるようなちょっとした日常の機微をすごく優しく取り上げているのかもしれないと思います。

俳優 / ジェネラリスト / 大倉照結

「のあ先輩はともだち。」あきやまえんま

■もはやともだちじゃなくエネミーだろ……というレベルの恐ろしい先輩。かわいいから許す。まじでぼくのいえにもきてください。

作家 / 海猫沢めろん

「脳梁ドッグファイト」常盤魚

■左脳と右脳のせめぎ合い、男女の視点のすれ違いをうまく使って、思春期のラブコメから、育児、そして、高齢者になるまでを、いろいろな視点から描いてくれるので飽きがこない。あっという間の2巻読了です。

鳥取県立図書館 / 野間勤

「バーサス」あずま京太郎、ONE、bose

■まだこんな設定があったのか！と思わず唸りました。素晴らしすぎるし、ちゃんと無茶苦茶面白い。原作、漫画、構成、それぞれ才能がある人が揃うとこんなにも面白い漫画が生まれるのですね。感動！

芸人 / ムーディ勝山

■ワンパンマン原作者が原作の異世界物。設定が意外で面白い！！緊張感が続くストーリーの中に笑わせてくるコマを入れてくるのも上手い。絵柄も凄くカッコ良くて読みやすいのでオススメです。

主婦 / 岸本しのぶ

■発想がむちゃくちゃおもしろい！魔王に滅ぼされる寸前の世界が、同じように天敵から逃れる別世界と繋がってしまう物語。純粋に勝つ！ではなく、敵わないから天敵には天敵をぶつけよう！という無謀な発想で勝ちパターンを見出していくところも魅力的。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

■様々な世界の人類 VS 悪の構図が全部集合。誰が強いのかまったくわからん感じですが、各世界の天敵同士がぶつかるのも新鮮で面白い。正義の種類も多様で飽きさせない展開が非常にたのしい。

デザイナー / 平沼寛史

「胚培養士ミズイロ～不妊治療のスペシャリスト～」おかざき真里

■不妊治療の現場で働くスペシャリストたち。ここ数年で法律も変わり、ますます不妊は医療の問題と密接になっていることをこのマンガは深く掘り下げてくれている。知ること夫婦のありかたも学ばせてくれる貴重なエピソードが満載で、終わりのないゴールをどうするのか益々興味が出てくる。

October Beast 代表・デザイナー / 北山友之

「ハヴィラ戦記」みのすけ、町健次郎、西村奈美子

- 人間が管理する保護区で、絶滅を防ぐために交配する“つがい”を決められている小さな人型の「蝶人」を題材にした作品で、設定が新しい。優しい雰囲気の色紙からは全く想像できない、残酷な世界観の中で本当の自由や愛を求めて必死に生き、葛藤する蝶人たちの姿には思わず感情移入させられる。とりわけ、“つがい”という人間が決めたシステムの中で、自らのつがいであるマイへの想いを押し付けることなく、マイの幸せを願う主人公忍野の想いには心が締め付けられた。

弁護士 / 田邊幸太郎

- ヤンジャン連載で今楽しみにしている作品のひとつ。人間から保護される存在からの脱却を目指す蝶人(ハヴィラッチュ)たちの姿を描く。素朴で可愛い絵柄と、「つがい」として管理される男女、一筋縄ではいかない集団間の争いなど、ハードな世界観のギャップに魅力を感じます。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

「はかばなし」原克玄

- 死んだ後、二代目閻魔様の前で人生で一番エロかった話をさせられて次の転生先が決まるというストーリー。但しエッチなおバカストーリーかと思いきや、ラストにその人物の本質や人生の目的を示すような、哲学的な締め方をするので、読んだ後は落語を見たような気持ちになりました。ドラマの「タイガー & ドラゴン」を観たことのある方ならハマるのではないかと思います。引退したのに頻繁に出てくる先代閻魔様がもの凄く好きですね。

会社員 / ターシ

「馬刺しが食べたい」桜井さよる

- 馬刺しの絵で大賞を取ってしまった女子高生と、彼女が描いたものしか食べられない偏食家男子をめぐるコメディ。悩みながらも前向きなキャラクター、彼らを取り巻く世界、ストーリーの全てが微笑ましい。

書評家・ライター / 福井健太

「8月31日のロングサマー」伊藤一角

- 8月31日をループする2人の男女の主人公。何か夏休みにやり残した未練があり繰り返している…。そんなどこにでもありそうなストーリーですが、この繰り返していくうちに、2人の関係がぐっと深まったり、縮まったり、離れたり、遠ざかったり。もどかしさを感じますが、構成とコマ割りとユーモラスとシリアスが絶妙。この巻数になってどんどんはまってる自分がいます。巻数的には今年が最後のチャンスということでおすすめします！

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西 良昌

- 終わらない夏、繰り返される日常。たわいも無い二人のやり取りが良い。長い夏の終わりが気になります。

教師 / 持丸 宏司

- 夏休みの最後の1日、8月31日をタイムループによって繰り返す羽目になった1組の高校生男女が、その1日を恋愛シミュレーションゲームのように「やり直す」ことによってだんだん距離を縮めていく。じれったいような、とぼけていて、でもドキドキするすれ違いが読みどころ。主人公男子の超がつく鈍感ぶり、かつ自意識過剰とそれゆえ女子に見せてしまう挙動不審がほぼ笑ましい(ややキモいが・笑)。でも「わかる」と心中うなづく読者は多からう。同じ構図のコマの繰り返しを多用するミニマルな演出も、2人の気持ちのわずかな変化や揺らぎをうまくすくい上げて効果的。モーニング連載、既刊6巻。中盤は脱線もあったが最新巻は急展開で、いまいちばん先が気になる局面です。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

「ぱちん娘。」若林稔弥

- ダメ人間は、かわいい。ダメであるほど、かわいい。

会社員 / 林 礼春

「バックホームブルース」長尾謙一郎

■「何だこの昭和感全開のポンコツ親父は」と最初は引き気味でしたが、主人公・柑二郎の魅力にどんどん引き込まれていきました。やることなすことめっちゃくちゃで次々トラブルを巻き起こすけれど、一切空気を読まずに「俺は俺だ！」と貫き通し、エネルギーに突っ走る姿には爽快感すらあります。もちろんただの暴走オヤジではなく、こと野球に対しては真剣そのもの。家族やチームメイトを大切に思う気持ちも本物です。ときおり見せる面倒臭い良さや熱い情熱に心を打たれます。子どもたちに見ればバカにされつつも、秘かに尊敬されているところも最高です。そして、やっぱり長尾先生の言語センスは天才的！気づけばシーガルス監督の「いいな～柑二郎は」という言葉に深くうなずいている自分です。

接遇スペシャリスト／ライター／田邊加奈

「はっちぼっちぱんち」嵯峨あき、カツラギゲンキ

■ほんわかした女子高生が格闘技の世界に入り、バトルジャンキーとして覚醒して血の争いを繰り広げる物語。とにかく主人公の狂気がすごい。強さを求めるのではなく、戦いの喜びを何より求めていて、その喜びの時間を延長するために強くなるところが狂っていてすき。

デザイナー・シンガーソングライター／平松新

「バッドベイビーは泣かない」鳥飼茜

■鳥飼先生の新作！この時代にここを描いてくれることに流石！と言わざるを得ません。始まりからどんな風に転がるか予想もできない怒涛のラッシュを喰らってノックダウンしています。早く続きを読ませて！！

OKAMOTO' S / オカモトシヨウ

「花四段といっしょ」増村十七

■主人公の花四段の活躍もうれしいのですが、妹弟子の朝顔と、彼女を取り巻く人々がまた面白くて愛おしくて好きになります。個性的で、少し変わって見える面々にも、それぞれ共感できるところがあるんですね。4巻では特に、朝顔ママの「パパや朝顔ちゃんの添え物じゃない」「ママになる前からの人生がずっとあるんだから」にはっとしました。身近な人にほど、つい軽んじた言葉や態度を取ってしまいがち。読んだあと、もっと人に優しくなろうと思えます。

主婦／堀江千秋

「薔薇村へようこそ」柴門ふみ

■柴門ふみさんは、バブルの時に流行りすぎていたから、過剰に流行作家として見られている気がする。個人的には、過去の実績とはまったく無関係に、リアリティのある描写と設定とセリフの上に、スリリングなストーリーを産み出し続けているとても実（じつ）のある作家さんだと思う。薔薇村、という東京から2時間離れたリゾートである村に様々な事情をもって越してきた人々を描くこのオムニバス作品も、30-70代の人間の抱える生活実感と、その人生の成り立ちが実は奇跡的で緊張感にあふれていることを語り尽くした上で、人間のダメさの向こうにある善性を描いた読後感がすばらしい。疲れているときも、調子に乗りすぎているときも、どちらにも効く万能薬。

ニッポン放送／吉田尚記

「パラレルリープ・シンドローム」タカハシノブユキ

■誰かに勧めたい、そしてこの作品が刺さる人に届いてほしいと個人的に強く思う。とにかく作風が大好き。絵も、舞台設定も、登場人物も、物語も。随所に散りばめられたパロディも小粋。つい作中に出てきた歌を流しながら読んでしまうほどに、作品にどっぷり浸かってしまいました。表紙を見てビビッときた方、是非ご一読を。

会社員／杉佳尚

「盤上のオリオン」新川直司

■新川先生が描く青春ものはとても心を打つ。感情や表情、苦悩や葛藤、喜びや悲しみ、挫折や再生。この表現が豊かで引き込まれる。自然と目が離せない、そんな作品。オリオンというタイトルの通り、キーとなる3人がライバルとなり活躍するのか、それとも……。期待の新作。

三省堂書店海老名店・コミック担当／近西 良昌

「犯人はあなたじゃなくて？ ～悪役令嬢の私は今日も第一容疑者として断罪されかける～」百々屋チハ、グルナ編集部

- 悪役令嬢転生モノのスタイルを採りながらも、キレの良いラブコメと謎解きを展開し、全篇を貫くプロットを鮮やかに着地させたミステリマンガの隠れた名作。著者はもっと注目されて活躍すべき、というかしないとおかしい。

書評家・ライター / 福井健太

「光が死んだ夏」モクモクれん

- 静かな物語の始まりから不穏な空気が徐々に高まり、やがて田舎の閉鎖的な村で繰り広げられる恐怖と謎に引き込まれていく作品です。単なるホラーやミステリーではなく、読んでいるうちに心の奥底で何かが引き寄せられるような不思議な感覚が襲ってきます。

株式会社エイミング マーケティングプロデューサー / 伊藤千恵

- 山で行方不明になった幼馴染の光が戻ってきたが、光ではない別の何かになっていた。主人公よしきの周りで起きる怪しい出来事。何か…。そうだ、「何か道をやってくる」だ。レイ・ブラッドベリやステイブン・キングのホラーを連想させる、怪しくも悲しいホラー。ストーリーの展開が読者を引き付ける作品である。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

「ヒツジ飼いの兄妹」Miyako Miiya

- ちょっと不思議な兄妹と、1話ごとに彼らとの繋がりが描かれる人物たちとの、温かく、そして時にキュッと胸が締められるようなエピソードの数々が、2冊の中に詰め込まれた良作。優しく可愛いタッチでありながら、黒の表現がとても深みがあって、長閑であり厳しくもある作品の世界に引き込まれました。手に取りやすい、おすすめの物語です。

会社員 / 伊東敬祐

「人の余命で青春するな」福山リョウコ

- 福山リョウコ先生の新作。まだ、余命の部分がミステリアスで判らないのですが、青春に飛び込み挑戦していくふたりをすごく応援したくなるマンガです。

株式会社アニメイト / 鈴木寛子

「ひねくれ騎士とふわふわ姫様 古城暮らしと小さなおうち」葵梅太郎

- 回帰者とか転生もの？的に思っていたら、そんなことはない人と要請が共存し合うファンタジーな童話のようなお話です。読まず嫌いではなく、人+妖精のお悩み解説の「困っていること」を解決することで進展する(?) ヒューマンラブストーリー。とにかく心が暖かくなります。

俳優 / ジェネラリスト / 大倉照結

「100年の経」赤井千歳

- コールドスリープ実験の被験者となり、100年間眠っていた小説家が目覚めた時代は、誰もが小説生成AIを手を借りて文学作品を生み出すことができる世界だった…。目覚めた世界で主人公はベストセラー作家となっていたことや、入眠前の時代に残してきてしまった恋人のことなど、さまざまに先が気になる魅力が仕込まれているのですが、作品自体がAIに対してフラットな目線で描かれていることにもおもしろさを感じました。実際、鈍感なふりをして生きていても、メール、検索、文章作成など、至るところにAIによって生み出されたものが急激に目につくようになりました。まさにAIとどう向き合っていくのか話題が尽きない今だからこそ、読んでほしいマンガです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

「ひらやすみ」真造圭伍

- ノスタルジーとか心象風景とか青春とか総動員。

PENICILLIN / HAKUEI

- もう8巻、今回が…すでに自分の中ではバイブル化されているので取る取らないは別として、こんなよい作品をもっと知ってもらいたい、読んでもらいたい、その一心で今回も推す！

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

「ファントムバスターズ」ネオショコ

- 個性が支え合う仕組みになっていて、協力する設定が面白い。素直な気持ちでまっすぐ読める作品

自営業者 / 小野裕子

- 幽霊を喰らって除霊をする少年が、新たに出会った仲間たちとなんやかんやすする話。絶妙に挟まれた笑いが好きで、疲れた時に読んでいます。アニメ化されるだろうなって感じの作品。

主婦 / 赤坂真実

「ブスなんて言わないで」とあるアラ子

- ルッキズムをいろんな目線からここまで真正面に描いた作品はないだろう。5巻になっても、こう来るかと唸らせられ、そして丁寧さを欠かせない。冷静な目線にえぐられる。

bar 図書室 / 岡部愛

「ふつつかな悪女ではございますが～雛宮蝶鼠とりかえ伝～」尾羊英、中村颯希、ゆき哉

- 面白い！続きが気になって気になってどんどん読めてしまいます。人のことはよく見えますが、実際入れ替わってみるといろんな事がわかるんですね・ハラハラもする話ですが、とてもキャラクターが、生き生きとしていて読んでいて楽しいです

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 玲琳と慧月のやりとりが最高で、ずっと笑っていられるが所々にみせる玲琳の孤独と、慧月の空回りの思いやりが心を打たれる。仲間が増えてきて、みんなで解決していく部分など本当にすっきりして、読んでて楽しく早く続きが読みたい作品です！

株式会社アニメイト / 鈴木寛子

「プリンタニア・ニッポン」迷子

- 1巻頃のかわいい生き物『プリンタニア・ニッポン』が動き回るSF(少しふしぎな)作品、という印象から、徐々に主人公達の住む世界がどんなディストピア世界かが明らかになり、かなり重厚なSF世界観が見えてきました。読めば読むほどもっとこの世界を知りたくなります。それはそれとしてプリンタニアがかわいくてかわいくてかわいい。

会社員 / 津田圭

「平成敗残兵☆すみれちゃん」里見U

- 「薄汚れた着せ恋」と友達に勧めたらひどい言い草だと言われたのに、読んだその子に「薄汚れたで済む？」と言われました。ヨゴレかと思いきや熱さを感じる…いやそんなことないかもしれない…とにかく面白い！！

声優 / 綾瀬有

- すしカルマの登場により圧倒的に面白くなってきた本作ですがリベンジものとしての現代的なリアリティとキャラ造形ネームのうまさやテンポ感などすべてのタイミングが合致してすしカルマ先生の魅力を引き出しています。しゅき。

作家 / 海猫沢めろん

- 元地下アイドルのすみれちゃんのダメっぷりの解像度が高く、めちゃくちゃ笑えます。いとこの雄星や芸能事務所の個性派キャラたちが物語に絶妙なスパイスをくれるのでまったく飽きないですね。「夢破れた人の再挑戦」という、文章だけで見ると熱いテーマがこんなに只者じゃないコメディに消化できるのかと感心しました。

会社員 / 三浦佑樹

- ヤンマガ連載なので男性向け漫画でありながら、グラビアを含めた性産業の描き方には女性視点を感じるので、抵抗感なく楽しめます(AV出演に葛藤するシーンでの「10回殴られて500万もらえるならやりますよね」というセリフのリアルさ…)。何より、すみれちゃん、すしカルマなど個性豊かな「問題のある」女子たちが魅力的すぎる！

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

「平和の国の島崎へ」瀬下猛、濱田轟天

■ 幼い頃中東に拉致され戦闘訓練を受け、中年となり帰国した主人公島崎は、しかし言葉の壁、文化の壁、そして染みついた戦闘訓練によりなじめないながらも日本になじみつつあり、しかし死の影に慄きつつ戦いから逃れられないという葛藤と矛盾が随所に感じられます。今の時代だからこそ読むべき作品です。

弁護士 / 三葛敦志

■ 強烈な設定からの緩急が素晴らしく、序盤からすぐに引き込まれた。現実世界にリンクした内容をフィクションの中で鮮やかに描いている。次の展開が常に気になる作品。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

■ テロ組織から逃げ出した島崎と、彼を追う組織との攻防。ピリついた空気感の回もあれば、島崎の日常回は穏やかで彼の守りたい世界が描かれている緩急が素晴らしいです。

女優 / 齋藤明里

「変声」はやしわか

■ 2024年は、はやしわかを知ったことで記憶される年となりました。今年にはほかに『イエスタデイ・ワンス・モア』『銀のくに』と出版が続きましたが、ここでは『変声』をあげたいと思います。ソプラノからアルト、バスへと声変わりしていく思春期の男子、好きという気持ちにもいろいろな好きがあって、しかしそのどれともまだ名づけられない、そんな不安定な帰らぬ時間の貴さをこれほどみごとに表現した漫画はこれまでもなかったような気がします。

教員 / 戸田穂

「冒険者絶対殺すダンジョン」道満晴明

■ 数々の異世界転生モノがあり、その数は回りしれず私も知らないけど、その中でも異質なものを教えてくれと言われてたら間違いなくこれを推す。世界観もメタ表現もくだらなさもどれも一品

鳥取県立高等学校教諭 / 佐川 由加理

「僕×スター」肥谷圭介

■ 人生どん底を味わった男たちの再起をかけたボクシング漫画。ショッキングな第一部の結末でしたが、熱さそのまま、第二部もさらにワクワクする展開。様々な人たちの運命が四角いリングに吸い寄せられていく物語は興奮の連続で、彼らの言葉が私めがけて打ち続けてきます。この先、ミサイルパンチが最強王者を倒すのか、見届けます！

書店員 / 野口忠義

「ぼくの好きな人が好きな人」つづら涼、葵せきな

■ 主人公の少年、女性部長、後輩の女の子の三角関係が最高です。「生徒会の一存」の作者が原作だけに、話の密度が濃く、ストーリーの起伏、伏線の張り方も巧み。ラブコメ好きは必見。

サブカルライター / 河村鳴紘

「僕の呪いの吸血姫」金井千咲貴

■ 何をすれば読者が喜ぶか、どう描けば楽しんで貰えるかを凄く考えてるんだらうな、と特に感じた最新7巻。漫画がエンタメである事を再認識しつつ、読んで終わりではなく、SNSで語り合ったり、他者とコミュニケーションを取る為のツールである点にも着目すると、面白い漫画を描いて版元顔負けの発信もする、作者さん自身のマーケティング力に脱帽です。

中央書店 / 井出麻悠美

「星喰い殺しのイグナロ」山路新

■ ナウシカのマンガ版のようなイラストの絵のテイストな時点でだいぶ好みなのですが、巨大なメカ、虫、そのすべてにわくわくする・・・これはまさにフェチに刺さるマンガである！まずはナウシカや機械、アーマードコアなど

の巨大メカが好きな人は試し読みをしてみてほしい。メカ設定集なども充実、おすすめです。

クラスター株式会社広報 / 西尾美里

「星屑の王子様」茅原クレセ

■『星屑の王子様』は、注目の現代劇であり喜劇です。舞台は新宿歌舞伎町のホストクラブです。主人公二人のエースホストが織り成す、すごくすごくダメだめな部分が面白い作品です。ポイントは現代の人間劇がリアルに描かれているところ。ホストクラブの華やかさの裏には、生っぽくて汚い人間関係がたくさんあり、その描写がめちゃくちゃリアルです。トータル境界の現実さながら、ホスト同士の競争や嫉妬、客との駆け引きが非常に見応えあります。あまりの非常識さはある意味ファンタジーです。シリアスな場面や暗いテーマを扱っているのに、笑いに変えてしまうセンスが光っていて笑えるシーンばかりなのですが、冷静に考えると全く笑えない話だったりして、その二面性が楽しめます。

会社員 / 佐藤優

「星野くん、したがつて」オジロマコト、ほしのディスコ

■ 良いじゃん、良いじゃん??、なんて思いながら、読みました。こんなやりとり、良いんじゃない?と思います。羨ましいですね。良いなあー。

書店員 / 桶谷佳代

「ホタルの嫁入り」橋オレコ

■ 主人公の紗登子と殺し屋進平の立場違いのストーリー。筋の通った強さを持つも、体の弱さがある主人公に殺し屋で他に興味をもてない進平が真っ直ぐに思いを向ける。複雑な環境のなか、誰が味方で誰が敵なのか…テンポの良いストーリーと美しい作画で一気に読み進めてしまいます。

図案家 / 橋本 寛子

■ 名家に生まれた令嬢と殺し屋の契約結婚ラブストーリー。自分の身を守るために結婚を申し出て、初めは恋心も無かった令嬢の心が少しずつ動かされていくのがとっても愛おしい。登場人物はみな芯があり、弱さもあり、人の温かさや情動が見られて心が動かされます！

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

「ほたるロードマップ」安堂ミキオ

■ ありきたりになりますが、一度きりの人生、やりたいようにやるのが一番いいよねって清々しいきもちになれるマンガです。バイクかー、ハードル高いけど憧れはある（カブ）。

NIC リテールズ株書籍仕入部 / 池本 美和

「ホテル・メツァペウラへようこそ」福田星良

■ ジュン、素敵なお友達もできて、本当に良かったねえ、と、心が暖まります。このお話には、愛が溢れていて、暖かい気持ちになります。読み進める度に、良かったねえ、と思いながら、楽しく読んでいます。

書店員 / 桶谷佳代

■ フィンランドのこじんまりとしたホテルを舞台に、様々な人生を経験してきた人たちが集まり、自分を解いていくストーリーにグッとくるものがある。解きかたは、ありきたりのハッピーエンドではなく、ほんのり悲しみを帯びていたり、印象深い。

自営業者 / 小野裕子

「魔王城の料理番 ～コワモテ魔族ばかりだけど、ホワイトな職場です～」ワイエム系

■ コワモテ魔族たちだが、見た目反して優しく、とってもホワイトな職場 w しかもラブコメ要素ありからのちゃん料理もするって言うなんともしゃべりな漫画（笑）とりあえずゾルトがかっこいいとか可愛い…です！

元 SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

「贗 まがいもの」黒川裕美

■ 贗（まがいもの）でありながらも、作品に命を吹き込む主人公の描写は一見の価値あり。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス 営業企画マネージャー / 阿部大介

■ 絵もキャラデザも好みで、日本画を齧った事のある身としては親近感もあり、贗作を作るための試行錯誤が読んでいて面白かったです。ただ勝手にこの作品のキモは、終始纏わりつく後ろめたさ（贗作を売って騙してお金を稼いでいる点）なのでは無いかと思っています。どんなに登場人物がキラキラと喜んで輝いていてもその罪の仄暗さが頭から離れない。その対比が返って新鮮で面白い。現時点で複数の不安要素が散りばめられているので、どう風呂敷を纏めるのか気になる作品です。

フリーランス / 金輪英恵

■ 売れない幽霊画家が贗作に手を出してしまう…その迫力の絵よ！オープニングの見開きの幽霊画に惹きつけられて、贗作を描き始めるシーンは思わず鳥肌立ちました。繊細でいて大胆な絵柄が世界観に引きずり込んでくれる。

元 SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

「またのお越しを」おざわゆき

■ 最近、自分が着物に興味を持ち始めたタイミングで出会った漫画でした。決して「着物が楽しい！」だけの漫画ではないです。真面目だけが取り柄の枷耶子と、楽観的でゆるい従妹・のえるの性格も含めて、和小物カフェを経営していく展開は胃が痛くなりそうになることもしばしば。着物や和のお店の経営って本当に大変そう、、、でも漫画に出てくる着物姿がとっても可愛い？！！の繰り返しで心が忙しいです（笑）4巻以降は電子のみですが、こちらも女性ならではの視点で描かれており、お店がオープンした後もリアリティがあります。表紙の2人の着物姿の絵がいつも可愛くて新刊が出るたびに楽しみです。

営業 / 佐々木つむぎ

「MAD」大鳥雄介

■ 「未知との戦い」「人類のほとんどが滅んだ」「強い兄妹愛」分かりやすいわくわくの要素。垣間見える人間の本性が生々しくてとても好き。正義と悪の境目がわからなくなるが、そこを含め今後の展開が楽しみになる作品。

スターダストプロモーション・アイドル / 秋本帆華

「魔のものたちは企てる」ガシガシ、加藤 拓武

■ 舞台や演劇が好きだ。でもそれ以上にその裏方をおったドキュメンタリーが好きだったりする。基本男子中高生が好きそうなノリの漫画なのだけど、サンドウィッチの上のパセリのためだけに全力をかけるような無駄とも言える努力が面白くてたまらない

鳥取県立高等学校教諭 / 佐川 由加理

「MA・MA・M a t c h」末次由紀

■ 自分も、親なので思う所があり、頑張っている子供を支えるお母さんたちも頑張ってる、そんなお母さんたちのリアルや気持ちが、ママ頑張れ！と身近な感じで応援したくなります

tetote 代表 / カ丸 真

「魔々勇々」林快彦

■ 連載が終わってしまった。しかしコミックス4巻刊行に際し大幅に加筆され、物語が見事に着地して完結している。十分に練られたストーリーと、作品タイトルに始まり各キャラクターの技名でも踏襲される命名の綾。本作が気になっていた方はぜひコミックス全4巻を完走していただきたい。

会社員 / やのこうじ

「まりあず〜 Revenge of Rock' nRoll Sisters 〜」川島よしお、ムラマツヒロキ

■ いわゆるバンドものだけど、みんな一癖あるキャラクター達で普通ではない展開に引き込まれる。川島よしお先生

の描く表情や一瞬の変なポーズが最高。

医師 / 岸本 倫太郎

「みい子セレクション～LGBT編～」おのえりこ

- 『こっちむいて！みい子』からLGBTの男の子のエピソードをまとめたもの。人に言えない辛さを描いているけれど、理解ある人が多くてわりとあっさり解決する。そこが物足りないかということそうでもない。だってみい子だから。
八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

「みずぼろ」水口尚樹、一色美穂

- 絵も綺麗で真面目な雰囲気を出しているのにギャグ漫画なところがとても好きです。話の長さも丁度よくテンポよく読めます。最近出あった人にお勧めしています。

デザイナー / 玉澤綾子

「みどろ」三輪まこと

- 時代背景や絵の感じがとても好きです。描写は暗いのですが、そこで生きる女性の力強さもあり、情緒的な感じも良いです。退廃的な風景の中に少し光があったりする描画が良い。

デザイナー / 平沼寛史

「宮王太郎が猫を飼うなんて」山崎将

- 今のところ変な人しか出てきていない。でもなんだかんだ主人公がいつの間にかニコロに夢中になっていてほほえましいです。

デザイナー / 玉澤綾子

「みやこまちクロニクル」ちほちほ

- 岩手県宮古市在住の50代独身男性の日常を描いたエッセイコミック。それは誰にも共通する平凡な日常とは言え、東日本大震災では津波に襲われ、コロナ禍には日本中が等しく立ち竦み、介護していた父親は老衰で亡くなる。そんな人生に起こる由無し事を、ドラマティックな演出を排して、日々の風景と共にただ淡々と記録してゆく。このまま、どんな形でも良いので、彼の生涯を記録し続けてもらいたい。それはきつとノンフィクション漫画の極北とも言える作品になるだろう。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

「MUJINA INTO THE DEEP」浅野いにお

- 隅々までカッコイイ。ムカつくぐらいたまらない。

PENICILLIN / HAKUEI

「目の前の神様」久野田ショウ

- 言い得て妙な気持ち悪い一手。まだ見ぬ、理解されない一手。気がついたらハマってる感じが良いです。

教師 / 持丸 宏司

「メリー・ウィッチーズ・ライフ ～ベルルバジルの3人の未亡人～」メノタ

- 未亡人たちが夫を生き返らせたいと魔法修行に奮闘！だが、どこか不穏な空気もあり、しかし、主人公の未亡人たちが本当にのんびりほんわかとして不穏な空気もどこへやら。ストーリーの作り込みとホッコリを同時に味わいたい人へ

鳥取県立高等学校教諭 / 佐川 由加理

「モノクロのふたり」松本陽介

- ひとりでは叶わず諦めた夢を、もう一度手に取るふたり。輝かしいモノクロの世界から、冷めない熱を感じる。ま

だ読んでいない、いろんな人に薦めたいです。

教師 / 持丸 宏司

「やじきた異世界道中記」市東亮子

■まさかあの！やじきた学園道中記が異世界物に？！！びっくりしましたが、やじきたコンビは健在！！やっぱり異世界でも強いね！きたさん、小鉄、相変わらずカッコ良い！やじきたメンバーに会えて嬉しい！ますますの大暴れに期待しています！

主婦 / 岸本しのぶ

「山田君のざわめく時間」中丸雄一

■エレベーターの話では泉昌之の「夜行」を思い出した。だいたいそんな感じのネタばかり。極私的で些末な出来事を思いっきり広げてる。嫌いじゃない。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

「ヤンキーアシスタントの芹沢くんに恋をした」あけび

■SNSでたまに読んでいたらなかなか進まない2人のことが気になって仕方なくなり、普段少女マンガ的恋の進展の遅さは苦手で読まないにも関わらず気になって気になってしまいマンガ本を買ってしまった！続きが気になるのであけび先生どんどん新刊出してくださいー！

カメラマン / 平沼 久奈

「羊角のマジョロミ」阿部洋一

■創作者のなかには闇と光がある。絶望をかかえながらそれを光にかえつつ葛藤をマンガにする。フィクションとメタフィクション、現実と創作、その葛藤が丸ごと入った、阿部洋一流のメタフィクション。光が信じられなくなった者が、どのようにして自分を救うのかを描いたノンフィクション。これまでの和風レトロからうってかわって、ファンタジックな独自路線をつきつめ、さらに作家性を増した作家のひとつの到達点。

作家 / 海猫沢めろん

■独特すぎる絵柄と世界観が本当に唯一無二です。3巻完結。これまで同様フェティズムが炸裂しつつ、最終巻はかなり意外な結末で最後までワクワクさせられました。完結したこのタイミングで是非読んで欲しいです。

会社員 / 小野塚博之

「ようこそ！FACT(東京S区第二支部)へ」魚豊

■正面から描かれるべきテーマだと思うし、著者が「チ。」の次にこのテーマを選んだということが二重にくっとくる。「信じる」という行為は恐らく現実には存在せず、あるのは「信じたい」だけなんだろう。中盤からドストエフスキー的な孤独の暴走へ移行していくあたりが最大の読みどころでした。

会社員 / 末永龍介

「ヨシダ檸檬ドロップス」若木民喜

■京大生の青春×プロレス×マンドリン×自分探し×恋愛その他もろもろの、どこか懐かしささえ感じさせる大学生たちの魂のマンガです。めっちゃ好き～！

NIC リテールズ株式会社書籍仕入部 / 池本 美和

「黄泉のツガイ」荒川弘

■やっぱり胸が熱くなる荒川弘先生の作品はバトルの緊張感もストーリーも抜群です。シリアスとギャグのバランスも先生の真骨頂。1巻から毎年マンガ大賞に推してきました！！今年投票最後なので本当に是非。おもしろさは更新し続けています・・・！

図案家 / 橋本 寛子

- 物語はまだまだ序盤、「起」の段階だという感じですが、続きが楽しみで仕方がない。両親を探すという最初の目的は果たされていないものの、足取りについては小出しに情報が提示され説明されていくが、それに纏わる新たな謎や人物が登場し、それも少しずつ正体が明らかになってくるが、またさらに深い闇と大きな謎がでてくる…と、読み進めるほどに引き込まれていく展開が素晴らしい。

丸善ジュンク堂書店・書店員 / 小磯洋

- スピーディな物語の展開で、とても引き込まれる。シリアスな場面とギャグの場面のバランスも心地いい作品。家族みんなで読めるので、それも嬉しい。

自営業者 / 小野裕子

- 他の作品に類を見ない舞台装置の面白さに読者を引き込む謎、それが解けてもさらに深まる謎。読み進めれば進む程に世界観に引きこまれます。重たくなりそうなストーリーながらコミカルなやり取りを交えて軽やかに進むのは流石の荒川節。

会社員 / 津田圭

「RIOT」塚田ゆうた

- 雑誌は人間の「伝えたい」という情熱のかたまりのようなものだと思います。その情熱は今の時代インターネットでいくらでも発散できるものではありませんが、あえて「ZINE」を選び、仲間と共にそれを形にしようとする高校生たちの行動力と創造力に感心しました。まだ一巻しか出ていないのですが、彼らの熱に惹かれた仲間が増えていきそうなワクワクが詰め込まれていて、この導入部分だけでももう虜になりました。

伊古書院 類家店 / 中村深雪

「雷雷雷」ヨシアキ

- 何より最初に薄々感じてた「よくありそう」といった感覚から少しずつ良い意味でズレてきていて、王道の中にある邪道が今後への期待を高めているように感じる。あと、ファッション性も好き。カラーや、スニーカーの描写など。

イロイロ屋 / 杉本善徳

「竜送りのイサギ」星野真

- 陸獄島で罪人の首打人のイサギは斬ったものの記憶が見えてしまう「さとり」。名将タツナミと出会い、心動かされ、結果自分の手で斬首するはめになるが、その瞬間見た光景の見開きが美しい…。王道ファンタジーの匂いがしつつも、濃いキャラとその背景もしっかり書かれていて、なにより、見せ場の絵が細かくて美しい！

元 SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

「龍とカメレオン」石山諒

- すでに評価されている作品ですが、改めて素晴らしい作品だと思います。芸術を生み出す側にいる身としては、毎回胸に刺さります。是非。

オフィスオーガスタ マネージャー / オフィスオーガスタ樋口健

「林檎の国のジョナ」松虫あられ

- 「自分がどんな言葉で傷つくのか」「逆に自分のどんな言葉が人を傷つけるのか」互いに悪気無くても起こりえるすれ違い。それによって起きる普遍的な悩みが丁寧に描かれていて、自分の中に新しい価値観が生まれそうな物語だなと思いました。新しい名前をもらって、新しい自分を始めていくジョナのこれからがとても気になります。ジョナが着ている洋服がとても可愛くて、みんながこんな風に自分の「好き」を一番に考えて生きていける世界ならいいのにな、と思います。

伊古書院 類家店 / 中村深雪

- 繊細な人の気持ちを大切に抱きしめるように丁寧に描写しているが、単なるやさしい物語ではなく、繊細な人、特に子どもを絶対を守る!! という熱さ・力強さも感じる。私も守る人の一員になります!! という思いをさらに強くした次第です。

ライター / 門倉紫麻

「ルーム・ツアーズ」マツモトトモ

- 裏表紙のあらすじを読まずに読み始めるとちょっとした驚きがあります。小説やアニメではなく漫画だからこそ味わえるやつです。何も知らずに読み始めてよかった。マツモトトモ先生が描くどえらい美形が大好きですありがとうございます。ごさいます助かります。家やインテリアに興味がある人にもない人にもおすすめです。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

「るなしい」意志強ナツ子

- 新興宗教の教祖が主人公という聞くだけでとんでもない設定だが、中身の詰まり具合が素晴らしくリアル。学生男女の恋愛やスクールカースト、親ガチャ、思春期にみんなが考えたり悩んだりする内容に宗教的要素が自然に絡んできて、それぞれの心自体に恐怖を感じる。設定の奇妙さからして自分と遠い世界に思えるものを漫画を読むだけでまるで自分ごとのように感じさせる素晴らしい作品でした！

OKAMOTO' S / オカモトショウ

- この漫画はヤバいです。内容も面白さも。人が人を崇める事の妖しさというか、それが金になる妖しさみたいな物が描かれています。何か怖いけどこの漫画からは目が離せない、そんな作品です。

芸人 / ムーディ勝山

「ルリドラゴン」眞藤雅興

- 本屋さんで表紙を見かけつつ、少し遠目にみていたのですが、2巻が出たのをきっかけに読ませていただいたら、まあすごい。遠目に見ていた時間がもったいなかったです。是非。

オフィスオーガスタ マネージャー / オフィスオーガスタ樋口健

- まずは続きがまた読めたことが嬉しくありがたいです。これからも長く読んでいきたい作品。

医師 / 岸本 倫太郎

- 絵も可愛いし設定も面白い。こんな設定なのにほのぼの学園ものなのが好きです。普通の学校生活の中で少しだけ人と違う要素がある主人公に対してみんな普通に受け入れているのが面白いです。

デザイナー / 玉澤綾子

- 我々マンガ好きには1年休載なんて余裕で待てますとも。3年5ヵ月ぶりの33巻も4年ぶりの16巻も待てる者達なので面構えが違う。むしろ新刊が出ず投票できなかった前回マンガ大賞の…ッあの忸怩たる思いッ“待”ってたぜエ！！この“瞬間”をよォ！！いや！限界だ推すね！今だッ！（ドドドドドドド）ほんとに好き。休載中もずーっと1巻を繰り返し読んでいたからたぶん亜豆ちゃんレベルに暗唱できるわ。いやあれはちょっと違うか。ありがちな「主人公ゾーン」が展開されてご都合主義なクラスメイトに囲まれるんじゃなくて、明確な拒絶の意思を突き付けてくる人もいてこういうのって基本的に主人公へ感情移入しながら読む影響で直にココロに来るから、すごい展開がチャレンジングだなと思った。作中で「あ、このキャラクターはこのセリフ・この展開のために（作者に）喋らされてるな」って思ってしまっちゃや冷めることがあるのだけドルリドラゴンではそれが全くなくて、どの登場人物もしっかり人格を持ってそれぞれに思考している感じがとてもリアルなもの作品の大きな魅力。2巻タイトルの「仲良い必要ないんだよ」は、SNS時代の今だからこそもっとみんなそう思って良いのかもしれない。初めて出てきたクラスメイトに名前の紹介（キャラの近くに出てくるフルネーム付が書かれた枠）が無いのも、つまり他人に無関心っていう表現だったわけでそういえば日頃の自分もそうだし、頻りに会うから顔はなんとなくわかるけど名前が合致していない人はみんなしおたさんだ。でもさあ…！最近の更新ではさあ…！！ってなるのもう我が子の成長を見守るような目で読んでます。

会社員 / 布施直人

- 再開されて本当に良かった！ルリがとにかくかわいい。

会社員 / 林礼春

「令和のダラさん」ともつか治臣

- ものすごい描写力とストーリー構成ができる人が一見ホラーかとおもいきやコメディを描いている。そんなこと

がと思うだろうがとても面白い。まいどよくこうバランスを取って面白くできるなとコミックスが待ち遠しい

鳥取県立高等学校教諭 / 佐川 由加理

- 流行れ！ アニメ化しろ！ ラッピングバスとか電車とか走れ！洒落怖由来の怪異があなたのお隣で見守るよマンガ。昔、ニコニコ動画でとんでもねえ熱量でとんでもないクオリティのTRPGリプレイ動画【汚っさんの備忘録】をやっていた方のマンガ。ハッタリの効かせ方とか理屈の付け方が上手い／好みでつい楽しんでしまう。1コマのなかにちょろっとでてくるだけのガジェットに裏設定考えてしまったり（実在しないアニメのポスター！）そういう気質なんだろうなあ好きなんだろうなあというのが垣間見えて楽しい。作者の癖であろう、ブサイけど肉感的なお姉さんがたらふく味わえるのもよい。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

「ロックは淑女の嗜みでして」福田宏

- ギターをガン鳴らす姿はカッコ良い。ドラムをドガドガとブツ叩く姿はカッコ良い。ベースをゴリゴリと弾く姿はカッコ良い。キーボードをガシガシと叩く姿はカッコ良い。それが誰であってもカッコ良いことに変わりはないのに、ギターもドラムもベースもキーボードも、ロックが真剣に心底から大好きで、その思いを楽器にぶつけて音楽として引っ張りだそうとしているのだからカッコ良さも何十乗になって伝わってくる。福田宏の『ロックは淑女の嗜みでして』（白泉社）とはそういうマンガだ。演奏しているのが（一応は）生粋のお嬢さまたちで、日ごとは清楚にふるまい上品な言葉遣いで会話をしているながら、ロックに向かうととたんに抑圧が弾け、熱があふれ出して汗が飛び散るギャップがあるからカッコ良いという訳ではない。いや、それもカッコ良さに大きく貢献はしているも、核となるのは音楽への気持ち。それがふんだんにあるからこそ、カッコ良さにシビれてしまうのだ。そんなカッコ良さを最も体現しているのが、主人公でギターの鈴ノ宮りりさではなく、同じ学園に通い親は重鎮の政治家という黒鉄音羽だ。スラリとしたスタイルで黒髪に笑顔を絶やさない顔立ちは誰がどう見てもお嬢さま中のお嬢さま。その音羽が校内の廊下でなぜかピックを落とし、不思議に思ったりりりさが近づくと誰も来ない旧校舎でドラムを叩いていた。ヴァイオリンやピアノは嗜んでもギターなんて誰も弾かず、ロックという言葉すら言うことにはばかれる環境で、激しいドラムを叩いていた音羽に誘われりりさはギターをかき鳴らし、それが音羽を刺激してセッションとして盛り上がっていく。そして終わった後にこやかに讃えなう、なんてことはまったくなく、音羽からは激しくそして卑猥なタムも混じった言葉が飛んでりりさを煽り、応えてやがて二人はセッションを重ねるようになっていき、そこにキーボードの院瀬見ティナやベースの白矢環が加わってバンドとしてライブハウスに出るようになる。ボーカルがない？音楽を、ロックを心底から楽しみ自分で体現したいと思っているレディたちにボーカルは不要。それぞれがかきならす楽器の交わりこそがロックだという、そのピュアさに妙に引かれてしまう。りりさは母親の再婚でお嬢さまになっただけで、音羽も周囲には黙っていて、環も同様に言えではお嬢さまを演じている。ティナは貴公子然として女子から慕われる立場。そうした日常の偽りをかなぐりすててここだけが自分たちの居場所なんだとすべてを発散しようとしているから、響いてくるのかもしれない。そうした思いを、熱さを激しくてダイナミックなポージングで描いて連ねていく福田宏の筆が、読む人を居ながらにしてライブの場へと引きずり込み、耳に聞こえないインストのロックを浴びせてくる。『ふつ々の軽音部』の鳩野ちひろが歌声で魅了するなら、『ロックは淑女の嗜みでして』のロックレディたちはサウンドで圧倒する。どちらが上でも下でもない。どちらも過去から未来における音楽マンガの金字塔と言えるだろう。いよいよアニメ化も決まって実際に響く音は、マンガのロックレディのように観客を、そして読者を震わせられるのか？見守りたい。いや聴き及びたい。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

- 出てくるロックナンバーは懐かしくも馴染みのものが多く、音楽好きに突き刺さる

会社員 / 齋藤隼

「私と脱出しませんか？」ヨウハ、SCRAP

- 脱出ゲームをモチーフにしたラブコメディ。発想自体はシンプルだが、周りが主人公たちを見守る優しい場を醸しつつ、プロットとリンクする大量の創作パズルを盛り込んだセンスが秀逸。全八巻で完結した今こそ推したい。

書評家・ライター / 福井健太

「渡り鳥とカタツムリ」高津マコト

- 「ボーイ・ミーツ・ガール」&「旅は道連れ世は情け」いつも古くて新しいテーマをわくわくドキドキ楽しく読ませてもらいました。キャラクター造形も秀逸でとってもおすすめの一作です。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

「ワレワレハ」松枝穂積

- 大学デビューした大学生と、地球人(大学生)に擬態している宇宙人の噛み合わなさそうな会話が不思議と噛み合ってしまう絶妙感が秀逸。「彼氏が欲しい」→「朝起こしてくれて、車で送ってくれて、丁寧な暮らしの手助けをしてくれるような…」→「それって、爺や(執事)じゃない?!」って流れが昨年1番の印象的な話でした。

鳥取県立図書館 / 野間勤